平成 28 年度
ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

試掘調査

堀口遺跡（第 22 ～ 24・26・28 次）
下高井遺跡（第 6 次）
御所内 1 遺跡（第 1 次）
館出遺跡（第 2 次），笠谷古墳群（第 1 次）
三反田新堀遺跡（第 18 次）
市毛本郷坪遺跡（第 7・8 次）
本郷東遺跡（第 4 次）
向坪遺跡（第 3・5 次）
東原遺跡（第 8 次）
岡田遺跡（第 29 次）
地蔵根遺跡（第 2 次）
大平 B 遺跡（第 1 次）
宮前遺跡（第 1・2 次）
遠原遺跡（第 3 次）
市毛上坪遺跡（第 16 次）
内手遺跡（第 2 次）
磯合古墳群（第 3 次）
筑波台遺跡（第 4 次）
雷遺跡（第 5 次）
金上塙遺跡（第 10 次）
黒袴遺跡（第 5 次）
市毛下坪遺跡（第 12 次）

本調査

岡田遺跡（第 28 次）
堀口遺跡（第 25 次）
向坪遺跡（第 4 次）
本郷東遺跡（第 5 次）

2017

ひたちなか市教育委員会
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

1　本郷東遺跡第 5 次調査区第 3 号住居跡

2　笠谷古墳群第 1 次調査区第 1 号墳（笠谷古墳群第 11 号墳）

4　岡田遺跡第 28 次調査区第 2 号住居跡出土土器

3　笠谷古墳群第 1 次調査区第 2 号墳（笠谷古墳群第 12 号墳）

序　文

ひたちなか市は関東平野の北端部にあたり，茨城県の中央部からやや北東に位置し，那珂川河口部左岸の人口約 16 万人の街で，県都水戸市に隣接しています。市域は，標高 30 m前後の起伏の少ない平坦な台地で，台地を浸蝕して那珂川やその支流の中丸川等の小河川が流れています。これらの河川の流域や台地上には，肥沃な田畑や宅地などが広がっています。

当市の東側は太平洋に面して約 13km の海岸線が続き，那珂川などの河川流域の台地上は，原始・古代から人々の生活の場として栄え，三百数十箇所の集落跡・古墳・城館跡などの遺跡が確認されています。

このなかでも，装飾壁画で知られる虎塚古墳は国の史跡指定を受け，市を代表する遺跡として多くの市民に知られております。また，隣接する十五郎穴横穴墓群は近年確認調査が行われて，全体で 274 基もの横穴墓が確認され，未確認のものを含めた総数は 500 基を超えると考えられ，東日本最大級の横穴墓群であることが判明し，今後の保存と活用が期待されております。

このように，ひたちなか市は全国に誇れる文化遺産に恵まれる一方，毎年住宅等の開発行為が活発に行われており，やむを得ぬ理由で失われていく遺跡の記録保存を図るため，事前に確認調査等を実施しております。

今年度も，ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に委託して，市内 23 箇所の埋蔵文化財包蔵地内において 33 件の調査を実施いたしました。本書はこれらの確認調査等の記録をまとめたものであり，それぞれの調査は小規模なものではありますが，毎年の調査の積み重ねにより，多くの成果を得ることができました。

最後になりますが，快く調査のご承諾をいただきました事業者・地権者や，調査に参加されました皆様に感謝申し上げますとともに，調査や本書の作成にご指導，ご協力を頂きました関係各位の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

ひたちなか市教育委員会
教育長　木下　正善

例　言

1　本書は，平成 28 年度国費補助事業として，ひたちなか市教育委員会の委託を受けて，公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施したひたちなか市内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書は，平成 28 年 1 月から 12 月にかけて実施した発掘調査についての報告であり，岡田遺跡・堀口遺跡・下高井遺跡・御所内Ⅰ遺跡・館出遺跡・笠谷古墳群・三反田新堀遺跡・市毛本郷坪遺跡・本郷東遺跡・向坪遺跡・東原遺跡・地蔵根遺跡・大平Ｂ遺跡・宮前遺跡・遠原遺跡・市毛上坪遺跡・内手遺跡・磯合古墳群・筑波台遺跡・雷遺跡・金上塙遺跡・黒袴遺跡・市毛下坪遺跡の計 23 遺跡について，29 件の試掘・確認調査を実施し，岡田遺跡・堀口遺跡・向坪遺跡・本郷東遺跡の 4 件について本調査を実施した。調査期間等は 2 ～ 3 頁一覧表のとおりである。なお，館出遺跡・笠谷古墳群は，中根の荒谷地区の畑地帯統合整備事業に伴う試掘調査であり，今回は平成 27 ～ 29 年度の 3 ヶ年調査計画の初年度の調査報告である。

3　発掘調査および整理報告は，ひたちなか市教育委員会文化財室の指導のもとに，公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり，組織は次のとおりである。

理　事　長	永盛　啓司	
副 理 事 長	木下　正博	
常 務 理 事	鈴木　隆之　　横須賀　重夫	
次　　長	大和田　栄治	
理　　事	杉山　和子　　大和田　健　　綱川　正　　永井　喜隆　　鈴木　一成　　加藤　恭子　　須藤　雅由	
監　　事	武藤　猛　　安　智範	
文　化　課 文化財調査 事　務　所	参 事 兼 課 長	西野　均
	副 参 事 兼 所 長	鈴木　素行
	課　長　補　佐	佐々木　義則
	係　　長	稲田　健一
	嘱　　託	菊池　順子

4　発掘調査の従事者は次の通りである。

調査員：佐々木義則

調査補助員：石川勉，石崎寿子，海老原四郎，岡野政雄，菊池順子，助川諒，坪内治良，飛田とし子，廣水一真，見越広幸，矢野徳也，渡辺恵子

5　整理作業及び本書の作成に従事したものは，次の通りである。

石川勉，稲田健一，海野美信，海老原四郎，岡野政雄，菊池順子，桐嶋美子，後藤みち子，佐々木義則，佐藤富美江，鈴鹿八重子，鈴木素行，坪内治良，飛田とし子，西野陽子，廣水一真，矢野徳也，渡辺恵子

6　本書は，佐々木義則が編集した。

7　本書の執筆と分担は以下のとおりである。

鈴木素行（弥生時代以前の遺物）　稲田健一（古墳時代の遺物）　矢野徳也（岩石同定）　佐々木義則（左記以外）

8　発掘調査の出土資料は，ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで一括保管している。

9　発掘調査及び本書の作成にあたっては，次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(50 音順・敬称略)

雨澤和彦，雨澤康雄，飯村誠一，磯崎友市，今関美絵，海老根亮一，大石純，大金博文，近江一成，小野寺巨樹，川上綾，川上龍平，菊池秀也，桑田秀雄，香陵住販（株），コシミツ産業（株），後藤貴博，小船好正，齋英蔵，齋圭介，清水勝男，清水寛之，鈴木達也，鈴木佳子，砂押信孝，関口慶久，（株）大栄建設，高野国男，高橋ひと代，（株）田本工務店，照沼広生，照沼美奈子，富岡秀行，永井彰一，中村あけみ，中村友美，西野宏，西野八州夫，西峰翔馬，塙良雄，平沢和太郎，藤原潤一，古川耕大，前嶋勝利，三木武夫，村田大輔，安栄治，安訓男，安完，安徳一，安敏広，山口智明，山下雄一

10　事務局は，ひたちなか市教育委員会総務課文化財室内に置き，組織は次のとおりである。

総　務　課 文 化 財 室	課　　長	湯浅　博人
	文 化 財 室 長	千葉　美恵子
	主　　幹	海野　美信
	主　　事	住谷　光男

目　次

Ⅰ　概要　1

Ⅱ　試掘調査報告　4

1　堀口遺跡　4
（1）第 22 次調査報告　4　（2）第 23 次調査報告　4
（3）第 24 次調査報告　5　（4）第 26 次調査報告　5
（5）第 28 次調査報告　6

2　下高井遺跡　6
（1）第 6 次調査報告　6

3　御所内Ⅰ遺跡　7
（1）第 1 次調査報告　7

4　館出遺跡，笠谷古墳群　7
（1）館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査報告　7

5　三反田新堀遺跡　28
（1）第 18 次調査報告　28

6　市毛本郷坪遺跡　29
（1）第 7 次調査報告　29　（2）第 8 次調査報告　29

7　本郷東遺跡　30
（1）第 4 次調査報告　30

8　向坪遺跡　30
（1）第 3 次調査報告　30　（2）第 5 次調査報告　30

9　東原遺跡　30
（1）第 8 次調査報告　30

10　岡田遺跡　31
（1）第 29 次調査報告　31

11　地蔵根遺跡　32
（1）第 2 次調査報告　32

12　大平Ｂ遺跡　32
（1）第 1 次調査報告　32

13　宮前遺跡　33
（1）第 1 次調査報告　33　（2）第 2 次調査報告　33

14　遠原遺跡　34
（1）第 3 次調査報告　34

15　市毛上坪遺跡　35
（1）第 16 次調査報告　35

16　内手遺跡　35
（1）第 2 次調査報告　35

17　磯合古墳群　36
（1）第 3 次調査報告　36

18　筑波台遺跡　36
（1）第 4 次調査報告　36

19　雷遺跡　36
（1）第 5 次調査報告　36

20　金上塙遺跡　38
（1）第 10 次調査報告　38

21　黒袴遺跡　40
（1）第 5 次調査報告　40

22　市毛下坪遺跡　42
（1）第 12 次調査報告　42

Ⅲ　本調査報告　44

1　岡田遺跡第 28 次調査報告　44
2　堀口遺跡第 25 次調査報告　55
3　向坪遺跡第 4 次調査報告　73
4　本郷東遺跡第 5 次調査報告　80

Ⅳ　東中根遺跡群における弥生時代後期「東中根式」の集落跡について（上）　89

Ⅴ　岡田遺跡の鉢形土器について　99

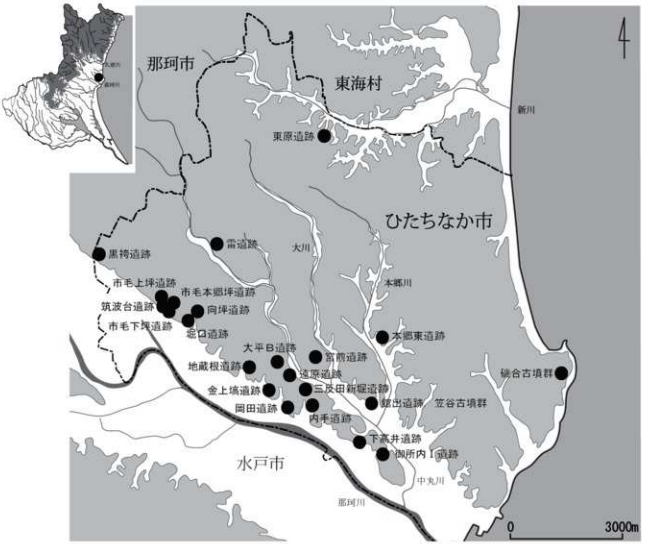
写真図版
報告書抄録
奥付

Ⅰ　概　要

ひたちなか市は，茨城県の中央部に位置し，面積99.93㎢，人口約16万人を擁する地方中心都市である。市域南側を東流する那珂川は栃木県那須岳に源を発し，茨城県のほぼ中央部を東西に横断し太平洋へと注ぐ全長150kmの河川であり，古くから流域の文化形成に大きな役割を果たしてきた。本市は，この那珂川河口左岸域に位置する。市域は那珂川の支流である中丸川・大川・本郷川により開析され，小支谷が発達する。市域の北側を東流する新川付近の低地は，近世まで真崎浦という入り江であったが，現在は広く水田化され，東海村との境となっている。

現在市内には，約300か所以上の遺跡が所在する。市域では昭和30年ごろから都市化が進み，周知遺跡内における個人住宅建設件数も増加の一途をたどり，そうした事態に対応すべく，昭和54（1979）年から，国・県の補助を受け，市教育委員会を主体とした市内遺跡発掘調査事業を継続して実施してきた。市内遺跡発掘調査は市内各地で実施されてきたこともあり，市域の埋蔵文化財の全体的状況を知る上で，その調査の成果は貴重な資料となっている。

平成20年度より，市内遺跡発掘調査事業は市教育委員会から，財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社（現公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社）に委託されるようになり，公社が主体となり実施されるようになった。平成28年は23ヵ所の遺跡において，試掘調査29件・本調査4件が実施され，館出遺跡における弥生時代後期住居跡の確認や，向坪遺跡における平安時代住居跡の調査，本郷東遺跡における古墳時代後期住居跡の調査等の成果を得ている。



第1図　調査遺跡の位置

第１表　平成 28 年市内遺跡発掘調査一覧

No.	遺跡名	調査次数	所在地	調査期間	調査原因	調査種別	対象面積	調査面積	主な遺構	主な遺物
1	岡田遺跡（おかだいせき）	28 次	三反田字岡田 3488 番 3	12 月 10 日～1 月 21 日	個人住宅	本調査	190 ㎡	113 ㎡	住居跡 5 基（弥生 1，古墳 1，平安 3），土坑 2 基（平安 1，時期不明 1），溝 1 条（時期不明）	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器
2	堀口遺跡（ほりぐちいせき）	22 次	堀口字表坪 108 番 1	1 月 13 ～ 15 日	個人住宅	試掘	339 ㎡	19 ㎡	住居跡 6 基（古墳 3，平安 2，時期不明 1），ピット 2 基（時期不明）	土師器，須恵器
3	下高井遺跡（しもたかいいせき）	6 次	三反田字下高井 5046 番 1	1 月 26 ～ 28 日	個人住宅	試掘	312 ㎡	44 ㎡	住居跡 2 基（奈良 1，平安 1），溝 2 条（奈良 1，時期不明 1），ピット 8 基（時期不明）	土師器，須恵器，鉄製品
4	堀口遺跡（ほりぐちいせき）	23 次	堀口字新地坪 156 番 36	2 月 16 ～ 19 日	集合住宅	試掘	935 ㎡	56 ㎡	住居跡 1 基（古墳），ピット 2 基（時期不明）	土師器，砥石
5	堀口遺跡（ほりぐちいせき）	24 次	堀口字新地坪 165 番 1，168 番 1	3 月 2 ～ 5 日	集合住宅	試掘	957 ㎡	55 ㎡	住居跡 2 基（時期不明）	土師器，須恵器
6	御所内 I 遺跡（ごしょうちいちいせき）	1 次	柳沢字御所内 474 番	3 月 16 ～ 23 日	個人住宅	試掘	588 ㎡	17 ㎡	土坑 1 基（時期不明）	須恵器，中世土器
7	舘出遺跡（たでいせき） 笠谷古墳群（かさやこふんぐん）	2 次 1 次	中根字舘野 3436 番 2 外 14 筆	2 月 2 日～3 月 25 日	畑地整備	試掘	48,662 ㎡	1,898 ㎡	円墳 2 基，住居跡 13 基（弥生），溝 11 条（時期不明），土坑 5 基（時期不明），ピット 6 基（時期不明）	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，石器
8	堀口遺跡（ほりぐちいせき）	25 次	堀口字表坪 108 番 1	4 月 12 日～5 月 20 日	個人住宅	本調査	340 ㎡	89 ㎡	住居跡 9 基（弥生 2，古墳 4，平安 3），ピット 14 基（時期不明）	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，土製紡錘車，刀子，砥石，臼玉
9	三反田新堀遺跡（さんたんだしんぼりいせき）	18 次	三反田字新堀 5231 番 7	4 月 13 日～19 日	個人住宅	試掘	394 ㎡	35 ㎡	なし	なし
10	市毛本郷坪遺跡（いちけほんごうつぼいせき）	7 次	市毛字本郷坪 484 番 2	4 月 19 日～5 月 2 日	集合住宅	試掘	1,836 ㎡	137 ㎡	住居跡 10 基（奈良・平安時代），土坑 1 基（時期不明），溝 1 条（時期不明），ピット 1 基（時期不明）	土師器，須恵器
11	本郷東遺跡（ごうのひがしいせき）	4 次	馬渡字本郷東 3792 番 8	5 月 9 ～ 12 日	個人住宅	試掘	234 ㎡	13 ㎡	住居跡 3 基（古墳 2，奈良・平安 1）	土師器，須恵器
12	堀口遺跡（ほりぐちいせき）	26 次	堀口字表坪 128 番 1	5 月 18 日～20 日	個人住宅	試掘	490 ㎡	26 ㎡	なし	なし
13	岡坪遺跡（おかつぼいせき）	3 次	堀口字岡坪 631 番 1	5 月 24 日～26 日	個人住宅	試掘	294 ㎡	38 ㎡	住居跡 3 基（奈良・平安），溝 1 条（時期不明），ピット 8 基（時期不明）	土師器，須恵器
14	東原遺跡（ひがしはらいせき）	8 次	高野字堂の上 1050 番 1	6 月 7 日～8 日	個人住宅	試掘	395 ㎡	32 ㎡	溝跡 1 条（時期不明）	なし
15	岡田遺跡（おかだいせき）	29 次	三反田字岡田 3497 番 1	6 月 14 ～ 17 日	個人住宅	試掘	247 ㎡	20 ㎡	なし	なし
16	地蔵根遺跡（じぞうねいせき）	2 次	勝倉字地蔵根 2808 番 1，2	6 月 29 日～7 月 1 日	宅地造成	試掘	993 ㎡	90 ㎡	住居跡 3 基（古墳後期 1，奈良 1，平安 1），ピット 1 基（時期不明）	土師器，須恵器，陶器，軽石
17	市毛本郷坪遺跡（いちけほんごうつぼいせき）	8 次	市毛字本郷坪 484 番 25	7 月 12 ～ 16 日	集合住宅	試掘	549 ㎡	70 ㎡	住居跡 4 基（奈良・平安時代）	土師器，須恵器
18	岡坪遺跡（おかつぼいせき）	4 次	堀口字岡坪 631 番 1	7 月 5 ～ 27 日	個人住宅	本調査	80 ㎡	100 ㎡	住居跡 4 基（平安），溝 1 条（時期不明），ピット 38 基（時期不明）	土師器，須恵器，馬歯
19	本郷東遺跡（ごうのひがしいせき）	5 次	馬渡字本郷東 3792 番 8	8 月 2 ～ 26 日	個人住宅	本調査	88 ㎡	94 ㎡	住居跡 4 基（古墳 3，時期不明 1）	弥生土器，土師器，須恵器，石器

No.	遺跡名	調査次数	所在地	調査期間	調査原因	調査種別	対象面積	調査面積	出土遺構	主な出土遺物
20	大平B遺跡（おおひらびーいせきあと）	1次	大平1丁目18番33	8月9～10日	個人住宅	試掘	319㎡	22㎡	なし	縄文土器
21	宮前遺跡（みやまえいせきあと）	1次	中根字宮前2752番2	8月18日～9月2日	個人住宅	試掘	310㎡	19㎡	土坑4基，ピット1基	縄文土器
22	宮前遺跡（みやまえいせきあと）	2次	中根字宮前2752番6	8月18日～9月2日	個人住宅	試掘	310㎡	19㎡	土坑1基	なし
23	遠原遺跡（とおはらいせきあと）	3次	金上字遠原1194番2・3	9月1日～6日	個人住宅	試掘	279㎡	26㎡	住居跡1基（縄文時代前期）	縄文土器，須恵器，石器
24	市毛上坪遺跡（いちけかみつぼいせきあと）	16次	市毛字上坪1263番3	9月15～17日	個人住宅	試掘	262㎡	27㎡	住居跡2基（古墳）	土師器，須恵器
25	内手遺跡（うちていせきあと）	2次	三反田字原3389番4	9月27日～10月4日	個人住宅	試掘	300㎡	24㎡	住居跡2基（奈良・平安時代）	土師器，須恵器
26	向坪遺跡（むかいつぼいせきあと）	5次	堀口字向坪593番5	10月4～5日	個人住宅	試掘	346㎡	17㎡	住居跡1基（9世紀），ピット7基（時期不明）	土師器，須恵器
27	磯合古墳群（いそあいこふんぐん）	3次	磯崎町字磯合3747番1	10月12日～18日	集合住宅	試掘	829㎡	94㎡	円墳1基，溝跡1条	なし
28	筑波台遺跡（つくばだいいせきあと）	4次	市毛字上坪1190番	10月19日～11月4日	農地形質変更	試掘	1,550㎡	186㎡	溝跡3条，ピット2基，土坑3基（近世1基）	土師器，須恵器，石器
29	堀口遺跡（ほりぐちいせきあと）	28次	堀口字表坪121番5外2筆	11月8日～9日	個人住宅	試掘	221㎡	16㎡	なし	土師器，須恵器
30	雷遺跡（いかずちいせきあと）	5次	東石川字雷3417番4	11月15日～17日	個人住宅	試掘	294㎡	16㎡	なし	なし
31	金上塙遺跡（かねがみはなわいせきあと）	10次	金上字塙812番9	11月22日～12月3日	道路，宅地造成	試掘	948㎡	163㎡	住居跡5基（奈良・平安4，時期不明1），溝跡3条（中世末1，時期不明2），土坑35基（中世2，時期不明33），ピット42基	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，陶器，内耳土鍋，かわらけ，鉄鏃，砥石
32	鳳神遺跡（ほうがいいせきあと）	5次	津田字若宮3416番	12月13日～16日	個人住宅	試掘	313㎡	23㎡	住居跡3基（弥生1，古墳2），土坑1基	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，石器
33	市毛下坪遺跡（いちけしもつぼいせきあと）	12次	市毛字本郷坪440番13・14	12月21日～22日	店舗建築	試掘	483㎡	31㎡	土坑4基（近世2，時期不明2）	土師器，須恵器，陶器，かわらけ

※堀口遺跡第27次調査は，特別養護老人ホーム建設に伴う本調査で，平成28年7～10月に実施した。発掘調査報告書は，別途作成予定である。

Ⅱ　試掘調査報告

1　堀口遺跡

(1) 第 22 次調査報告

調査地は，那珂川を望む台地縁辺から 80 mほどの場所に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は宅地であった。今回の調査は，3 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.7 ～ 0.9 mを測る。調査の結果，住居跡 6 基を確認した。遺物は土師器・須恵器が出土した。トレンチ出土の土器から判断すると，確認された住居跡の多くは古墳時代になると考えられる。なお，当調査区は建築主と協議の結果，検出された遺構の保護が図れないことが判明したため，本調査（第 25 次調査）を実施することとなった。

(2) 第 23 次調査報告

調査地は，那珂川低地から北方に入り込む小谷津奥部の台地縁辺に位置し，谷側に緩く傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は 6 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 0.9 mを測る。調査の結果，遺構は，住居跡 1 基，ピット 2 基が確認された。時期は，1 号住居跡が古墳時代中期，ピットが時期不明である。1 号住居跡は確認のため一部掘り込んでいる。遺物は，土師器・砥石が出土している。

遺物説明

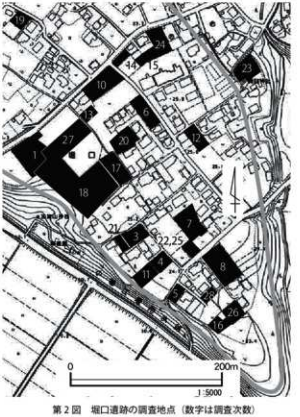
第 5 図

1　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（L × L）備考：胎土に金雲母を含む

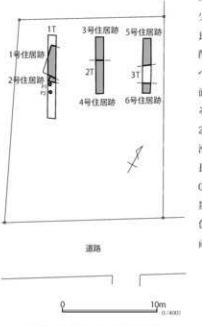
第 6 図

1　台帳：1 住 P1　材質：土師器　器種：坩　残存：胴～底部 100％　法量：器高（5.8），胴径 8.1　色調：外面赤～橙～黒褐色。内面橙～にぶい黄褐色　胎土：砂（白少，透多，黒多）　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヘラナデ。　使用痕：外面底部器面が摩滅している。　備考：―

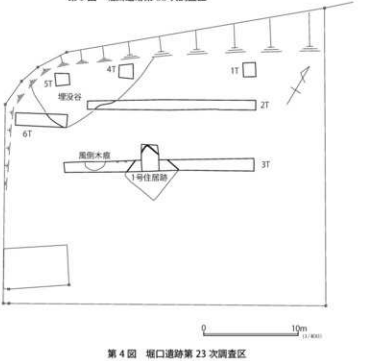
2　台帳：1 住 S1　材質：滑石　種類：鏃形　法量：長 9.1，幅 2.6，厚 0.5 ～ 0.6，孔径 0.2 ～ 0.4，重量 30.00g　色調：暗青灰色　備考：曲刃鏃。孔は両側穿孔。



第 2 図　堀口遺跡の調査地点（数字は調査次数）

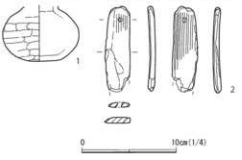


第 3 図　堀口遺跡第 22 次調査区



第 4 図　堀口遺跡第 23 次調査区

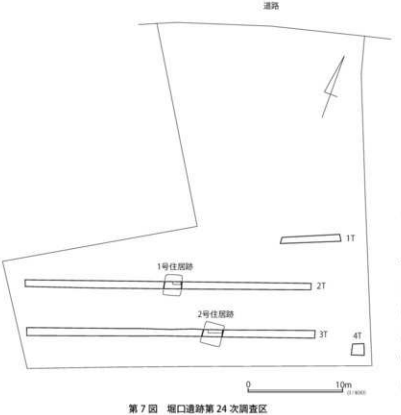
第 5 図　堀口遺跡第 23 次調査区出土遺物



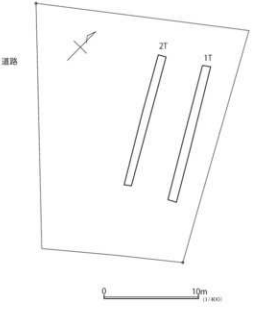
第 6 図　堀口遺跡第 23 次調査区第 1 号住居跡出土遺物

(3) 第 24 次調査報告

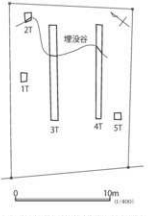
調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺から 250 mほど離れた地点に位置し，北方へ緩く傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 4 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ～ 0.7 mを測る。調査の結果，遺構は住居跡 2 基が確認された。時期は不明である。住居跡は確認のため一部掘り込んでいる。両住居跡とも，耕作や造成による攪乱がひどく，遺存状況はよくなかった。遺物は，土師器・須恵器が出土している。



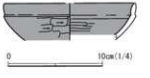
第 7 図　堀口遺跡第 24 次調査区



第 8 図　堀口遺跡第 26 次調査区



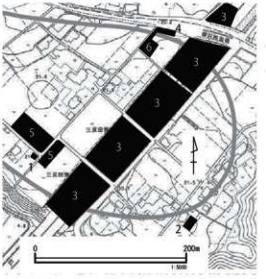
第 9 図　堀口遺跡第 28 次調査区



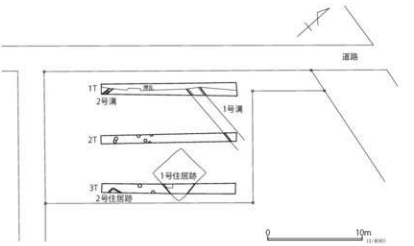
第 10 図　堀口遺跡第 28 次調査区出土遺物

(4) 第 26 次調査報告

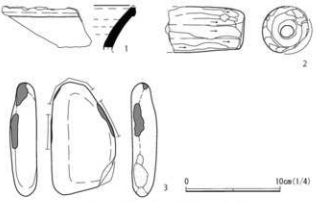
調査地は，那珂川低地と小谷津とに挟まれた台地の先端部付近に位置し，北西に緩く傾斜する地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は 2 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.6 mを測る。調査の結果，遺構・遺物とも検出されなかった。



第 11 図　下高井遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 12 図　下高井遺跡第 6 次調査区



第 13 図　下高井遺跡第 6 次調査区出土遺物

(5) 第 28 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺部付近に位置し，南東から北西むかって入りこむ浅い谷に向かって，北東方向に傾斜する地形を呈する。調査時は宅地として土盛りが施された平坦地となっていた。調査は 5 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.3 ～ 0.8 m を測る。調査の結果，遺構は検出されず，北東側に埋没谷を確認したのみであった。遺物は表土中より土師器・須恵器の小片が出土している。

遺物説明

第 10 図

1　台帳：4 トレ　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径 (14.0)，器高 (4.0)　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後，ヘラ削り。内外面とも黒色処理。　使用痕：―　備考：―

2　下高井遺跡

(1) 第 6 次調査報告

調査地は，中丸川低地を望む台地縁辺部に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.3 ～ 0.5 m を測る。調査の結果，遺構は，住居跡 2 基，溝跡 2 条，ピット 8 基が確認された。時期は，1 号住居跡が奈良時代，2 号住居跡が平安時代である。今回の試掘で確認された 1 号溝跡は，茨城県教育財団で調査された高速道路部分の調査区における 1 号溝跡の延長部分と考えられるため，奈良時代の溝跡と考えられる。1 号溝跡からは須恵器甕口縁部が出土しており，教育財団調査区 1 号溝からも須恵器甕が出土していることと共通する。なお 2 号溝跡およびピットの時期は不明である。遺物は，土師器・須恵器・鉄製品が出土している。

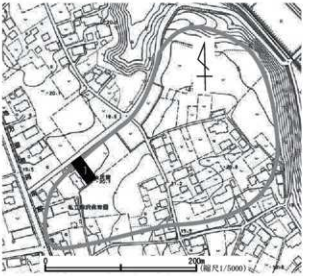
遺物説明

第 13 図

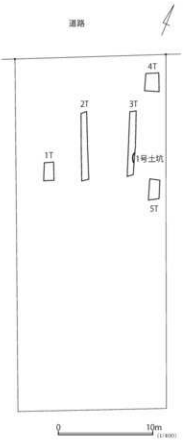
1　遺構：1 号溝　注記 2 トレ 1 ミゾ　材質：須恵器　器種：甕　残存：口縁部片　法量：―　色調：外面口辺部灰色，頸部暗灰色。内面灰色。　胎土：礫（白多），骨針少　技法等：焼成硬質。口唇部欠失。　備考：木葉下窯産か

2　出土位置：1 トレンチ　注記：―　材質：土師器　器種：土錘　残存：大きく欠失　法量：径 4.8，孔径 1.4，重量 177.1g　色調：褐色，黒色　胎土：礫（白少，灰少，茶少），砂（白）　技法等：ヘラ削り。

3　遺構：1 溝　注記：1 トレ 1 ミゾ　材質：石（砂岩）　器種：敲石　残存：一部欠失　法量：長 12.0，幅 6.8，厚 2.6，重量 318g　色調：灰色，灰褐色　技法等：側面に敲打痕が 3 ヵ所認められる。　備考：火を受けているか？



第 14 図　御所内Ⅰ遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 15 図　御所内Ⅰ遺跡第 1 次調査区

3　御所内Ⅰ遺跡

(1) 第 1 次調査報告

調査地は，中丸川低地を望む台地縁辺から 250 mほど離れた場所に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は 5 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.7 ～ 1.0 mを測る。調査の結果，遺構は土坑 1 基が確認された。時期は不明である。遺物は，トレンチ表土より，須恵器甕片や内耳土鍋片が少量出土している。

4　館出遺跡，笠谷古墳群

(1) 館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査報告

ひたちなか市中根に所在する荒谷地区は，国史跡に指定されている虎塚古墳（1 号墳）を有する虎塚古墳群や，笠谷古墳群などの重要な遺跡が位置する地域である。当地に畑地帯総合整備事業が実施されることとなったため，平成 27 年度から平成 29 年度にかけて対象地の試掘調査が実施されることとなった。平成 27 年度は館出遺跡および笠谷古墳群が対象となり，約 4 万 9 千㎡ほどの土地でトレンチによる試掘調査が実施された。

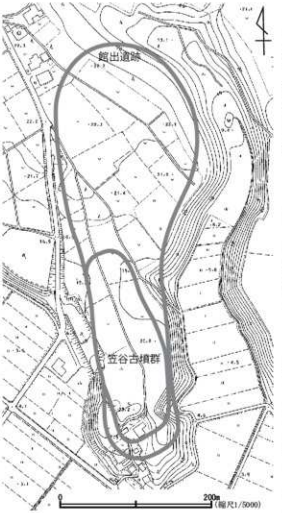
調査地は，本郷川の支谷に臨む台地縁辺に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査区の設定された台地の南端部は中丸川低地につき出しており，その部分には笠谷古墳群が形成されている。調査は 84 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 0.7 mを測る。

調査の結果，古墳（円墳）2 基，住居跡 13 基，溝跡 11 条，土坑 5 基，ピット 6 基が確認された。古墳は円墳が 2 基確認された。いずれも部田野凝灰岩製の横穴式石室を持つ。2 号墳の周溝覆土より，須恵器甕破片が出土している。

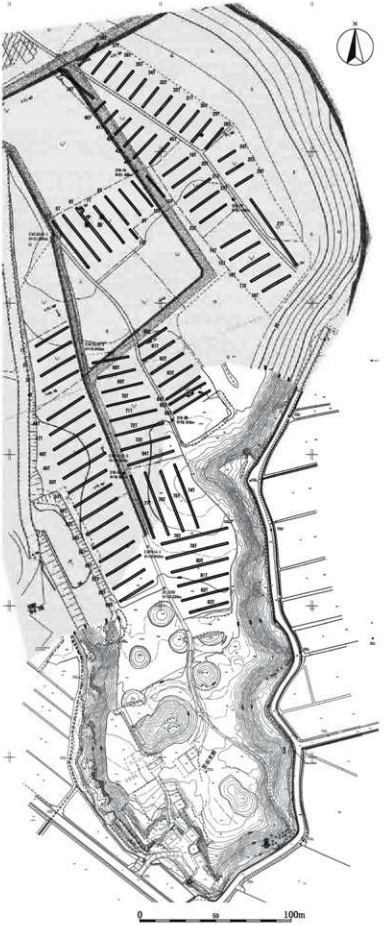
住居跡は 13 基確認され，すべて弥生時代の住居跡であった。住居跡の時期は，弥生中期が 2 基（1 ・ 9 号住居跡），弥生後期前半が 4 基（2・3・10・11 号住居跡），残りが弥生中期～後期前半の住居跡となる。

溝跡は 11 条確認されたが，確認面での幅が 30 ～ 50 ㎝ほどの溝で時期は不明である。土坑・ピットも特に出土遺物はなく，時期は不明である。

遺物は，各住居跡覆土より弥生土器片が出土している。多くは少量の出土であるが，3 号住居跡は重機での確認時に深く掘りすぎてしまった部分より，多量の土器破片が出土している。また，各住居跡およびトレンチからは，弥生土器片とともに石英破片も出土しており，石



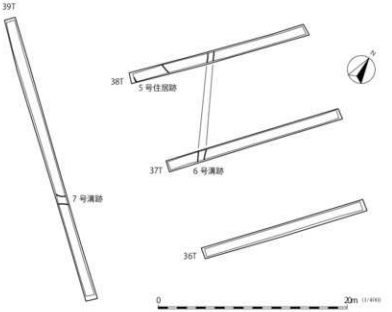
第 16 図　館出遺跡と笠谷古墳群の位置



第 17 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（縮尺 1:2500）

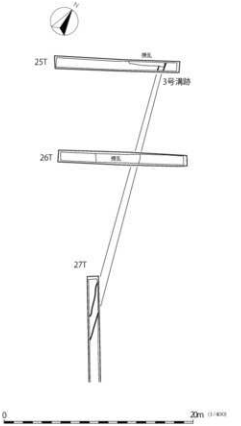
器になるものと思われる。11 号住居跡からは，サブトレンチ部分より，床面に横になった小型壺とともに，片岩製の細長い敲石が出土している。なおトレンチから少量ではあるが縄文中期土器の破片も出土している。

各住居跡の遺物・遺構の時期を簡単に述べると以下の通りである。1 号住居跡は古墳時代前期の土師器破片，弥生中期の遺物が出土している。2 号住居跡は弥生中期と後期の遺物が出土している。3 号住居跡は土器が多量に出土した住居跡であり，弥生後期「東中根式」の住居跡と考えられる。4～8 号住居跡は弥生時代の遺物が出土している。9 号住居跡は弥生中期「足洗式」の住居跡かと推定される。当住居跡からは弥生後期と判断できる土器片は出土していない。10 号住居跡は弥生中期と後期の遺物が出土している。11 号住居跡は弥生後期「向井原式」の住居跡である。

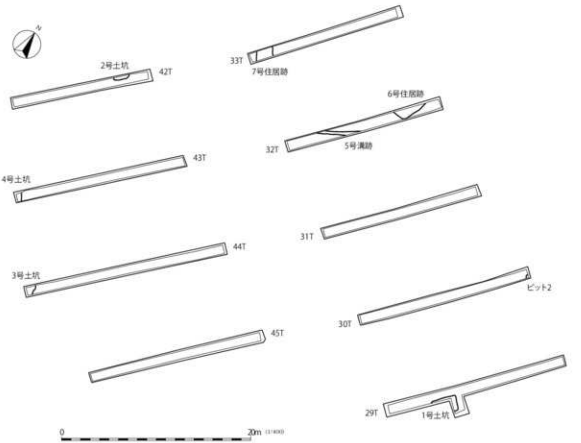


第 18 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（1）

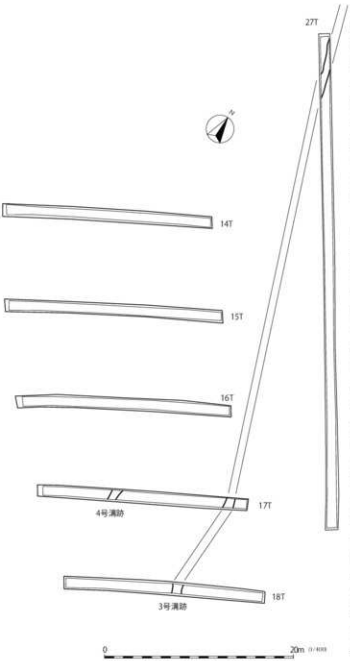
12 号住居跡は弥生中期の遺物が出土している。13 号住居跡は弥生時代の遺物が出土している。



第 20 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（3）



第 19 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（2）



第 21 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（4）

遺物説明

第 32 図

1　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線文（半截竹管）

2　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：大型壺形土器　法量：最大径 90 ㎜（残存率 15％の部分から推定）文様：平行沈線文（半截竹管）備考：胎土に骨針含む

3　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：大型壺形土器　文様：平行沈線文（半截竹管）

4　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：大型壺形土器　文様：平行沈線文（半截竹管），付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）

5　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期　器種：壺形土器　文様：沈線文（棒状工具），器外面赤彩

6　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に骨針含む

7　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期か　法量：底径 98 ㎜（残存率 15％）文様：付加条縄文（LR+2R か），底面布目痕

8　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代中期か　法量：底径 55 ㎜（残存率 20％）文様：底面布目痕　備考：胎土に骨針含む

9　出土位置・注記：4 住　時代時期：弥生時代　器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（LR+2R）　備考：胎土に骨針多量含む，器内面ほとんど剥落

10　出土位置・注記：4 住　時代時期：弥生時代　器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（LR+2R か）

11　出土位置・注記：5 住　時代時期：弥生時代　文様：口唇部・口縁部に付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母と骨針含む

12　出土位置・注記：5 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）備考：胎土に骨針含む

13　出土位置・注記：5 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

14　出土位置・注記：5 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

15　出土位置・注記：5 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母含む

16　出土位置・注記：6 住　時代時期：弥生時代中期か　文様：底面布目痕

17　出土位置・注記：7 住　時代時期：弥生時代　文様：口唇部に付加条縄文

18　出土位置・注記：7 住　時代時期：弥生時代　器種：甕形土器　文様：付加条縄文（LR+2R）

19　出土位置・注記：7 住　時代時期：弥生時代　器種：甕形土器　文様：付加条縄文（LR+2R）　備考：胎土に金雲母含む

20　出土位置・注記：7 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）　備考：胎土に金雲母含む

21　出土位置・注記：7 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）備考：胎土に金雲母含む

22　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線文（半截竹管）

23　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：口唇部・口縁部に付加条縄文（LR+2R）

24　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R-S）

25　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：口唇部に付加条縄文（LR+2R）

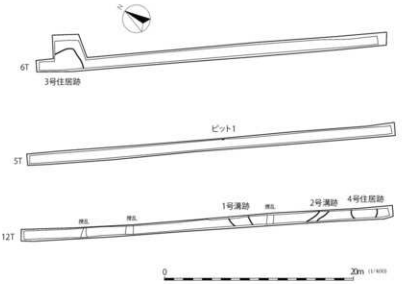
26　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に骨針含む

27　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

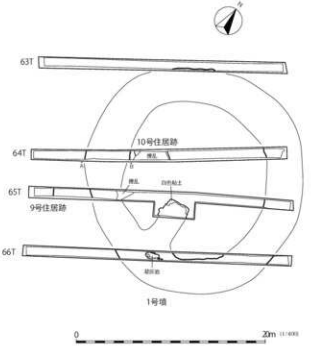
28　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

29　出土位置・注記：8 住　時代時期：弥生時代　文様：単節斜縄文（LR）

30　出土位置・注記：12 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線文（半截竹管）



第 22 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（5）



第 23 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（6）

31　出土位置・注記：13 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R か）備考：胎土に金雲母を多量含む

32　出土位置・注記：13 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）

33　出土位置・注記：13 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文

第 33 図

1　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期　器種：大型壺形土器　法量：口径 200 ㎜（残存率 11％）　文様：口唇部，複合口縁部・胴部に付加条縄文（LR+2R，軸縄の痕跡はほとんど見えない），複合口縁下端に箆状工具（爪か）による刻み　備考：口唇部摩耗，器内面の表面はほとんど剥落

2　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期　文様：複合口縁部に付加条縄文（LR+2R，軸縄の痕跡はほとんど見えない），複合口縁下端に指頭（爪痕あり）による刻み

3　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代　文様：口唇部・複合口縁部に付加条縄文（LR+2R）

4　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（RL+2L）

5　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線文（先割れした半截竹管か，平行沈線が連弧状，波状に見える部分あり）

6　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期　文様：縦区画内に斜位の沈線文（箆状工具）　備考：器外面炭化物付着

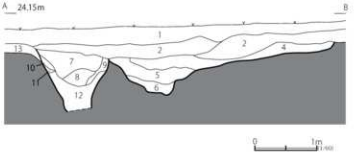
7　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期　文様：斜位の沈線文（箆状工具），付加条縄文（RL+2L）

第 34 図

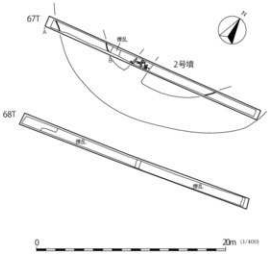
1　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：大型壺形土器　法量：残存高 564 ㎜（推定），頸径 104 ㎜（残存率 100％），胴径 336 ㎜（残存率 42％，歪みあり），底径 144 ㎜（残存率 8％）

文様：頸部櫛描文（櫛歯 3 本，菱形文は 6 単位構成），胴部付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条），底面木葉痕　備考：器内面の頸部に種子（籾）圧痕あり，器内面に発泡状の剥落あり

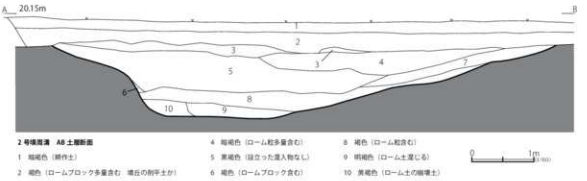
2　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：中型壺形土器　法量：残存高 310 ㎜（推定），頸径 100 ㎜（残存率 19％），胴径 245 ㎜（残存率 36％，歪みあり），底径 112 ㎜（残存率 74％）　文様：頸部櫛描文（櫛歯 3 本，縦区画文は 5 単位構成），胴部付加条縄文（L+r，軸縄は 2 段 3 条），結節文あり，底面木葉痕　備考：器外面の頸～胴上部に炭化物付着



第 24 図　第 1 号墳周溝土層



第 25 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（7）



第 26 図　第 2 号墳周溝土層

第 35 図

3　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：大型壺形土器　法量：器高 534 ㎜（推定），口径 168 ㎜（残存率 27%，歪みあり），頸径 130 ㎜（残存率 63%，歪みあり），胴径 356 ㎜（残存率 86%，歪みあり），底径 140 ㎜（残存率 100%）　文様：口唇部・胴部に付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条），底面木葉痕（4 枚の葉を敷き並べた圧痕）　備考：器内面に発泡状の剥落あり

4　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：大型壺形土器　法量：残存高 450 ㎜（推定），頸径 124 ㎜（残存率 41%），胴径 304 ㎜（残存率 68%，歪みあり　文様：付加条縄文（R × R）　備考：器内面の頸部に成形の積上痕残る，器外面に焼けただれたような部分あり，調の異なる破片が接合，器内面に発泡状の剥落あり

第 36 図

5　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：大型壺形土器　法量：口径 340 ㎜（胴・頸部からの推定），頸径 256 ㎜（残存率 9%），胴径 368 ㎜（残存率 23%）　文様：口唇部・胴部に付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条），結節文あり，複合口縁下端刻み（指頭，爪痕）　備考：器内面が全体的に黒みを帯びる

6　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：中・小型壺形土器　法量：胴径 176 ㎜（残存率 38%）　文様：付加条縄文（LR+R）

7　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：中・小型壺形土器　法量：底径 80 ㎜（残存率 12%）　文様：付加条縄文（LR+R），底面布目痕

8　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：壺形土器　法量：最大径 124 ㎜（残存率 14%）　文様：頸部櫛描文（櫛歯 3 本）

9　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：大型壺形土器　法量：最大径 287 ㎜（残存率 20%の部分より推定）　文様：頸部櫛描文（9-1 の破片上端に櫛描文の一部が残る），胴部付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）　備考：胎土に砂粒多い

10　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）　器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（LR+2R）

11　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代　器種：大型甕形土器　文様：口唇部・口縁部・胴部に付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）　備考：器内面磨き調整

第 37 図

1　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期　器種：蓋形土器　法量：口径 218 ㎜（残存率 4%）　文様：平行沈線文（半裁竹管）　備考：口縁部に焼成前の穿孔あり（2 孔一対，器外面から穿孔）

2　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期　文様：沈線文（棒状工具）

3　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期　文様：平行沈線文（半裁竹管），付加条縄文

4　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：小型壺形土器　文様：沈線文（箆状工具）

5　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：壺形土器　文様：平行沈線文（半裁竹管），付加条縄文（LR+R），器外面赤彩

6　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：大型壺形土器　文様：平行沈線文（半裁竹管）

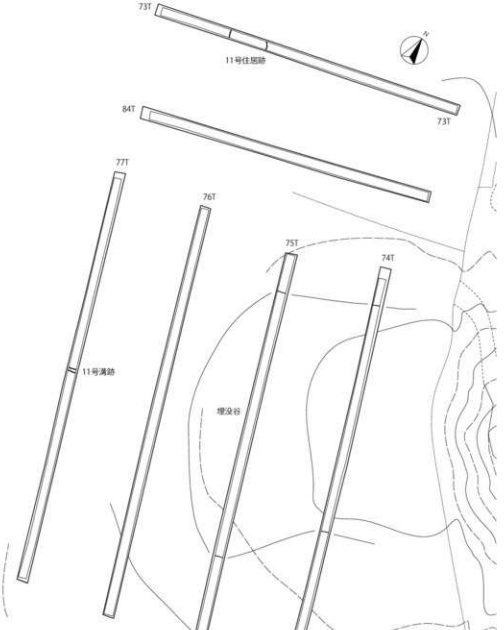
7　出土位置・注記：9 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：大型壺形土器　文様：平行沈線文（半裁竹管）

8　出土位置・注記:9 住　時代時期:弥生時代　文様:付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）　備考：器外面に炭化物付着

9　出土位置・注記:9住　時代時期:弥生時代　文様:付加条縄文(LR × R)

10　出土位置・注記:9 住　時代時期:弥生時代中期　法量:底径 94 ㎜（残存率 20%）文様：底面布目痕

11　出土位置・注記:9 住　時代時期:弥生時代中期　法量:底径 86 ㎜（残存率 13%）文様：付加条縄文（LR+R），底面布目痕



第 27 図　鉢出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（8）

第 38 図

1　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期　器種：蓋形土器　法量：上端径 64 ㎜（残存率 20％）　文様：上面痕跡不明，平行沈線文（半裁竹管）

2　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期　器種：壺形土器　法量：最大径 82 ㎜（残存率 12％の部分から推定）　文様：平行沈線文（半裁竹管）

3　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期か　文様：口唇部縄文（単節斜縄文もしくは付加条縄文）

4　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期　器種：甕形土器　文様：口唇部付加条縄文（LR+R）

5　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期　器種：甕形土器　文様：口唇部付加条縄文（LR+2R か）

6　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：広口壺形土器か　文様：平行沈線文（半裁竹管）　備考：平行沈線文は重四角文と推定される

7　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：壺形土器　文様：平行沈線文（半裁竹管），器外面赤彩

8　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：壺形土器　文様：平行沈線文（半裁竹管），付加条縄文（LR+R）

9　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代後期　器種：甕形土器　文様：器内面口縁部・口唇部・複合口縁部に単節斜縄文（LR），複合口縁下端を指頭で押圧

10　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代後期　文様：櫛歯状工具（歯数 3 本）による縦区画内に箆状工具による格子状文

11　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代　文様：箆状工具による集合沈線文，器外面赤彩

12　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

13　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代　器種：甕形土器　法量：胴径 150 ㎜（残存率 13％）　文様：単節斜縄文（LR）　備考：器内面に炭化物付着

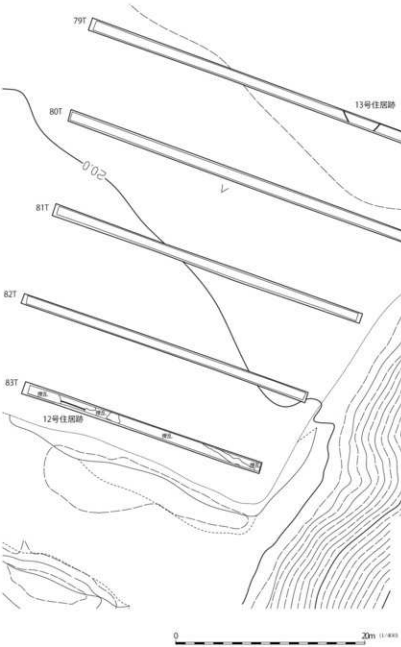
14　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代後期か　法量：底径 80 ㎜（残存率 21％）　文様：付加条縄文（LR+R，軸縄 1 段 3 条，軸縄が明瞭で単節斜縄文に見える），底面木葉痕　備考：器内面に炭化物付着

15　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代後期か　法量：底径 90 ㎜（残存率 29％）　文様：付加条縄文（R を絡条），底面木葉痕

16　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期か　法量：底径 74 ㎜（残存率 32％）　文様：底面布目痕　備考：底部付近に指頭による押圧痕あり

17　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代中期か　文様：底面布目痕

第 39 図



第 28 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（9）

1　出土位置・注記：11 住 P1　時代時期：弥生時代後期（『向井原式』）　器種：小型甕形上器　法量：器高 208 ㎜，口径 135 ㎜（残存率 100％），頸径 101 ㎜（残存率 100％），胴径 143 ㎜（残存率 100％），底径 70 ㎜（残存率 100％）　文様：口唇部・器内面口縁部・複合口縁部・胴部に付加条縄文（LR+R），頸部に平行沈線の波状文（半截竹管，下→上），口縁部の縄文施文後に平行沈線文が施文されている，底面撫で調整　備考：胎土に骨針含む，器外面に炭化物付着，器内面に変色あり，器外面の胴部に剥落あり

2　出土位置・注記：11 住 P2　時代時期：弥生時代後期（『向井原式』）　器種：小型甕形上器　法量：口径 113 ㎜（残存率 12％）　文様：口唇部に付加条縄文（LR+2R か），口縁部に縦位の櫛描文（櫛歯 3 本）　備考：胎土に多量の骨針と金雲母を含む

3　出土位置・注記：11 住　時代時期：弥生時代後期　法量：最大径 122 ㎜（残存率 11％）　文様：付加条縄文か（r を絡条）　備考：胎土に骨針含む，器内面に炭化物付着

4　出土位置・注記：11 住　時代時期：弥生時代後期（『向井原式』）　文様：平行沈線文（半截竹管），付加条縄文（LR+R か）

5　出土位置・注記：11 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

6　出土位置・注記：11 住　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文か（r を絡条）

第 40 図

1　出土位置・注記：29 トレ SK1　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）

2　出土位置・注記：SK2　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　器種：大型壺形上器　文様：平行沈線文（3 本同時施文具）

3　出土位置・注記：SK2　時代時期：弥生時代後期（東中樹式）　器種：壺形上器　文様：口唇部・胴部に付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）

4　出土位置・注記：SK2　時代時期：弥生時代後期（東中樹式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（歯数 3 本），付加条縄文（LR+R，軸縄は 1 段 3 条）

5　出土位置・注記：SK2　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

6　出土位置・注記：65 トレ SK5　時代時期：弥生時代　文様：単節斜縄文（LR）　備考：器内面剥落

7　出土位置・注記：65 トレ SK5　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）

第 41 図

1　出土位置・注記：5 トレ pit1　時代時期：弥生時代中期　文様：平行沈線（半截竹管）

2　出土位置・注記：5 トレ pit1　時代時期：弥生時代後期　文様：櫛描文（歯数 5 本），付加条縄文（LR+2R）

3　出土位置・注記：5 トレ pit1　時代時期：弥生時代後期　文様：櫛描文（歯数 4 本）

4　出土位置・注記：5 トレ pit1　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S）

5　出土位置・注記：5 トレ pit1　時代時期：弥生時代後期　文様：付加条縄文（LR+R）

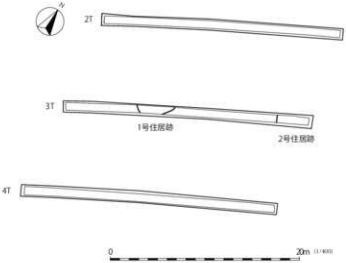
第 42 図

1　出土位置・注記：2 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（L+r）　備考：胎土に骨針含む

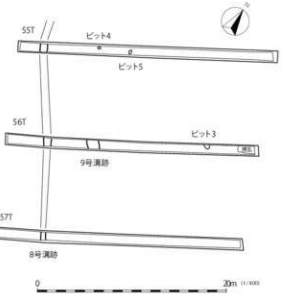
2　出土位置・注記：2 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S）　備考：胎土に金雲母含む

3　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：縄文時代中期中葉　文様：押し引き文（棒状工具），無節斜縄文（L）　備考：把手部分

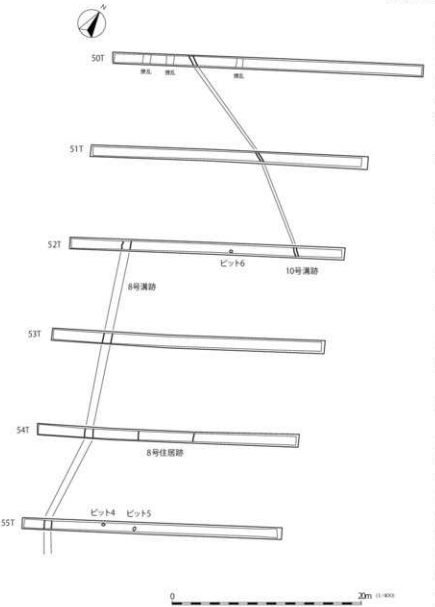
4　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：



第 29 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（10）



第 31 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（12）



第 30 図　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群第 1 次調査区（11）

平行沈線文（半截竹管），器内面上部赤彩

5　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線文（半截竹管）

6　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：櫛描文（歯数 3 本）

7　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

8　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R-S）備考：胎土に骨針含む

9　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R × R，L × L）

10　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：無節斜縄文（L）備考：胎土に骨針含む

11　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R-S）

12　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母と骨針含む

13　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に骨針含む

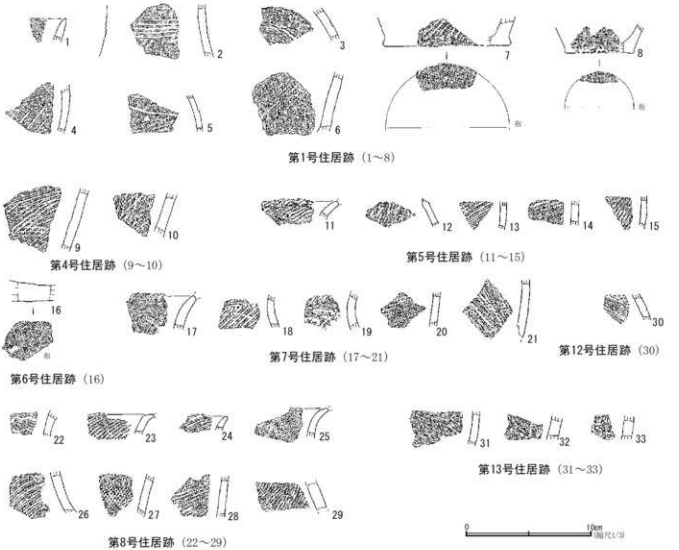
14　出土位置・注記：3 トレ　時代時期：弥生時代　器種：蓋か　法量：上面径 40 mm（残存率 22％）文様：付加条縄文（R-S），上面布目痕

15　出土位置・注記：4 トレ　時代時期：縄文時代早期（子母口式）文様：刺突文（施状工具），条痕文　備考：胎土に少量の繊維含む

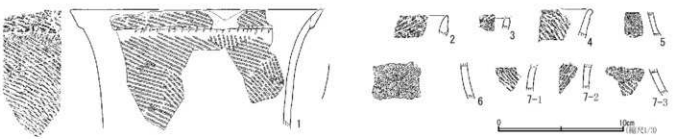
16　出土位置・注記：4 トレ　時代時期：縄文時代中期（加曽利 E 式）文様：沈線文（棒状工具），単節斜縄文（RL）

17　出土位置・注記：4 トレ　時代時期：縄文時代中期

18　出土位置・注記：4 トレ　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線文（半截竹管），縦区画文あり



第 32 図　館出遺跡第 2 次調査区第 1・4・5・6・7・8・12・13 号住居跡出土遺物



第 33 図　館出遺跡第 2 次調査区第 2 号住居跡出土遺物

19　出土位置・注記：4 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）

20　出土位置・注記：9 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

21　出土位置・注記：12 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

22　出土位置・注記：16 トレ　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）文様：条痕文　備考：胎土に多量の繊維含む

23　出土位置・注記：16 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R.S）

24　出土位置・注記：18 トレ　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）文様：撫で　備考：胎土に多量の繊維含む

25　出土位置・注記：18 トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）文様：押し引き文（半截竹管）、撚糸文

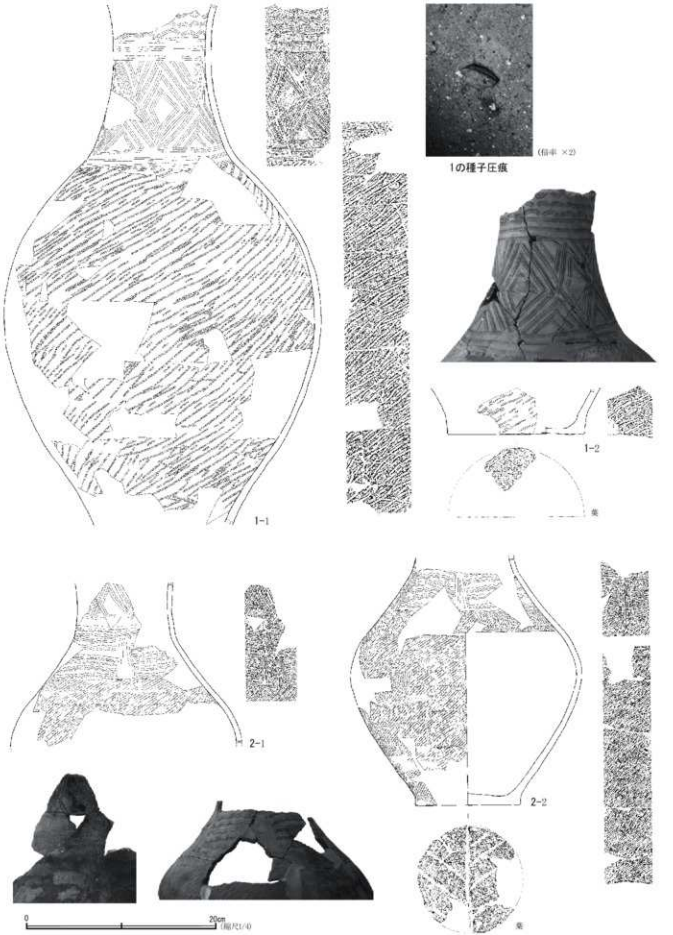
26　出土位置・注記：18 トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）文様：波状貝殻文

27　出土位置・注記：18 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：器外面に炭化物付着

28　出土位置・注記：19 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

29　出土位置・注記：25 トレ　時代時期：縄文時代中期か

30　出土位置・注記：25 トレ　時代時期：古墳時代前期　文様：刷毛



第 34 図　館出遺跡第 2 次調査区第 3 号住居跡出土遺物 (1)

第 35 図　館出遺跡第 2 次調査区第 3 号住居跡出土遺物 (2)

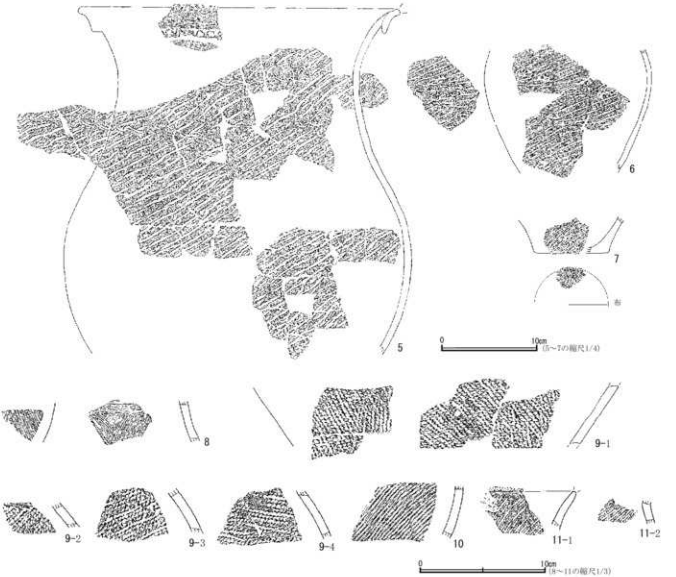
目

31　出土位置・注記：27 トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）文様：変形爪形文

32　出土位置・注記：27 トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）文様：撚糸文（R の絡条体）

33　出土位置・注記：29 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母と骨針含む

34　出土位置・注記：30 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄



第 36 図　館出遺跡第 2 次調査区第 3 号住居跡出土遺物 (3)

文（R-S）備考：胎土に金雲母と骨針含む

35　出土位置・注記：31 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に骨針含む

36　出土位置・注記：31 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

37　出土位置・注記：31 トレ　時代時期：弥生時代　法量：底径 62 ㎜（残存率 32%）文様：条線文，底面木葉痕（LR+R）

38　出土位置・注記：32 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R-S）

39　出土位置・注記：32 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

40　出土位置・注記：32 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

41　出土位置・注記：32 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

42　出土位置・注記：33 トレ　時代時期：弥生時代　文様：櫛描文（歯数 3 本）備考：胎土に骨針含む

43　出土位置・注記：33 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

44　出土位置・注記：33 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R か）備考：胎土に骨針含む，器外面に炭化物付着

45　出土位置・注記：34 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

46　出土位置・注記：34 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（L-Z）

47　出土位置・注記：34 トレ　時代時期：弥生時代　器種：蓋か　法量：上面径 48 ㎜（残存率 38%）文様：上面布目痕を調整か

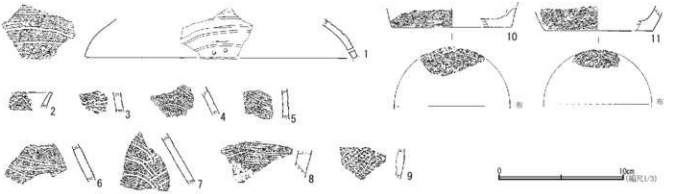
48　出土位置・注記：35 トレ　時代時期：弥生時代　文様：櫛描文（歯数 3 本）備考：胎土に金雲母含む

49　出土位置・注記：38 トレ　時代時期：縄文時代中期（加曽利 E 式）文様：沈線文（棒状工具），単節斜縄文（RL）備考：胎土に多量の金雲母含む

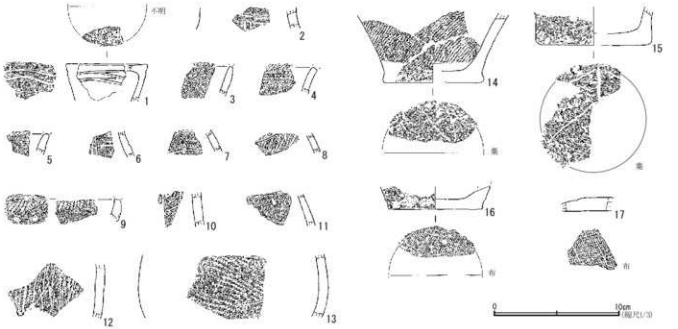
50　出土位置・注記：38 トレ　時代時期：弥生時代　法量：最大径 146 ㎜（残存率 11%）文様：付加条縄文（LR+R）備考：器外面に炭化物付着

51　出土位置・注記：38 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に多量の金雲母含む

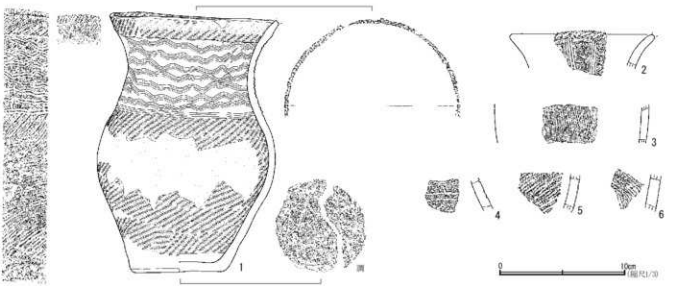
52　出土位置・注記：38 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄



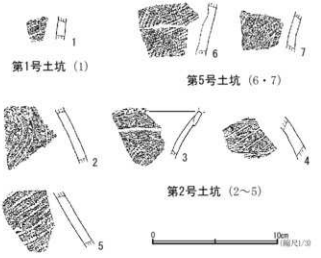
第 37 図　館出遺跡第 2 次調査区第 9 号住居跡出土遺物



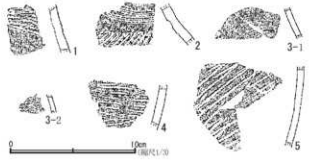
第 38 図　館出遺跡第 2 次調査区第 10 号住居跡出土遺物



第 39 図　館出遺跡第 2 次調査区第 11 号住居跡出土遺物



第 40 図　館出遺跡第 2 次調査区第 1・2・5 号土坑出土遺物



第 41 図　館出遺跡第 2 次調査区 5 トレンチピット 1 出土遺物

文（LR+R）

53　出土位置・注記：39 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母と骨針含む

54　出土位置・注記：39 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S）備考：胎土に骨針含む

55　出土位置・注記：44 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

56　出土位置・注記:46 トレ　時代時期:弥生時代　文様:平行沈線文（半裁竹管）

57　出土位置・注記：46 トレ　時代時期：弥生時代　文様：底面木葉痕

58　出土位置・注記:48 トレ　時代時期:弥生時代　文様:無節斜縄文（L）もしくは付加条縄文

59　出土位置・注記：50 トレ　時代時期：弥生時代　文様：不整櫛歯状工具（先割れした工具）による櫛描文，付加条縄文（R+l か）備考：胎土に金雲母と骨針含む

60　出土位置・注記：51 トレ　時代時期：弥生時代　文様：単節斜縄文（LR）

61　出土位置・注記：51 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母含む

第 43 図

1　出土位置・注記：52 トレ　時代時期：縄文時代中期　文様：単節斜縄文（RL）

2　出土位置・注記：52 トレ　時代時期：弥生時代後期　文様：櫛描文（歯数 3 本），単節斜縄文（LR）もしくは付加条縄文　備考：胎土に骨針含む

3　出土位置・注記：52 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：上端部に沈線の一部あり

4　出土位置・注記：52 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

5　出土位置・注記：52 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に骨針含む

6　出土位置・注記：52 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）備考：器内面に炭化物付着

7　出土位置・注記:53 トレ　時代時期:縄文時代早期（条痕文系）　文様:器外面条痕の後撫で，器内面条痕　備考：胎土に少量の繊維含む，器外面に炭化物付着

8　出土位置・注記：53 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：あるいは蓋か

9　出土位置・注記：53 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

10　出土位置・注記：54 トレ　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）　文様：器内外面条痕　備考：胎土に繊維含む

11　出土位置・注記:54 トレ　時代時期:縄文時代前期（浮島式）文様:平行沈線（半裁竹管）

12　出土位置・注記:54 トレ　時代時期:縄文時代前期（浮島式）文様:成形の積上痕を残す

13　出土位置・注記:54 トレ　時代時期:弥生時代　文様:平行沈線（半裁竹管）備考：器外面に僅かな炭化物付着

14　出土位置・注記：54 トレ　時代時期：弥生時代　文様：偽縄文か　備考：胎土に骨針含む，補修孔あり（器内面から穿孔）

15　出土位置・注記：54 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（RL+L）

16　出土位置・注記：54 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

17　出土位置・注記：54 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母と骨針含む

18　出土位置・注記：55 トレ　時代時期：弥生時代中期　文様：口唇部部分的な刻み，沈線区画内に斜線を充填

19　出土位置・注記:55 トレ　時代時期:弥生時代中期（足洗式）　文様:平行沈線（半裁竹管）備考：胎土に骨針含む

20　出土位置・注記：55 トレ　時代時期：弥生時代　文様：櫛描文（歯数 3 本）備考：胎土に骨針含む

21　出土位置・注記：55 トレ　時代時期：弥生時代　器種：蓋か　文様：焼成前の穿孔（孔径 3 ㎜）備考：胎土に骨針含む

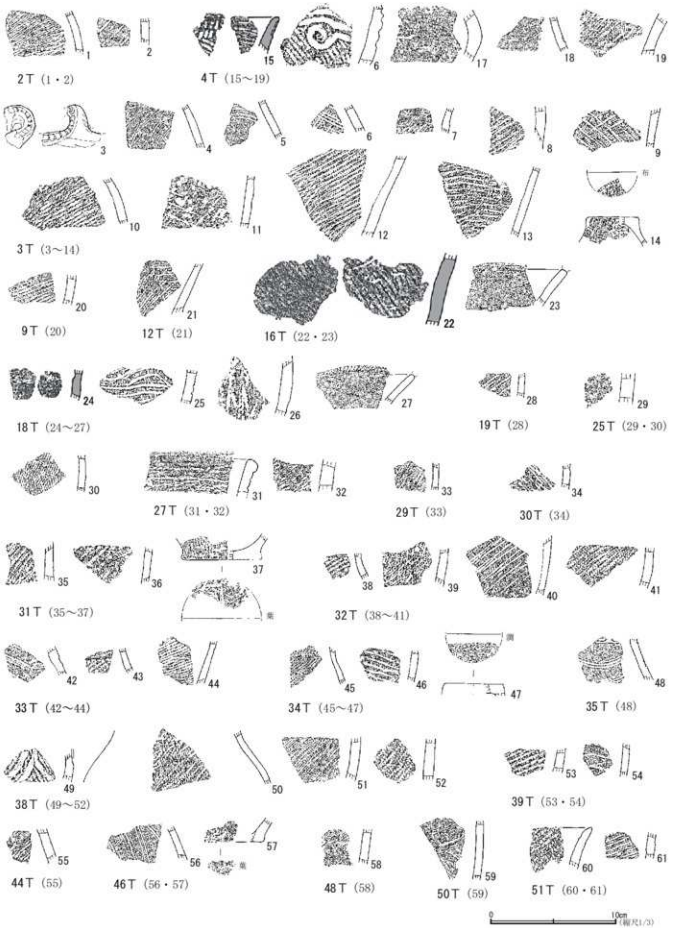
22　出土位置・注記：55 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に骨針含む，器外面に炭化物付着

23　出土位置・注記：55 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

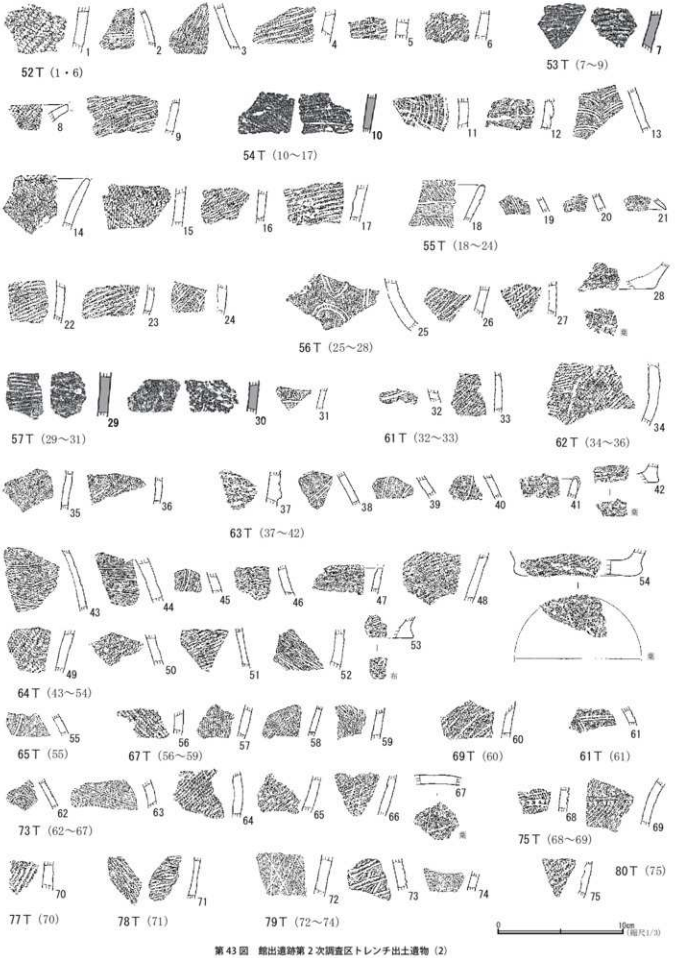
24　出土位置・注記：55 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

25　出土位置・注記:56 トレ　時代時期:弥生時代　文様:平行沈線（半裁竹管）

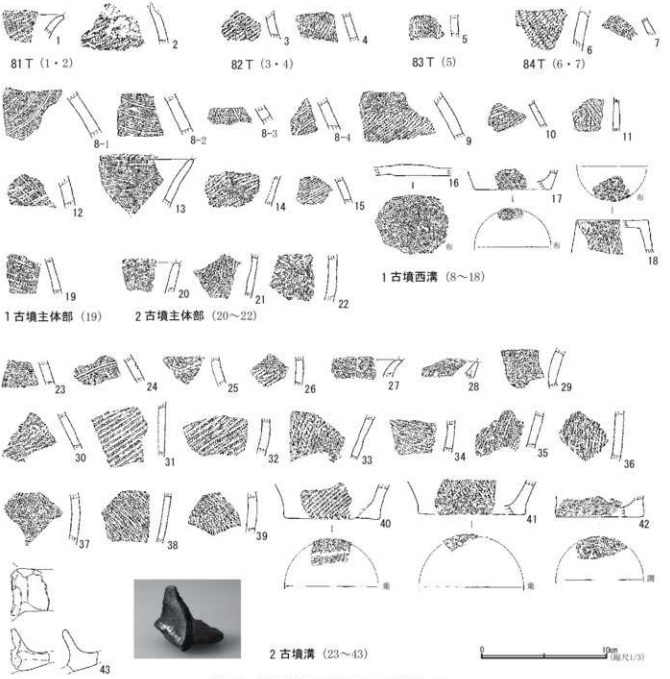
26　出土位置・注記：56 トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄



第42図　館出遺跡第2次調査区トレンチ出土遺物（1）



第43図　館出遺跡第２次調査区トレンチ出土遺物（2）



第44図　館出遺跡第2次調査区トレンチ出土遺物（3）

文（LR+2R）

27　出土位置・注記：56トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

28　出土位置・注記：56トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R），底面木葉痕

29　出土位置・注記：57トレ　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）文様：器外面条痕，器内面撫で　備考：胎土に少量の繊維含む

30　出土位置・注記：57トレ　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）文様：器内外面撫で　備考：胎土に少量の繊維含む

31　出土位置・注記：57トレ　時代時期：弥生時代中期　文様：沈線区画内に縄文を充填，単節斜縄文（LR）もしくは付加条縄文

32　出土位置・注記：61トレ　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管）備考：胎土に骨針含む

33　出土位置・注記：61トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

34　出土位置・注記：62トレ　時代時期：縄文時代中期　文様：単節斜縄文（LR）

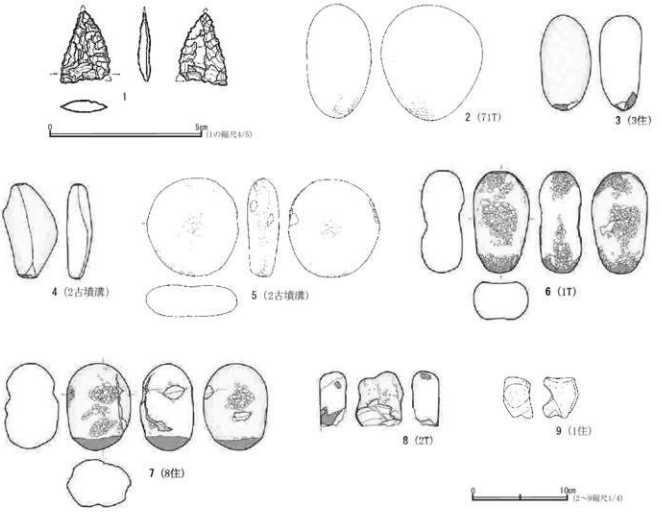
35　出土位置・注記：62トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

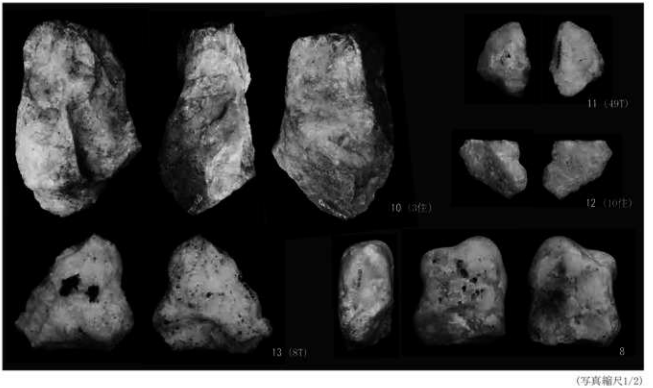
36　出土位置・注記：62トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

37　出土位置・注記：63トレ　時代時期：縄文時代中期（阿玉台式）文様：隆帯，平行沈線（半截竹管）備考：胎土に金雲母含む

38　出土位置・注記：63トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：平行沈線（半截竹管），縄文　備考：胎土に骨針含む

39　出土位置・注記：63トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：





(写真縮尺1/2)

第 45 図　館出遺跡第 2 次調査区出土石器

平行沈線（半截竹管）備考：胎土に骨針含む
40　出土位置・注記：63トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：平行沈線（半截竹管）備考：胎土に骨針含む
41　出土位置・注記：63トレ　時代時期：弥生時代　文様：口唇部に突起，付加条縄文（R·S）
42　出土位置・注記：63トレ　時代時期：弥生時代　文様：結節文，底面木葉痕
43　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：平行沈線（半截竹管），付加条縄文（R·S）備考：胎土に骨針含む
44　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線（先割れした工具），付加条縄文（R·S）
45　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管）
46　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管）
47　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：口唇部付加条縄文（R·S）
48　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：単節斜縄文（LR）もしくは付加条縄文
49　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：単節斜縄文（LR）備考：胎土に骨針含む
50　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S）備考：胎土に骨針含む
51　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：無節斜縄文（L）もしくは付加条縄文　備考：胎土に骨針含む
52　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：反撚り縄文（RR）か　備考：胎土に骨針含む
53　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S），底面布目痕　備考：胎土に骨針含む
54　出土位置・注記：64トレ　時代時期：弥生時代　法量：底径100㎜（残存率17％）文様：付加条縄文（LR+R），底面木葉痕
55　出土位置・注記：65トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：平行沈線（半截竹管）
56　出土位置・注記：67トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）
57　出土位置・注記：67トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2Rか）
58　出土位置・注記：67トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に骨針含む
59　出土位置・注記：67トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R+l）
60　出土位置・注記：69トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：器内面黒く変色
61　出土位置・注記：71トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線（半截竹管）
62　出土位置・注記：73トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線（半截竹管）
63　出土位置・注記：73トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線（先割れした工具），付加条縄文（LR+2Rか）備考：胎土に骨針含む
64　出土位置・注記：73トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）
65　出土位置・注記：73トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）
66　出土位置・注記：73トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S）
67　出土位置・注記：73トレ　時代時期：弥生時代　文様：底面木葉痕　備考：胎土に骨針含む
68　出土位置・注記：75トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）文様：爪型文と平行沈線（半截竹管）
69　出土位置・注記：75トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に金雲母と骨針含む
70　出土位置・注記：77トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）
71　出土位置・注記：78トレ　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）文様：器内外面条痕　備考：胎土に僅かに繊維含むか
72　出土位置・注記：79トレ　時代時期：縄文時代　文様：沈線（箆状工具）
73　出土位置・注記：79トレ　時代時期：弥生時代中期（足洗式）文様：平行沈線（半截竹管），付加条縄文（L+rか）
74　出土位置・注記：79トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）
75　出土位置・注記：80トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

第44図

1　出土位置・注記：81トレ　時代時期：弥生時代　文様：口唇部及び口縁部に付加条縄文（LR+2R）
2　出土位置・注記：81トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）
3　出土位置・注記：82トレ　時代時期：弥生時代　文様：単節斜縄文（LR）
4　出土位置・注記：82トレ　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）
5　出土位置・注記：83トレ　時代時期：弥生時代　文様：櫛描文（歯数4本）
6　出土位置・注記：84トレ　時代時期：縄文時代中期　文様：単節斜縄文（RL）
7　出土位置・注記：84トレ　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管）
8　出土位置・注記：64Ｔ１コフン西溝　時代時期：弥生時代中期　文様：平行沈線（半截竹管）備考：胎土に骨針含む
9　出土位置・注記：64Ｔ１コフン西溝　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管），結節文，付加条縄文（LR+R）備考：胎土に骨針含む
10　出土位置・注記：64Ｔ１コフン西溝　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管）
11　出土位置・注記：64Ｔ１コフン西溝　時代時期：弥生時代中期　文様：平行沈線（半截竹管）
12　出土位置・注記：64Ｔ１コフン西溝　時代時期：弥生時代　文様：沈線（箆状工具），付加条縄文（LR+R）
13　出土位置・注記：64Ｔ１コフン西溝　時代時期：弥生時代　文様：

口唇部と胴部に付加条縄文

14　出土位置・注記：64 T 1コフン西溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R × R）

15　出土位置・注記：64 T 1コフン西溝　時代時期：古墳時代前期　調整：刷毛目

16　出土位置・注記：64 T 1コフン西溝　時代時期：弥生時代　文様：底面布目痕

17　出土位置・注記：64 T 1コフン西溝　時代時期：弥生時代　法量：底径 60 ㎜（残存率 12％）文様：底面布目痕

18　出土位置・注記：64 T 1コフン西溝　時代時期：弥生時代　器種：甕か　法量：上面直径 56 ㎜（残存率 12％）文様：平行沈線（半截竹管），底面布目痕

19　出土位置・注記：1コフン主体部　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（半截竹管），付加条縄文（LR+R）

20　出土位置・注記：2コフン主体部　時代時期：弥生時代　文様：口唇部に付加条縄文（LR+R）備考：胎土に多量の骨針含む

21　出土位置・注記：2コフン主体部　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（R·S）備考：胎土に骨針含む

22　出土位置・注記：2コフン主体部　時代時期：弥生時代　文様：縄文（原体不明）

23　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：平行沈線（3本に先割れした工具）備考：胎土に骨針含む

24　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代中期　文様：平行沈線（半截竹管）

25　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代中期　文様：平行沈線（半截竹管）

26　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期:弥生時代　文様:平行沈線（3本に先割れした工具），単節斜縄文（LR）備考：器内面に炭化物付着

27　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：口唇部に縄文（原体不明）備考：器外面に炭化物付着

28　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代後期　文様：口唇部に付加条縄文（R·S）備考：器外面に炭化物付着

29　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（RL+L か）

30　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

31　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に骨針含む

32　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：器外面に炭化物付着

33　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）備考：胎土に多量の骨針含む

34　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）

35　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R）備考：胎土に骨針含む

36　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+2R）

37　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：付加条縄文（LR+R か）備考：胎土に骨針含む

38　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：反撚り縄文（RR）備考：器外面に炭化物付着

39　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　文様：反撚り縄文（LL）か

40　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　法量：底径 76 ㎜（残存率 13％）文様：付加条縄文（LR+2R），底面木葉痕

41　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　法量：底径 83 ㎜（残存率 16％）文様：反撚り縄文（RR）か，底面木葉痕か　備考：胎土に骨針含む

42　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　法量：底径 69 ㎜（残存率 19％）文様：無節斜縄文（L）もしくは付加条縄文，底面布目痕を調整か

43　出土位置・注記：2コフン溝　時代時期：弥生時代　器種：杓子形土製品か

第 45 図

1　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代か　器種：石鏃　石材：チャート　法量：長さ 23 ㎜，幅 17 ㎜，厚さ 4 ㎜　重量：1.4 g

2　出土位置・注記：71トレ　時代時期：縄文・弥生時代　器種：敲石　石材：砂岩　法量：長さ 121 ㎜，幅 106 ㎜，厚さ 68 ㎜　重量：1167.6 g　備考：一方の端部のみを使用

3　出土位置・注記：3住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）器種：「石英礫器」　石材：石英　法量：長さ 100 ㎜，幅 52 ㎜，厚さ 44 ㎜　重量：323.3 g　備考：「石英礫器」については次の文献を参照されたい。鈴木素行・窟田恵一 2013「鷹ノ巣遺跡第 47 号住居跡における石英を素材とした石器について」『鷹ノ巣Ⅱ　―第 2・3 次調査の成果―』（公社文化財調査報告第 41 集）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社　28-39 頁

4　出土位置・注記：2古墳溝　時代時期：縄文・弥生時代　器種：敲石　石材：砂岩　法量：長さ 100 ㎜，幅 78 ㎜，厚さ 26 ㎜　重量：150.0 g　備考：両方の端部を使用

5　出土位置・注記：2古墳溝　時代時期：縄文・弥生時代　器種：敲石　石材：砂岩　法量：長さ 103 ㎜，幅 97 ㎜，厚さ 33 ㎜　重量：489.2 g　備考：表裏面の中央部と側面の大部分を使用

6　出土位置・注記：1トレ　時代時期：縄文・弥生時代　器種：敲石　石材：砂岩　法量：長さ 107 ㎜，幅 59 ㎜，厚さ 45 ㎜　重量：398.3 g　備考：表裏面の中央部と両方の端部を使用

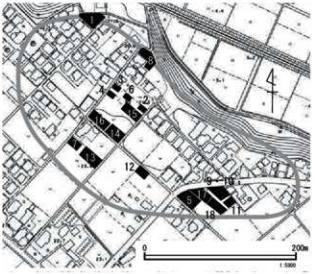
7　出土位置・注記：8住　時代時期：弥生時代　器種：磨石・敲石　石材：オルソコーツァイト？　法量：長さ 91 ㎜，幅 68 ㎜，厚さ 57 ㎜　重量：500.6 g　備考：表裏面の中央部と側面の一部を敲石として使用，特に一方の端部を磨石として使用。被熱痕（赤化，黒化）あり。

8　出土位置・注記：3トレ　時代時期：弥生時代　器種：「石英礫器」　石材：石英　法量：長さ 58 ㎜，幅 50 ㎜，厚さ 28 ㎜　重量：129.6 g　備考：側面を部分的に使用

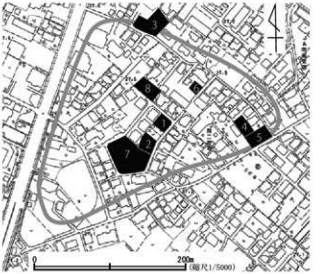
9　出土位置・注記：1住　時代時期：弥生時代　器種：砥石　石材：軽石　法量：長さ 43 ㎜，幅 31 ㎜，厚さ 37 ㎜　重量：9.0 g　備考：棒状の木製品が対象と想定させる溝痕あり

10　出土位置・注記：3住　時代時期：弥生時代後期（東中根式）器種：石核　石材：石英　法量：長さ 102 ㎜，幅 64 ㎜，厚さ 50 ㎜　重量：323.0 g

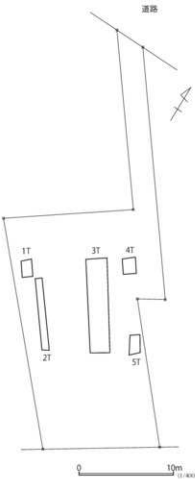
11　出土位置・注記：47トレ　時代時期：弥生時代　石材：石英　法量：



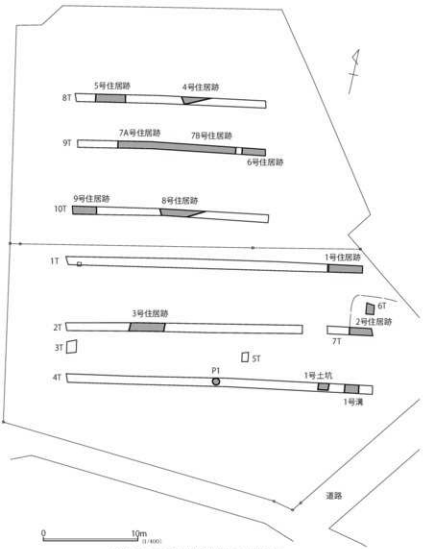
第 46 図　三反田新堀遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 48 図　市毛本郷坪遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 47 図　三反田新堀遺跡第 18 次調査区



第 49 図　市毛本郷坪遺跡第 7 次調査区

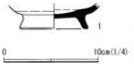
長さ 41 ㎜，幅 29 ㎜，厚さ 13 ㎜　重量：16.2 g　備考：加工あり

12　出土位置・注記：10 住　時代時期：弥生時代　器種：剥片　石材：石英　法量：長さ 32 ㎜，幅 37 ㎜，厚さ 9 ㎜　重量：8.5 g

13　出土位置・注記：38 トレ　時代時期：弥生時代　石材：石英　法量：長さ 63 ㎜，幅 63 ㎜，厚さ 23 ㎜　重量：93.1 g　備考：加工あり

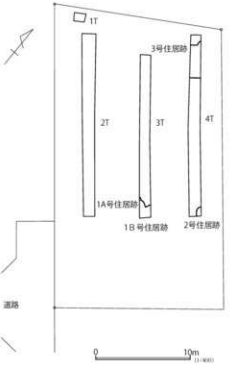
5　三反田新堀遺跡

(1) 第 18 次調査報告



第 50 図　市毛本郷坪遺跡
第 7 次調査区出土遺物

調査地は，中丸川低地を望む台地縁辺から 90 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 5 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.6 ～ 0.9 mを測る。調査の結果，遺構・遺物は確認されなかった。



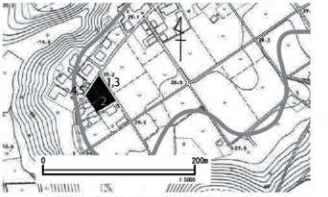
第 51 図　市毛本郷坪遺跡第 8 次調査区

6　市毛本郷坪遺跡

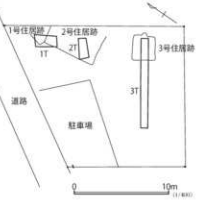
(1) 第 7 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺から 330 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は 10 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ～ 0.8 mを測る。調査の結果，住居跡 10 基，土坑 1 基，ピット 1 基，溝跡 1 条が確認された。住居跡は出土土器からみて，いずれも奈良・平安時代の住居跡と思われる。なお，土坑，ピット，溝跡の時期は不明である。遺物は土師器・須恵器が出土している。

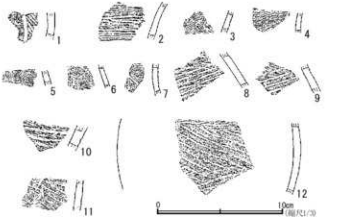
遺物説明



第 52 図　本郷東遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 53 図　本郷東遺跡第 4 次調査区



第 54 図　本郷東遺跡第 4 次調査区出土遺物

第 50 図
1　出土位置：1 トレンチ　注記：－　材質：須恵器　器種：有台杯　残存：底部 40%　法量：高台径（6.8）　色調：灰色　胎土：雲（白，白透，灰少），骨針少　技法等：焼成硬質。高台設置面摩滅。底部内面やや摩滅。高台端部外縁ところどころ欠失。　備考：木葉下窯産

(2) 第 8 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺から 420 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 4 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5

～ 0.7 mを測る。調査の結果，竪穴住居跡４基（奈良・平安時代）を確認した。調査区は全体的にゴボウ耕作による攪乱が顕著であり，遺構の遺存状況はよくない。遺物は須恵器・土師器片が出土した。

7　本郷東遺跡

(1) 第４次調査報告

調査地は，本郷川の低地を望む台地縁辺に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は３か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.7～0.9 mを測る。調査の結果，住居跡３基が確認された。出土土器からみて，１・３号住居跡が古墳時代の住居跡，２号住居跡が奈良・平安時代の住居跡と思われる。当調査区は協議の結果，保護が図れないことが判明したため，本調査をすることとなった。なお，後日実施された本調査と今回の試掘調査では住居跡番号が異なる。遺物は土師器・須恵器が出土しており，一部を本調査（第５次調査）報告で報告している。

遺物説明

第54図

1　出土位置・注記：表土　時代時期：縄文時代後期（称名寺式）器種：小型の深鉢形上器　文様：沈線文，単節斜縄文（LR）
2　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯４本）
3　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯４本）
4　出土位置・注記：３住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯５本）
5　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯７本）
6　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯５本）
7　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯５本以上），格子状文（箆状）
8　出土位置・注記：３住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形上器　文様：付加条縄文（R-S，R-Z）
9　出土位置・注記：１住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形上器　文様：付加条縄文（L-Z，R-S）
10　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形上器　文様：付加条縄文（R-Z）
11　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：付加条縄文（R-Z）
12　出土位置・注記：２住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：付加条縄文（L-Z，L-S）

8　向坪遺跡

(1) 第３次調査報告

調査地は，那珂川低地から北方に入り込む小谷津から170 mほど離れた台地上に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は４か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.9 mを測る。

調査の結果，住居跡３基，溝跡１条，ピット12基が確認された。出土土器からみて，奈良・平安時代の住居跡と思われる。当調査区は協議の結果，保護が図れないことが判明したため，本調査をすることとなった。なお遺物は土師器・須恵器が出土しており，一部を本調査（第４次調査）報告で報告している。

(2) 第５次調査報告

調査地は，那珂川低地から北方に入り込む小谷津から北東方向に伸びる小支谷の谷頭付近に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は７か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.6 mを測る。

調査の結果，住居跡が１基確認された。住居跡覆土中から須恵器小片が１点出土しており，９世紀の住居跡と思われる。住居跡のほか，時期不明のピットが７基確認されている。

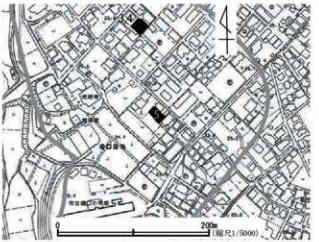
遺物はトレンチ表土から土師器・須恵器の小片が少量出土している。

なお，７トレンチ北西部からコンクリート製の建物基礎が確認されている。

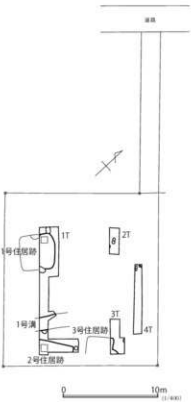
9　東原遺跡

(1) 第８次調査報告

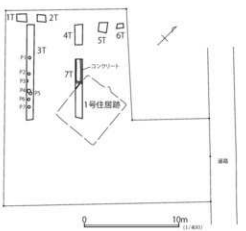
調査地は，新川が流れる旧真崎浦の低地から南に入り込む小支谷の台地縁辺に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は２か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.6～1.2 mを測る。調査の結果，溝跡が１条確認



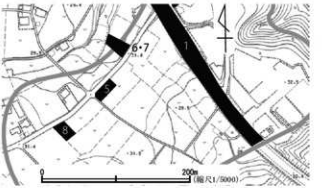
第 55 図　向坪遺跡の調査地点（数字は調査次数）



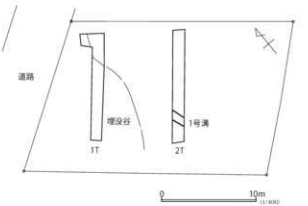
第 56 図　向坪遺跡第 3 次調査区



第 57 図　向坪遺跡第 5 次調査区



第 58 図　東原遺跡の調査地点（数字は調査次数）



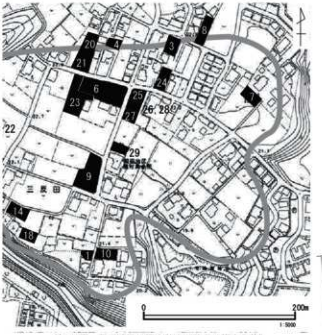
第 59 図　東原遺跡第 8 次調査区

された。1 号溝跡は深さ 5 ㎝ほどの浅い溝であり，遺物がなく時期不明である。なお，調査対象地の北西部に埋没谷が入り込んでいた。遺物は出土していない。

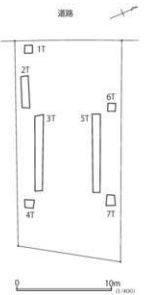
10　岡田遺跡

(1) 第 29 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺部から 170 m ほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑であった。調査は 7 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.7 ～ 1.1 m を測る。対象地は 1 メートルほど掘り下げても，遺構確認面が認められず，表土は埋め土の状況を示していた。ボーリングステッキにより深さを確認したところ，現地表から 2 メートル以上土盛りしているものと考えられた。対象地は浅い谷部に位置するのであろう。またトレンチは，深さ８０～９０センチ前後で水が湧いてきてしまうため，重機による掘削はそのあたりの深さで止めている。遺物は出土していない。

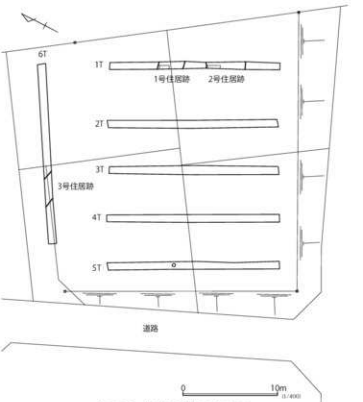


第 60 図　岡田遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 61 図　岡田遺跡第 29 次調査区

第 62 図　地蔵根遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 63 図　地蔵根遺跡第 2 次調査区

11　地蔵根遺跡

(1) 第 2 次調査報告

調査地は，那珂川低地から北に入り込む小支谷の縁辺に位置し，南東方向に緩く傾斜する地形を呈する。調査区の現況は畑地であった。調査は 6 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ～ 0.8 m を測る。調査の結果，竪穴住居跡 3 基（古墳後期：2 住，奈良：3 住，平安：1 住），ピット 1 基を確認した。調査区は全体的にゴボウ耕作による攪乱が顕著であるため，遺構の遺存状況はよくないと思われる。

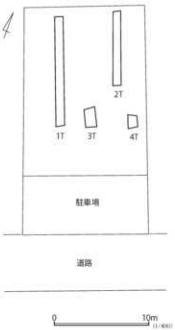
遺物は須恵器・土師器片，陶器片，軽石が出土した。

12　大平Ｂ遺跡

(1) 大平Ｂ遺跡第 1 次調査報告

調査地は，中丸川低地から西方に入り込む小支谷の谷頭付近から 150 m ほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。現状は荒地であった。調査は 4 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.7 m を測る。調査の結果，遺構

第 64 図　大平Ｂ遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 65 図　大平Ｂ遺跡第１次調査区

第 66 図　大平Ｂ遺跡第１次調査区

は確認されなかった。遺物は表土から縄文土器片が２点出土している。

遺物説明

第 66 図

1　出土位置・注記：1 トレ　時代時期：縄文時代前期（繊維土器）器種：深鉢形土器　法量：最大径 180 ㎜（残存率 16％の部分から推定）文様：単節斜縄文（RL、LR）備考：胎土に繊維を多量含む

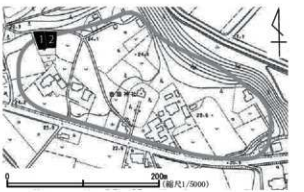
13　宮前遺跡

(1) 第１次調査報告

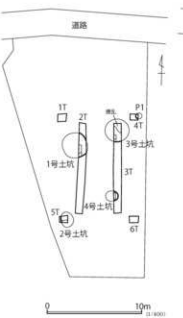
調査地は，大川低地から西方に入り込む小支谷の縁辺に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は６か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.6 m を測る。調査の結果，土坑を４基確認したが，出土遺物がないため時期不明である。土坑の覆土は硬いため，縄文時代の土坑になる可能性もあろう。遺物は表土から土器片が３点出土している。

(2) 第２次調査報告

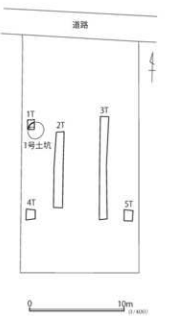
調査地は，第１次調査区の東方隣接地である。調査時は荒地であった。調査は５か所のトレンチを設定し，



第 67 図　宮前遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 68 図　宮前遺跡第１次調査区



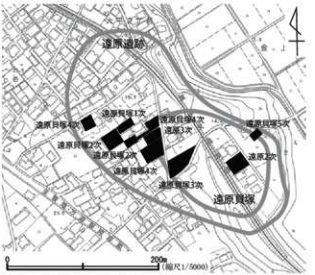
第 69 図　宮前遺跡第２次調査区

重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.4～0.7 mを測る。調査の結果，土坑を1基確認したが，出土遺物がないため時期不明である。土坑の覆土は硬いため，縄文時代の土坑になる可能性もあろう。調査区から遺物の出土はなかった。

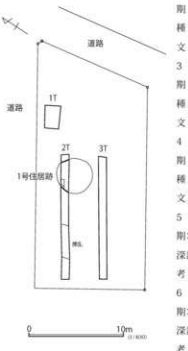
14　遠原遺跡

(1) 第3次調査報告

調査地は，中丸川低地を望む台地縁辺から60 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は3か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.6～0.9 mを測る。調査の結果，縄文時代前期の住居跡が1基確認され，縄文土器，石器が出土している。調査区からは縄文土器，須恵器が少量出土している。



第70図　遠原遺跡・遠原貝塚の調査地点（数字は調査次数）



第71図　遠原遺跡第3次調査区

遺物説明

第72図

1　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代早期（田戸下層式）器種：深鉢形土器　文様：刺突文（竹管状）

2　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代前期（繊維土器）器種：深鉢形土器　文様：単節斜縄文（LR）備考：胎土に繊維を含む

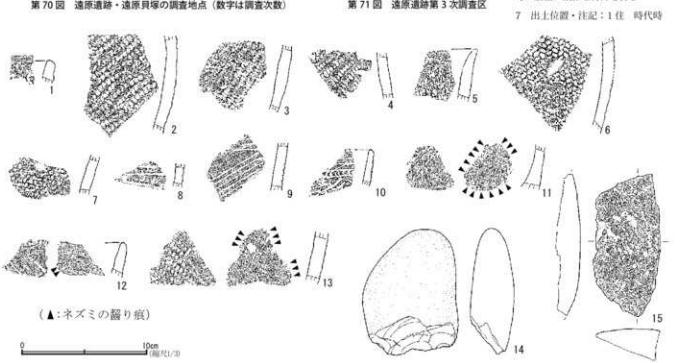
3　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代前期（繊維土器）器種：深鉢形土器　文様：単節斜縄文（LR）備考：胎土に繊維を含む

4　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代前期（繊維土器）器種：深鉢形土器　文様：単節斜縄文（LR）備考：胎土に繊維を含む

5　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代前期（繊維土器）器種：深鉢形土器　文様：異節縄文　備考：胎土に繊維を含む

6　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代前期（繊維土器）器種：深鉢形土器　文様：異節縄文　備考：胎土に繊維と骨針を含む

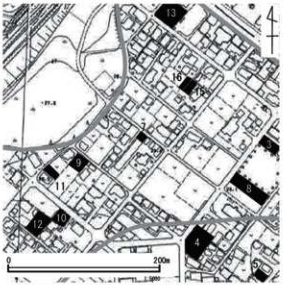
7　出土位置・注記：1住　時代時



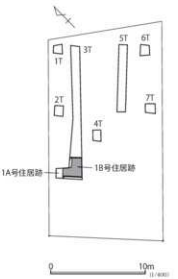
第72図　遠原遺跡第3次調査区出土遺物

期：縄文時代前期（繊維上器）器種：深鉢形土器　文様：異節縄文　備考：胎土に繊維を含む

8　出土位置・注記：1トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器　文様：平行沈線文（半截竹管），燃糸文（Lの絡条体か）



第 73 図　市毛上坪遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 74 図　市毛上坪遺跡第 16 次調査区

第 75 図　市毛上坪遺跡第 16 次調査区出土遺物

9　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器　文様：平行沈線文（半截竹管）　備考：胎土に骨針を含む

10　出土位置・注記：1トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：浅鉢形土器　文様：平行沈線・爪形文（半截竹管），燃糸文（Rの絡条体か）

11　出土位置・注記：3トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器　文様：燃糸文（Rの絡条体）備考：器内面から破断面にかけてネズミの齧り痕あり

12　出土位置・注記：3トレ　時代時期：縄文時代前期（浮島式）器種：深鉢形土器　文様：沈線文（半截竹管か）備考：器内面にネズミの齧り痕あり

13　出土位置・注記：1トレ　時代時期：縄文時代中期か　器種：深鉢形土器　文様：単節斜縄文（RL）備考：器内面から破断面にかけてネズミの齧り痕あり

14　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代　器種：礫器　石材：砂岩　法量：長さ 99 ㎜，幅 75 ㎜，厚さ 34 ㎜　重量：317.3 g

15　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代　器種：台石　石材：砂岩　法量：長さ 112 ㎜，幅 53 ㎜，厚さ 24 ㎜　重量：116.9 g　備考：破片　自然面に敲打による衝突痕が残る

15　市毛上坪遺跡

（1）第 16 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺から 440 mほど離れた場所に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 7 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.6 ～ 0.8 mを測る。調査の結果，古墳時代の住居跡が 2 基確認された。遺物は住居跡から土師器が出土し，トレンチ表土から土師器・須恵器小片が少量出土している。

遺物説明

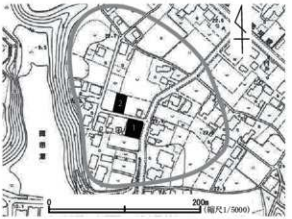
第 75 図

1　台帳：1B住P1　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 40 %，胴部 30 %　法量：口径（14.0），器高（14.4）　色調：外面にぶい黄橙～黒褐色，内面橙色　胎土：砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後縦方向のヘラミガキ，胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部上位ヨコナデ，下位～胴部ヘラナデ。　使用痕：外面器面にススト物が付着している。　備考：－

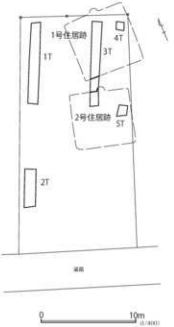
16　内手遺跡

（1）第 2 次調査報告

調査地は，那珂川低地から北に入り込む谷を望む台地



第 76 図　内手遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 77 図　内手遺跡第 2 次調査区

縁辺から 50 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 5 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 0.4 mを測る。調査の結果，遺構は奈良・平安時代の住居跡が 2 基確認された。遺物は住居跡やトレンチ表土から土師器・須恵器が出土している。

17　磯合古墳群

(1) 第 3 次調査報告

調査地は，海岸に面する台地縁辺から 100 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 14 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ～ 0.8 mを測る。調査の結果，遺構は，古墳（1 号墳，円墳）1 基の周溝，および時期不明の溝跡が確認された。古墳周溝を一部掘り込んだが，遺物は出土しなかった。なおトレンチからも遺物は出土していない。

調査区の南東隅に，古墳石室の石材の一部が掘り出されてまとめ置かれたと思われる場所がある。地元の方の話によると，４０年位そのままになっているとのことであり，他の方の話では，昔，畑の中に石があったという。それらの話からみて，昭和３０年代頃に畑から石が掘り出されて現在の場所にまとめ置かれた可能性がある。おそらくその石材は今回確認された古墳の石室石材であったと考えられる。

18　筑波台遺跡

(1) 第 4 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺から 250 mほど離れた地点に位置し，南に傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 6 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 1.3 mを測る。調査の結果，遺構は溝跡 3 条，土坑 3 基，ピット 2 基が確認された。1 号土坑から近世陶器小片が出土しているため，当土坑は江戸時代になる可能性があり，70cm 掘り込んでも底面に至らなかったことからすると，井戸跡の可能性もあろう。他の遺構の時期は不明である。遺物は表土から石器，土師器・須恵器片が出土している。

遺物説明

第 82 図

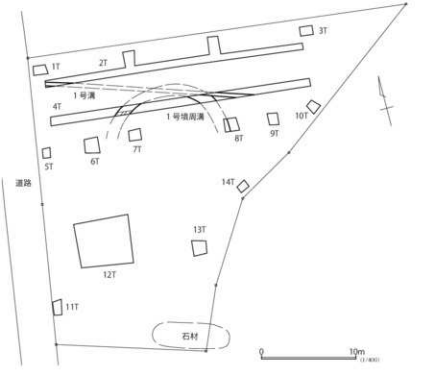
出土位置・注記：1 トレ　時代時期：旧石器時代　器種：刃器状剥片　石材：ホルンフェルス　法量：長さ 42 ㎜，幅 20 ㎜，厚さ 6 ㎜　重量：5.1 g

19　雷遺跡

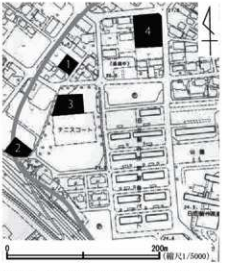
(1) 第 5 次調査報告

調査地は，中丸川低地を望む台地縁辺から 270 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 8 か所のトレンチを設定し，重

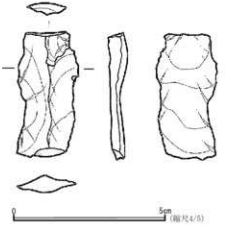
第 78 図　磯合古墳群の調査地点（数字は調査次数）



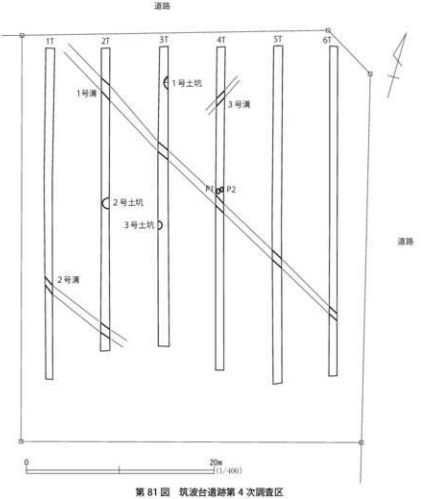
第 79 図　磯合古墳群第 3 次調査区



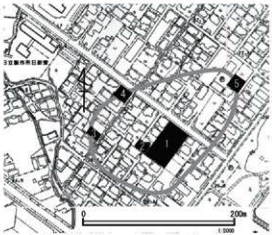
第 80 図　筑波台遺跡の調査地点（数字は調査次数）



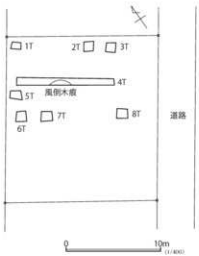
第 82 図　筑波台遺跡第 4 次調査区出土遺物



第 81 図　筑波台遺跡第 4 次調査区



第 83 図　雷遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 84 図　雷遺跡第 5 次調査区

機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.5 ～ 0.8 m を測る。調査の結果，風倒木痕が 1 ヵ所確認されただけであった。遺物は出土していない。

20　金上塙遺跡

(1) 第 10 次調査報告

調査地は，那珂川低地から北に入り込む小支谷の縁辺に位置する。調査時は畑地であった。調査は 4 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 1.0 m を測る。

調査の結果，住居跡は 5 基確認された。土器からみて 1 ～ 4 号住居跡は奈良・平安時代になろう。一部床面が露出していた 5 号住居跡は出土遺物がなく時期不明である。

溝跡は 3 条確認された。1 号溝からは陶器・かわらけが出土しており中世末頃の溝になる可能性がある。2・3 号溝は時期不明である。なお，台地の縁に沿って南北に伸びる 2 号溝は，調査地から北方にむけて，溝に沿うように高さ 1 m ほどの土塁状の高まりが現在も残っており，中世の遺構になる可能性があろう。

また，土坑とピットを多数確認した。その多くが時期不明であるが，2・3 号土坑やピット 1 からは内耳土鍋が出土しており，中世に位置付けられる土坑・ピットが存在するようである。なお 2 2・3 2 号土坑は粘土貼り土坑である。

遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，陶器，かわらけ，鉄鏃，砥石が出土している。

遺物説明

第 87 図

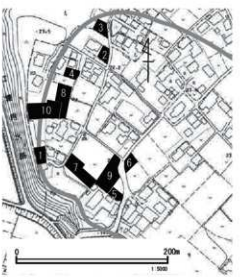
1　注記：―　材質：須恵器　器種：坏　残存：底部　法量：底径 5.8　色調：灰色　胎土：礫（白，灰少），砂（白）　技法等：回転ヘラ切り。焼成：硬質。

2　注記：―　材質：須恵器　器種：有台坏　残存：底部外周 15%　法量：高台径（14.4）　色調：灰色　胎土：砂（白，白透少，灰少）　技法等：高台設置面摩滅

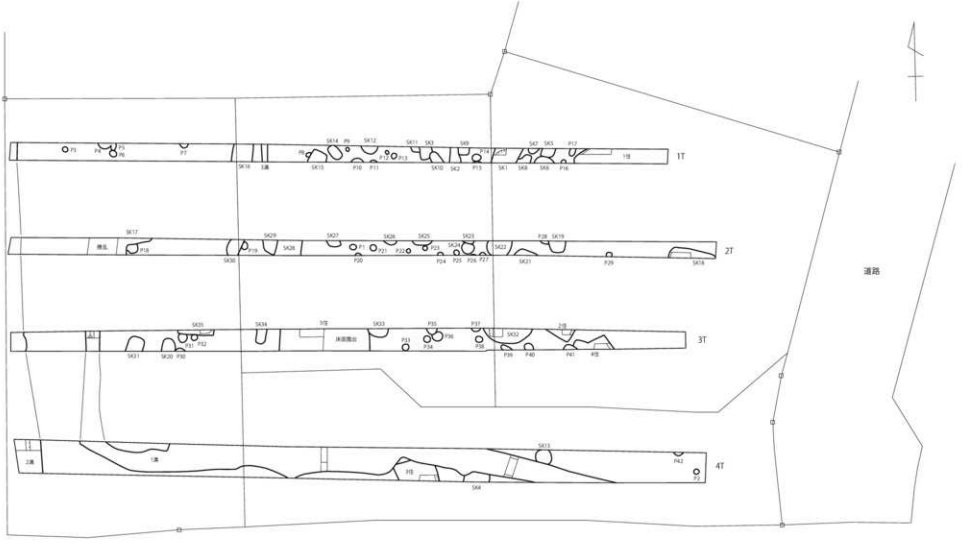
3　注記：―　材質：土師器　器種：甕　残存：上半部 10%　法量：口径（26.1）　色調：口縁部橙褐色，胴部外面黒褐色，胴部内面暗褐色化　胎土：礫（白），砂（白多，白透多），白雲母多　技法等：胴部内外面ナデ。肩部外面ヘラナデ痕。口縁部ヨコナデ。　備考：新治窯付近産

4　注記：―　材質：土師器　器種：甕　残存：底部 50%　色調：暗褐色，橙褐色　胎土：砂（白多，白透多），白雲母多　技法等：底部外面木葉痕。胴部外面斜方向ヘラミガキ。胴部内面横方向ナデ。胴部外面に煤付た粘土付着する。竈粘土か。　備考：新治窯付近産

5　注記：―　材質：土師器　器種：小皿　残存：底部 50%　法量：底径（6.8）　色調：外面明橙色・灰褐色，内面橙色　胎土：骨針，赤色粒　備考：かわらけ

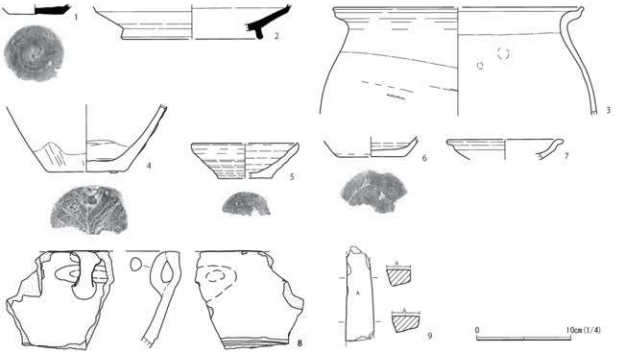


第 85 図　金上塙遺跡の調査地点（数字は調査次数）

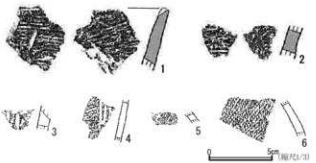


SKは土坑、Pはピットを示す。

第 86 図　金上場遺跡第 10 次調査区



第 87 図　金上塙遺跡第 10 次調査区出土遺物（1）



第 88 図　金上塙遺跡第 10 次調査区出土遺物（2）

6　注記：―　材質：土師器　器種：小皿　残存：底部 40%，口縁部若干　法量：口径（11.0），器高 3.7，底径（5.7）　色調：明橙色　胎土：礫（透少），黒雲母多，骨針微量　技法等：糸切り　備考：かわらけ

7　注記：―　材質：陶器　器種：皿　残存：口縁部 10%　法量：口径（11.6）　色調：素地白褐色，白色釉　技法等：長石釉

8　注記：―　材質：土師質土器　器種：内耳鍋　残存：内耳部　色調：外面黒色，内面灰褐色，断面褐色　胎土：砂（透多），骨針　技法等：外面煤ける。胴上部に沈線が 2 条巡る。

9　注記：―　材質：石　器種：砥石　残存：両端欠失　法量：長さ 9.9 ～幅 3.0，厚さ 1.7　色調：白灰褐色　特徴：砥面 1 面（A 面）。備考：「珪化流紋岩，斑晶：長石（仮晶）。石基：白色及淡青緑色細粒物質，空隙がやや多い。」（「」内は矢野恵也氏の鑑察による。）　群馬県産砥沢産か。

第 88 図

1　出土位置・注記：SK1　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）器種：深鉢形土器　文様：器内外面とも条痕文　備考：胎土に繊維と多量の骨針を含む

2　出土位置・注記：1 溝　時代時期：縄文時代早期（条痕文系）器種：深鉢形土器　文様：器外面条痕文　備考：胎土に繊維を含む

3　出土位置・注記：表土　時代時期：縄文時代中期（加曽利 E 式）器種：深鉢形土器　文様：縄文，沈線文

4　出土位置・注記：表土　時代時期：縄文時代中期（加曽利 E 式）器種：深鉢形土器　文様：縄文（LR），沈線文　備考：かなり小型の土器，胎土に骨針を含む

5　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代（中期後半 - 後期前半）器種：壺形土器　文様：付加条縄文（R·S）

6　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代（中期後半 - 後期前半）器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（LR+R）

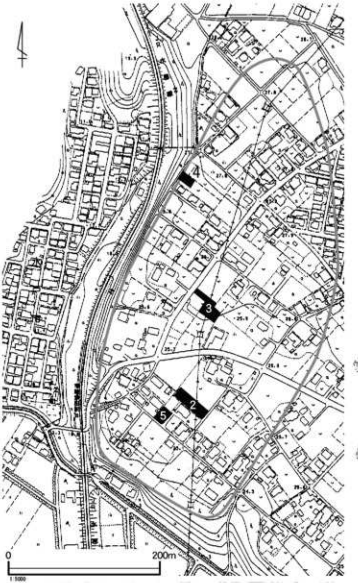
21　黒袴遺跡

（1）第 5 次調査報告

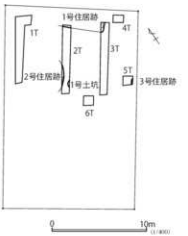
調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺部から 80 m ほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 6 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.6 m を測る。

調査の結果，住居跡は 3 基確認された。土器からみて 2 号住居跡は弥生時代，1・3 号住居跡は古墳時代になろう。住居跡は一部掘り込み，床までの深さを確認した。遺構確認面からの住居跡の深さは，1 号住居跡が 2 3 cm，2 号住居跡が 1 1 cm，3 号住居跡が 3 cm である。

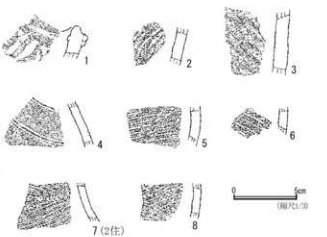
遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，石器が出土している。



第 89 図　黒袴遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 90 図　黒袴遺跡第 5 次調査区



第 91 図　黒袴遺跡第 5 次調査区出土遺物（1）

遺物説明

第 91 図

1　出土位置・注記：2トレ　時代時期：縄文時代中期（加曽利 E 式）器種：深鉢形土器　文様：隆帯文

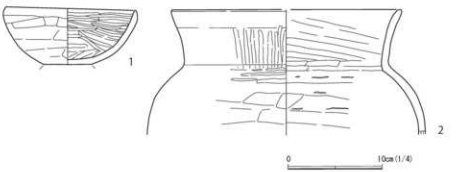
2　出土位置・注記：2トレ　時代時期：縄文時代中期　器種：深鉢形土器　文様：単節斜縄文（RL）

3　出土位置・注記：2トレ　時代時期：縄文時代中期　器種：深鉢形土器　文様：無節斜縄文（L）

4　出土位置・注記：3トレ　時代時期：弥生文時代中期（足洗式）器種：壺形土器　文様：平行沈線文（半截竹管）

5　出土位置・注記：2トレ 1 住　時代時期：弥生文時代中期　文様：付加条縄文（LR+R）　備考：胎土に多量の骨針を含む，器外面に炭化物付着

6　出土位置・注記：5トレ　時代時期：弥生文時代中期　文様：付加条縄文（RL+L）



第 92 図　黒袴遺跡第 5 次調査区出土遺物（2）

7　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（L.Z, R × R）

8　出土位置・注記：2トレ　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（R × R, L.Z）備考：胎土に骨針を含む

第 92 図

1　台帳：3トレ 1 住　材質：土師器　器種：杯　残存：50％　法量：

口径 13.8，器高 5.8 ～ 6.1，底径 5.0　色調：橙色　胎土：砂（白多，透多，赤少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部のヘラ削り後ナデ，底面ヘラ削り。内面ヘラミガキ。　使用痕：―　備考：―

2　台帳：5 トレ　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁～胴部上位 10%　法量：口径（24.4），器高（13.3）

色調：暗褐～砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部上位ヨコナデ，下位～頸部ヘラミガキ，胴部ヘラ削り後ナデ。内面ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

22　市毛下坪遺跡

(1) 第 12 次調査報告

調査地は，那珂川低地を望む台地縁辺部に位置し，調査時は荒地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し，重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.7 ～ 1.1 m を測る。

調査の結果，遺構確認面より上層が攪乱されていることが確認されたが，遺構確認面に鹿沼パミスが露出していることからみて，当調査区は，全体的に旧地表より 1 ～ 2 m ほど削平された後，70 ～ 110cm 程盛土されていることがわかった。削平の時期は不明である。

遺構は土坑が 4 基確認された。2，3 号土坑から陶器，かわらけが出土しており，江戸時代の土坑になるものと思われる。

遺物は，土師器，須恵器，陶器（すり鉢，碗），かわらけが出土している。かわらけには油煙が付いており，燈明具として用いられたものである。

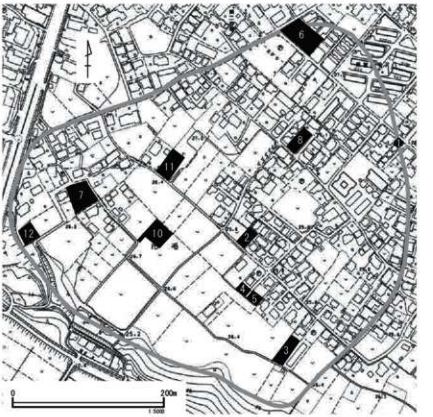
遺物説明

第 95 図

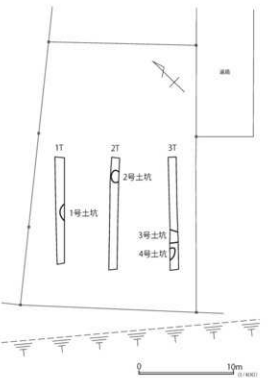
1　出土位置：3 号土坑　材質：土師器　器種：小皿　残存：口縁部若干欠失　法量：口径 6.9，器高 2.0，底径 4.3　色調：明褐色　胎土：黒雲母細片少量。赤色粒。　技法等：回転糸切り。口縁部に油煙付着。

2　台帳：3 号土坑　材質：土師器　器種：椀　残存：体部 80%欠失　法量：口径（11.1），器高 6.6，高台径 6.0　色調：素地白褐色　胎土：―　技法等：高台内側を除く全面に鉄釉。　備考：瀬戸・美濃産鉄釉丸碗（18 世紀後半）

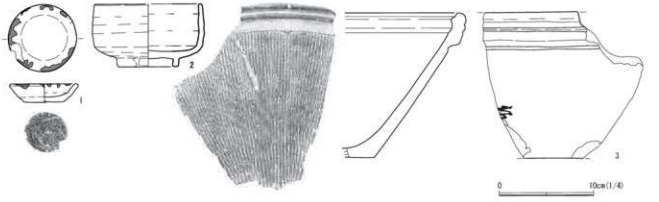
3　出土位置：2 号土坑　材質：陶器　器種：擂鉢　残存：体部片　法量：器高 15.3　色調：外面茶色，底部周辺橙色。内面赤橙色。　胎土：礫（白，白透少，灰少）　技法等：擂目数 11 本，幅 3.4cm。体部外面回転ヘラ削り。体部外面に墨書。　備考：在地産か。



第 93 図　市毛下坪遺跡の調査地点（数字は調査次数）



第 94 図　市毛下坪遺跡第 12 次調査区



第 95 図　市毛下坪遺跡第 12 次調査区出土遺物

Ⅲ　本調査報告

1　岡田遺跡第 28 次調査報告

(1) 調査の経過

期間 / 平成 27 年 12 月 10 日～平成 28 年 1 月 21 日

担当 / 佐々木義則　　面積 /113 ㎡

時代 / 弥生・古墳・平安時代

遺構 / 竪穴住居跡 5 基 (弥生時代 1 基，古墳時代 1 基，平安時代 3 基)，溝跡 1 条 (時期不明)，土坑 2 基（平安時代 1 基，時期不明 1 基）

調査地は，那珂川を望む台地縁辺部から 230 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり，建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は試掘調査（第 26 次調査，『平成 27 年度市内遺跡発掘調査報告書』所収）がなされていたため，今回の調査区に係る遺構配置はおおよそ予想がついた。しかし本調査に入ってみると，当初の予想とは異なる遺構配置となったため，本調査にあたり改めて遺構番号を付した。以下，簡単に調査の経過を記す。

12 月 10 日：重機による表土除去開始。遺構確認作業。

12 月 15 日：遺構確認状況撮影。遺構掘り込み開始。

12 月 18 日：第 1・2 号住居跡平面図作成　12 月 21 日：3B 号住居跡平面図作成　12 月 25 日：年末のため器材撤収　1 月 5 日：調査再開。3A 号住居跡平面図作成。

1 月 6 日：調査区全体写真　1 月 8 日：調査区全体図作成　1 月 13 日：住居掘形・竈図面作成　1 月 15 日：器材撤収　1 月 20 日：重機による埋戻し　1 月 21 日：ロープ・看板撤収

(2) 住居跡

第 1 号住居跡

遺構　他遺構との重複はない。当住居跡の主軸方向は，N-25°-E を測る。竪穴部の規模は東西 3.0 m，南北 2.8 mで，形状はやや横長の方形である。壁高は東壁 4 ㎝，西壁 3 ㎝，南壁 3 ㎝，北壁 1 ㎝を測る。壁周溝は認められなかった。竈は北壁のやや東寄りの所に位置する。主柱穴はみられなかった。床は東寄り部分が硬化している。

遺物出土状況　住居覆土が薄かったため遺物量は少なく，いずれも破片での出土であった。

遺物説明

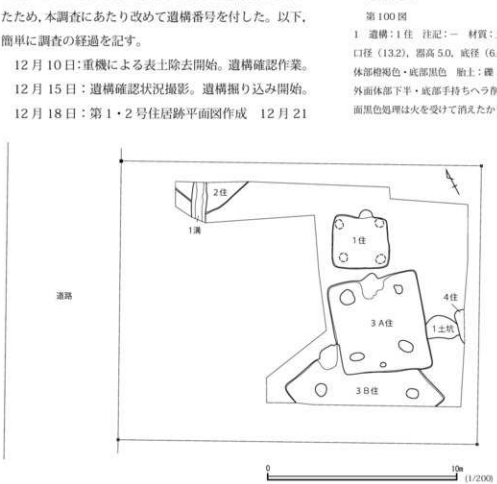
第 100 図

1　遺構：1 住　注記：－　材質：土師器　器種：杯　残存：20%　法量：口径（13.2），器高 5.0，底径（6.0）　色調：外面明褐色・橙褐色，内面体部橙褐色・底部黒色　胎土：礫（白透），砂（透多，白，灰）　技法等：外面体部下半・底部手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ（底 1 方向）。内面黒色処理は火を受けて消えたか？

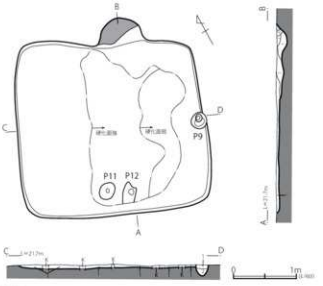
2　遺構：1 住　注記：P2・3　材質：土師器　器種：椀　残存：口縁部 40%　法量：口径（14.4）　色調：橙色，暗灰褐色　胎土：礫少（灰チャート，砂岩），砂（白褐，白透少，透少）　技法等：－　備考：火を受け変色している。

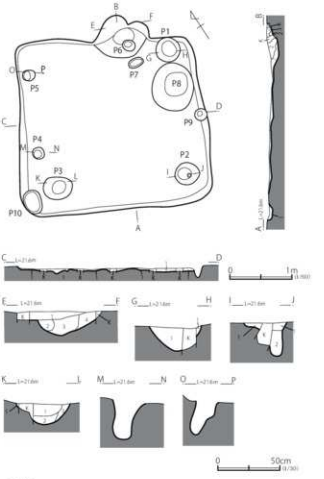
3　遺構：1 住　注記：－　材質：緑釉陶器　器種：椀　残存：口縁部片　法量：－　色調：素地灰色，釉は濁った緑色　胎土：-　技法等：－

4　遺構：1 住　注記：P1　材質：土師器　器種：杯　残存：底部 90%　法量：底径 6.4　色調：外面明褐色，内面黒色　胎土：砂（白，透明）　技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。底部内面に四弁花状の暗文を施す。底部周囲の破面は打ち抜き



第 96 図　岡田遺跡第 28 次調査区





第 97 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号住居跡

第 98 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号住居跡掘形

により形を整えている可能性あり。

5　遺構：1 住　注記：P2　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 20%　法量:口径（19.7）　色調:外面褐色,肩部以下および口縁部煤ける。内面茶色，頸部より上が暗褐色　胎土：砂（白透多，白），白雲母多　技法等：口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。

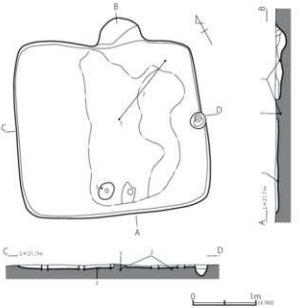
第 2 号住居跡

遺構　第 1 号溝跡と重複しており，新旧は切り合い関係から，第 2 号住居跡→第 1 号溝跡である。住居南西隅部のみ調査した。当住居跡の主軸方向は，N -22°- W を測る。竪穴部の規模は不明であるが，隅丸方形の形状を持つと思われる。壁高は西壁 9 ㎝，南壁 8 ㎝を測る。壁際には浅い周溝がみられた。ピット 2 が主柱穴になるものと思われ，床面からの深さは 42cm 程であった。床面は全体的に硬化する。竪穴部覆土は暗褐色土を基調としており，自然埋土と思われる。

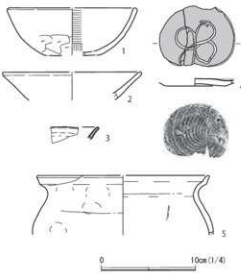
遺物出土状況　床面より土器 4・5 が出土している。擬口縁を持つ中型壺形土器 4 は床面に横になった状態で出土しており，一部を耕作機械による攪乱溝によって破壊されている。片口付鉢形土器 5 は住居西壁際に正位の状態で置かれていたような出土状況であった。

遺物説明

第 102 図



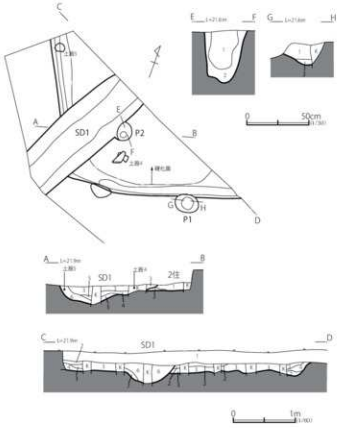
第 99 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号住居跡遺物出土状況



第 100 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号住居跡出土遺物

（残存率 32％），底径 100 ㎜（残存率 65％）　文様：付加条縄文（L+L，L 2），底面布目痕　備考：試掘調査（第 26 次）で出土した底部破片（［佐々木他 2016］第 55 図 4）と接合し，観察の所見を一部訂正した。上端の破断面には摩滅が認められることから，ここを擬口縁として再利用されたことが推定される。器外面の上端部付近には雨垂れ状に炭化物が付着し（写真 A），器内面の底部付近には明瞭な境界で変色が見られる（写真 B）。煮沸具として使用されたと推定されるが，擬口縁には，炭化物の付着が認められないことから，それは再利用の以前の痕跡である。縄文の一方は，軸縄と絡条の角度が異なるが，付加条第 1 種の原体である。

5　出土位置・注記：2 住 P1　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：片口付鉢形土器　法量：高さ 78 ㎜，口径 141 ㎜（残存率 95％），底径 64 ㎜（残存率 95％）　文様：付加条縄文（R S），底面布目痕　備考：片口にほぼ対向した位置の口縁部に 2 孔が穿たれている。焼成前の穿孔であり，円形竹管状の工具を器内面側から突き刺したものと推定される。器内面の底部付近に赤色顔料の付着が認められる。器外面の底部付近にも赤色の付着物が見られるが，これは顔料であるのか確実でない。



土層説明

A8 土層断面
1　暗褐色（ローム粒含む）
2　褐色（ローム粒多量含む）
3　暗褐色（ローム粒含む）
4　暗褐色（ロームブロック含む　黒褐色土混じる）
5　暗褐色（ローム粒含む）
6　褐色（ローム粒多量含む　ロームブロック小量含む）

CD 土層断面
1　暗褐色（耕作土）
2　暗褐色（黒褐色土混じる）
3　暗褐色
4　褐色（ローム小ブロック含む）
5　褐色（ロームブロック含む）
6　暗褐色（第 3 層より暗色）
7　明褐色（ローム土多量混じる　黒褐色土混じる）

EF 土層断面
1　黒褐色
2　黒褐色（ローム小ブロック多量含む）

GH 土層断面
1　黒褐色（ローム粒多量含む）
2　黒褐色（ローム土主体）

第 101 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 2 号住居跡，第 1 号溝跡

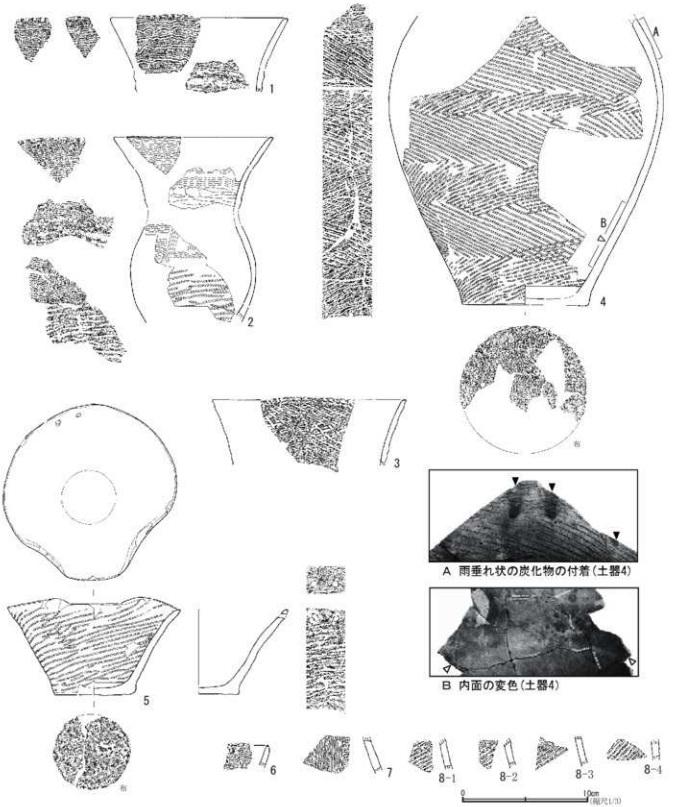
6　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：口唇部刻み（縄文原体か），櫛描文（櫛歯 4 本）

7　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）

8　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：付加条縄文（R × R）

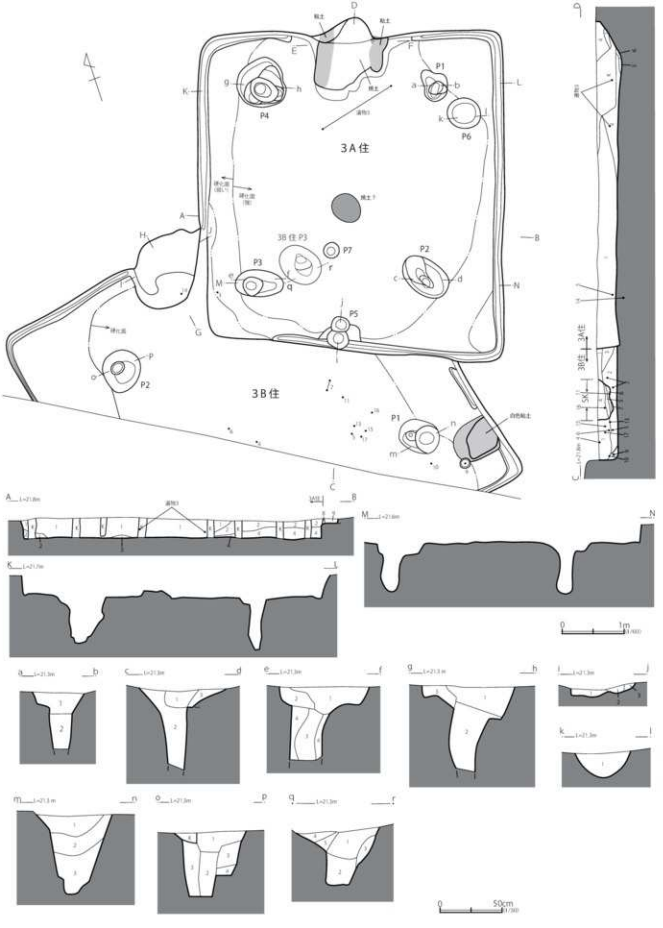
第 3A 号住居跡

遺構　第 3B 号住居跡，第 1 号土坑と重複しており，新旧は，土層から第 3B 号住居跡→第 3A 号住居跡，遺物から第 3A 号住居跡→第 1 号土坑となる。当住居跡の主軸方向は，N -19°- E を測り，竈を北壁中央に置く。竪穴部の規模は東西 4.9m，南北 5.3m，面積 26.0 ㎡で，

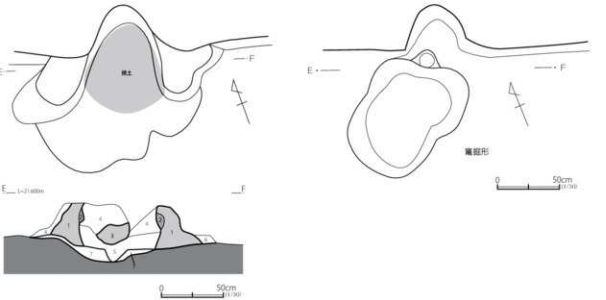


第102図　岡田遺跡第28次調査区第2号住居跡出土遺物

やや縦長の方形を呈する。壁高は東壁31㎝，西壁31㎝，南壁30㎝，北壁35㎝。壁周溝は住居南西隅で不明瞭であったが全周するものであろう。ピットはP1～4が主柱穴，P5は出入口施設関連のピットであろう。床面は竈前から南壁中央にかけて，主柱穴に囲まれた部分を中心に硬化している。なお床面中央部が径40㎝ほどの円形に硬化していない部分があり，その部分の土が黄色味を帯びていたことから，浅い炉があった可能性がある。竪穴部覆土はロームブロックを含む褐色～明褐色土を基調とするため，人為的埋土と思われる。竈は袖部を残し



第103図　岡田遺跡第28次調査区第3A・3B号住居跡



第 104 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 3A 号住居跡竈

土層説明

3 A 住　AB・CD 土層断面

1　褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック少量含む　人為的埋土か）
2　褐色（ローム粒多量含む　暗褐色土混じる　人為的埋土か）
3　褐色（ローム粒多量含む　ロームブロック多量含む　人為的埋土か）
4　明褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック含む　人為的埋土か）
5　黒褐色（明褐色粘土粒・焼土粒含）
6　橙色（焼土粒主体）
7　灰色（灰色粘土）
8　明褐色（ロームブロック含む）
9　暗褐色（ローム粒含む）

3 B 住　CD 土層断面

1　暗褐色（ローム小ブロック・ローム粒多量含む　黒褐色土粒含む）
2　暗褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック・黒褐色土粒含む）
3　黒褐色（ローム粒含む）
4　褐色（ローム粒・ローム小ブロック多量含む　黒褐色土粒含む）
5　黒褐色（ローム粒含む）
6　橙色（焼土ブロック含む）
7　黒色

3 A 住竈　EF 土層断面

1　灰褐色（カマド砂質粘土主体　小砂利混じる）
2　赤橙（焼土）
3　灰色（カマド砂質粘土）
4　褐色（ローム粒やや多量含む　焼土粒少量含む　小砂利少量混じる）
5　暗褐色（焼土粒・灰含む）
6　褐色（砂利含む）
7　明褐色（ローム小ブロック多量含む）

3 B 住竈　GH 土層断面

1　橙色（焼土）
2　明褐色（焼土粒・焼土小ブロック含む）
3　橙褐色（焼土ブロック主体）
4　明褐色（カマド粘土粒含む）
5　橙褐色（焼土主体）
6　明褐色（焼土ブロック・カマド粘土ブロック多量含む）

3 B 住竈　IJ 土層断面

1　白褐色（カマド粘土）
2　橙色（カマド粘土が焼けたもの）
3　橙色（カマド粘土と焼土）
4　褐色（ローム粒含む）
5　明褐色（カマド粘土ブロック多量含む）
6　明褐色（カマド粘土粒・焼土粒多量含む）
7　明褐色（カマド粘土の崩壊土多量混じる）
8　褐色（ローム粒・ロームブロック小量含む）
9　黄褐色（ロームブロック主体　黒褐色土混じる）

3 B 住竈脚形　CD 土層断面

1　黄褐色（ローム粒非常に多量含む　ロームブロック含む）
2　明褐色（ローム粒多量含む）
3　黄褐色（ローム粒非常に多量含む　ローム小ブロック含む）

3 A 住ピット 1　ab 土層断面

1　褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック含む）
2　褐色（ローム粒含む　締まりなし）

3 A 住ピット 2　cd 土層断面

1　褐色（ローム粒含む）
2　褐色（ローム粒多量含む　締まりなし）
3　黄褐色（ロームブロック多量含む）

3 A 住ピット 3　ef 土層断面

1　褐色（ローム粒やや多量含む）
2　明褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック含む）
3　褐色（ローム粒含む）
4　黄褐色（ロームブロック多量含む）

3 A 住ピット 4　gh 土層断面

1　褐色（ローム粒含む）
2　褐色（ローム粒多量含む　締まりなし）
3　明褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック）

3 A 住ピット 5　ij 土層断面

1　褐色（ローム粒含む）
2　暗褐色（ローム粒含む）
3　明褐色（ローム粒多量含む）

3 A 住ピット 6　kl 土層断面

1　黄褐色（ロームブロック多量含む　黒褐色土少量混じる）

3 B 住ピット 1　mn 土層断面

1　褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック含む）
2　黄褐色（ロームブロック多量含む）
3　黄褐色（ロームブロック主体）

3 B 住ピット 2　op 土層断面

1　褐色（ローム粒多量含む）
2　明褐色（ローム粒非常に多量含む　締まりなし）
3　黄褐色（ローム小ブロック主体　黒褐色土少量混じる）
4　黄褐色（ロームブロック主体）

3 B 住ピット 3　qr 土層断面

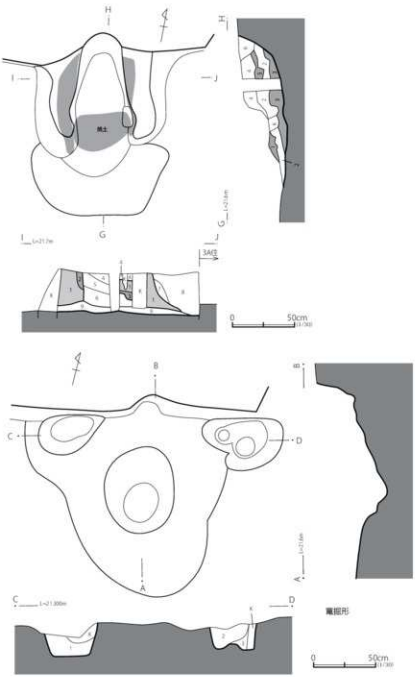
1　褐色（ローム粒やや多量含む）
2　明褐色（ローム粒多量含む）
3　黄褐色（ローム粒主体　ロームブロック含む）
4　明褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック含む）

3A・B 住竈形　AB・CD・GH・IJ 土層断面

1　黄褐色（ロームブロック多量含む　黒褐色土混じる　締まりあり
　3A 住竈形埋土）
2　黄褐色（ローム小ブロック多量含む　3B 住竈形埋土か）
3　黄褐色（ローム土主体）
4　黄褐色（ロームブロック多量含む　暗褐色土混じる　締まりあり）
5　明褐色（ロームブロック含む　パミス粒含む）
6　黄褐色（ロームブロック多量含む　締まりあり）
7　明褐色（ローム粒多量含む）
8　黄褐色（ロームブロック多量含む　黒褐色土混じる　締まりあり）

3A・B 住竈形　EF 土層断面

1　黄褐色（ロームブロック主体　褐色土混じる）
2　黄褐色（ロームブロック主体　締まりなし）
3　黄褐色（ロームブロック主体　明褐色土混じる　3B 住の竈形埋土）



第 105 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 3B 号住居跡竈

ているが，焚口付近は壊されている。竈内の焼土の位置からみて，掛け口は竪穴内に位置したものと考えられる。住居掘形はサブトレンチによる調査にとどまるが，竪穴部外周を掘り込むタイプのようである。

遺物出土状況　出土した遺物は少なく，いずれも覆土中から破片で出土したところから，人為的埋戻しに伴う廃棄遺物とみられる。

遺物説明

第 107 図

1　遺構：3A 住　注記：3 区　材質：須恵器　器種：有台杯　残存：底部 20％　法量：高台径（6.7）　色調：灰色　胎土：砂（白，白透少），骨針少　技法等：焼成硬質。底部外面に墨書。
備考：本葉下窯産か？

2　遺構：3A 住　注記：I 区　材質：須恵器　器種：有台杯（もしくは有台盤）　残存：底部片　法量：－　色調：灰色　胎土：砂（白，灰，白透）　技法等：焼成硬質。底部外面に墨書。

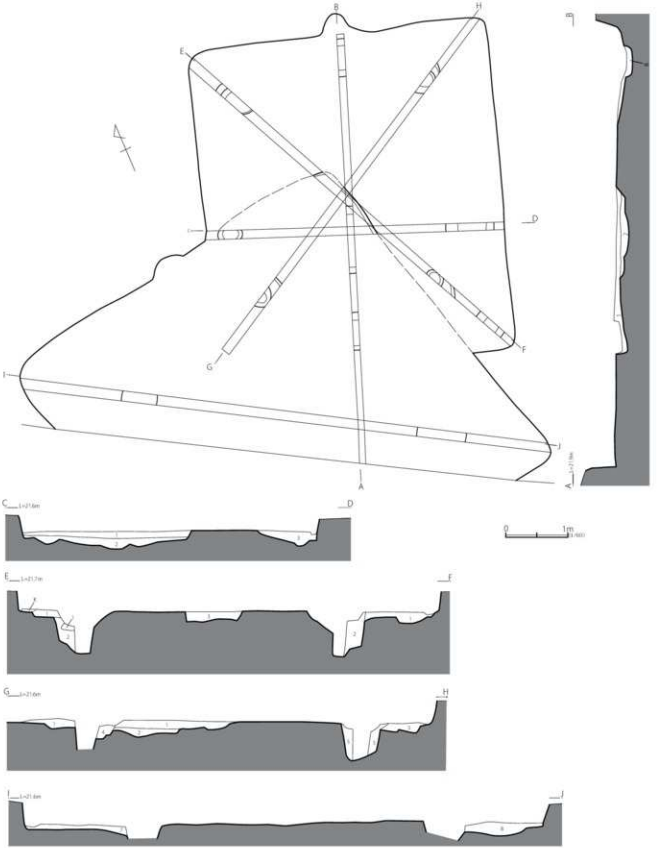
3　遺構：3A 住　注記：P1・2　材質：須恵器　器種：有台杯蓋　残存：体部 45％　法量：口径 18.6　色調：灰色。外面全体に明褐色の灰がかかる。　胎土：礫（灰少），砂（白）　技法等：天井部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。

第 3B 号住居跡

遺構　第 3A 号住居跡と重複しており，新旧は土層から第 3B 号住居跡→第 3A 号住居跡となる。当住居跡の主軸方向は，N -12°-W を測り，竈を北壁中央に置く。竪穴部の規模は東西 6.2m，南北 5.9m，面積 36.6 ㎡で，やや横長の方形を呈する。壁高は東壁 29 ㎝，西壁 28 ㎝，南壁 32 ㎝，北壁 39 ㎝。壁周溝は調査部分については見られており，おそらく全周するのであろう。ピットは P1 ～ 3 が主柱穴であろう。床面は竈前から主柱穴に囲まれた部分を中心に硬化する。竪穴部覆土は暗褐色～黒褐色土を基調としており自然埋土と思われる。竈は袖部を残しているが，焚口付近は壊されている。竈内の焼土の位置からみて，掛け口は竪穴内に位置したものと考えられる。竈掘形をみると，壁際部分に二つのピットが認められるので，竈両脇に細い柱が立てられていたのかもしれない。住居掘形はサブトレンチによる調査にとどまるが，竪穴部外周を浅く掘り込むようである。

遺物出土状況　P1 の北西部付近の覆土中に土器群がみられる。第 103 図ＣＤ土層断面図でみると，このあたりに底面近くに焼土が堆積する土坑があり，平面では明確に捉えられなかったが，土器群はこの土坑に伴うものである可能性がある。また，住居南東隅床面に，東壁に接するように白色粘土の堆積が認められた。

遺物説明

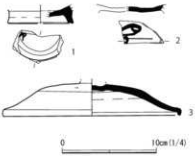


第 106 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 3A・3B 号住居跡掘形

第 108 図

1　台帳：1 住 P3　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（13.0），器高（3.3）　色調：外面にぶい黄橙色，内面黒褐色　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ？。内面不定方向にヘラミガキ。内面は黒色処理。　使用痕：―　備考：―

2　台帳：1 住 P4，1 住　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：



第 107 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 3A 号住居跡出土遺物

口径（12.3），器高（2.9）　色調：にぶい黄橙色　胎土：礫（白微），砂（白多，透多，黒少），白雲母・骨針含む　焼成：良好　技法等：内外面ともヘラナデ？　使用痕：―　備考：内外面とも器面が摩滅している。

3　台帳：3A 住 P5　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 10％　法量：口径（19.0），器高（6.5）　色調：にぶい黄橙色　胎土：砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

4　台帳：3B 住 P16　材質：土師器　器種：甕　残存：20％　法量：口径（15.6），器高（15.6）　色調：外面橙～にぶい黄橙～黒色，内面黄橙色　胎土：礫（白微，灰微），砂（白多，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

5　台帳：3B 住 P5，3B 住　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 20％　法量：口径（18.0），器高（8.1）色調：橙～にぶい橙～暗褐色　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

6　台帳：3B 住 P17　材質：土師器　器種：高杯　残存：30％　法量：口径（6.0），器高（5.5），底径（8.4）　色調：黒褐～黒色　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面杯部ヘラナデ・ヘラミガキ。脚部ヘラ削り。杯部内面黒色処理。　使用痕：―　備考：―

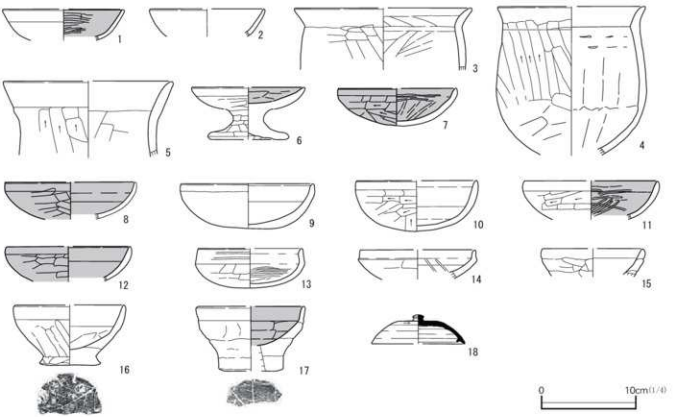
7　台帳：3B 住 P9・11　材質：土師器　器種：杯　残存：60％　法量：口径 12.4，器高 4.0　色調：褐～黒褐色　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：―　備考：―

8　台帳：3B 住　材質：土師器　器種：杯　残存：10％　法量：口径（14.0），器高（3.9）　色調：にぶい黄橙～黒褐色　胎土：砂（白少，透少，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：―　備考：―

9　台帳：3B 住 P8　上師器　器種：杯　残存：90％　法量：口径 14.2，器高 4.8　色調：外面黄橙色～にぶい黄橙色。内面黄橙色　胎土：小石（灰微），礫（白微，灰微），砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ？。内面口縁部ヨコナデ，体部ナデ？　使用痕：―　備考：内外面とも器面が非常に摩滅している。

10　台帳：3B 住 P1，1 区　材質：土師器　器種：杯　残存：30％　法量：口径（12.8），器高（5.4）　色調：外面浅黄橙色。内面浅黄橙～黒褐色　胎土：小石（灰微），砂（白多，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。　使用痕：―　備考：―

11　台帳：3B 住 P7　材質：土師器　器種：杯　残存：20％　法量：口径（14.1），器高（4.1）　色調：外面黒褐色。内面黒色　胎土：砂（白微，灰微），砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：口縁部ヨコナデ，体部



第 108 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 3B 号住居跡出土遺物

ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラミガキ。内面黒色処理。　使用痕：―　備考：―

12　台帳：3B 住，3B 住 1 区　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（13.1），器高（3.8）　色調：暗褐色　胎土：砂（白少，透少）　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：―　備考：―

13　台帳：3B 住 P6　材質：土師器　器種：杯　残存：30%　法量：口径（11.1），器高 4.2　色調：赤～橙～黄橙色　胎土：砂（白多，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ。　使用痕：―　備考：―

14　台帳：3B 住 P18　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（12.2），器高（3.1）　色調：橙～にぶい黄橙色　胎土：砂（白少，透少，骨針含む）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁～体部上位ヨコナデ，中～下位ヘラナデ・若干のヘラミガキ。　使用痕：―　備考：外面器面が摩滅している。

15　台帳：3B 住 P3　材質：土師器　器種：杯　残存：20%　法量：口径（11.1），器高（3.0）　色調：赤色　胎土：砂（白多，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。若干のヘラミガキ。　使用痕：―　備考：外面に輪積痕が残る。

16　台帳：3B 住 P2，1 区　材質：土師器　器種：椀　残存：40%　法量：口径（11.6），器高 6.4，底径（6.4）　色調：橙～黒褐色　胎土：礫（白微），砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ・ナデ，底面木葉痕。内面口縁～体部中位ヨコナデ，下位ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

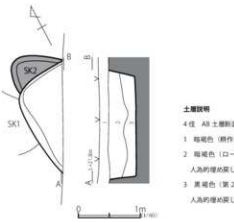
17　台帳：3B 住 P4　材質：土師器　器種：椀　残存：30%　法量：口径（11.6），器高 6.9，底径（7.0）　色調：外面にぶい黄橙～黒褐色。内面黒色。胎土：礫（白微），砂（白多，透多，黒多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ナデ，底面木葉痕。内面ヨコナデ。内面黒色処理。　使用痕：―　備考：外面に輪積痕が残る。

18　台帳：3B 住　材質：須恵器　器種：杯蓋　残存：70%　法量：口径 5.0，器高 3.0，鈕径 1.1，鈕高 0.6　色調：灰色　胎土：砂（白，透），骨針少　焼成：硬質　技法等：天井部外面回転ヘラ削り。（ロクロ右回転）　使用痕：器面の摩滅や口唇部の欠けはあまりみられない。　備考：―

第 4 号住居跡

遺構　第 1・2 号土坑と重複しており，新旧は，土層から第 4 号住居跡→第 2 号土坑となる。第 1 号土坑との新旧は不明である。当住居跡の主軸方向は，北壁に廻があるとすると，N -4° -W を測る。竪穴部の規模は不明だが，竪穴部形状は方形と思われる。壁高は西壁 37 ㎝，北壁 44 ㎝。壁周溝・ピットは認められない。竪穴部覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土・黒褐色土を基調としており，人為的埋土と思われる。

遺物出土状況　出土した遺物は，土師器の小破片が少量出土したのみであり，人為的埋戻しに伴う廃棄遺物の可能性がある。なお出土した土器から住居跡の年代を決めることはできなかった。



第 109 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 4 号住居跡

(3) 溝跡・土坑

第 1 号溝跡

調査区北西部で検出された溝である。確認面幅 0.8m，地表からの深さ 0.5m を測る。底面は調査部分両端での比高差はほとんどみられない。また溝覆土及び底面に硬化面は確認されていない。なお，出土遺物がなかったため，当溝の時期は不明である。

第 1 号土坑

第 3A・4 号住居跡と重複する。新旧は遺物から第 3A 号住居跡→第 1 号土坑となる。第 4 号住居跡との新旧は不明である。東西 1.7 m 以上，南北 1.2 m，深さ 10 ㎝を測る不整形の土坑である。土坑の一部がさらに 10 ㎝ほど楕円形に掘り込まれており，その部分の覆土上層から土器がまとまって出土している。杯 1・2 と椀 3 は，いずれも伏せた状態で出土した。

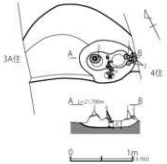
遺物説明

第 111 図

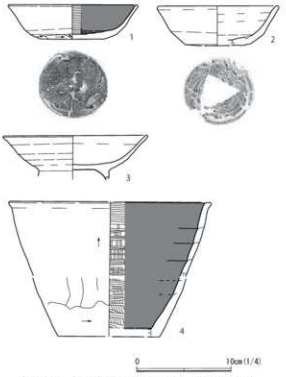
1　遺構：1 土坑　注記：P2　材質：土師器　器種：杯　残存：口縁部 40％欠失　法量：口径 13.5，器高 3.6，底径 6.8　色調：外面明褐色，内面黒色　胎土：礫（白透少），砂（透）　技法等：外面体部下端・底部 1 方向手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。　備考：2 土坑出土の口縁部片が接合

2　遺構：1 土坑　注記：P1　材質：土師器　器種：杯　残存：口縁部 50％欠失，底部中央欠失　法量：口径 12.5，器高 4.2，底径 6.8　色調：褐色，橙褐色，底部外面黒色　胎土：礫（白少，白透少，灰少，茶少），砂（白，透），骨針多　技法等：回転ヘラ切り。　備考：4 住出土の底部片が接合

3　遺構：1 土坑　注記：P3　材質：土師器　器種：椀　残存：高台下半欠失　法量：口径 15.0　色調：明褐色　胎土：礫（灰砂岩少，灰チャー



第 110 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号土坑



第 111 図　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号土坑出土遺物

ト少，白少），砂（透少）　技法等：－

4　遺構：1 土坑　注記：P4・5・6・7・8　材質：須恵器　器種：鉢

残存：口縁部 10%，胴部 30%，胴部下端 80%　法量：口径（21.0），器高（14.2），底径（10.7）　色調：外面胴部暗褐色・褐色・黒色，内面黒色・暗褐色　胎土：礫（白透少），砂（透，白褐）　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部縦方向ヘラ削り，胴部下端横方向ヘラ削り。内面粗いヘラミガキ（縦方向→横方向）・黒色処理。内面輪積痕顕著。

第 2 号土坑

第 4 号住居跡と重複する。新旧は土層から第 4 号住居跡→第 2 号土坑となる。遺物がないため時期は不明である。覆土は焼土混じりの土であった。

(4) 調査区出土遺物

各遺構の時期と異なる遺物や表土出土の遺物である。

遺物説明

第 112 図

1　出土位置・注記：3B 住　時代時期：縄文時代中 - 後期　器種：深鉢形土器　文様：条線文（櫛歯 6 本か）

2　出土位置・注記：4 住　時代時期：縄文時代中 - 後期　器種：深鉢形土器

3　出土位置・注記：3A 住 4 区　時代時期：弥生時代中期（足洗式）　文様：平行沈線文（半截竹管）

4　出土位置・注記：3A 住 1 区　時代時期：弥生時代中期　文様：反撚り縄文（RR）

5　出土位置・注記：SD1　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　法量：最大径 148 mm（残存率 32%）　文様：口唇部刻み（斜状），櫛描文（櫛歯 5 本），付加条縄文（L.S）

6　出土位置・注記：3A 住 1・3・4 区，3B 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：口唇部刻み（斜状），櫛描文（櫛歯 3 本）

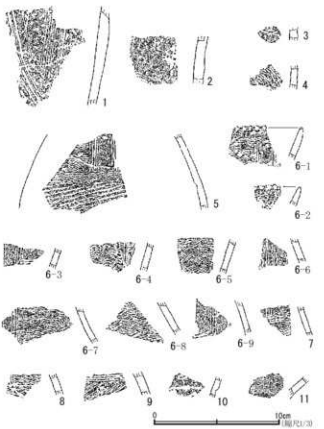
7　出土位置・注記：3A 住 2 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯 6 本）

8　出土位置・注記：3B 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯 3 本か），付加条縄文（L.Z）

9　出土位置・注記：3B 住 1 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本以上），付加条縄文（L.S，L.Z）

10　出土位置・注記：3B 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形土器　文様：付加条縄文（R.S）

11　出土位置・注記：3A 住 1 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：高坏形土器　文様：櫛描文（櫛歯 6 本），備考：あるいは細頸形壺形土器の口縁部か



第 112 図　岡田遺跡第 28 次調査区出土遺物

2　堀口遺跡第 25 次調査報告

(1) 調査の経過

期間 / 平成 28 年 4 月 12 日～ 5 月 20 日

担当 / 佐々木義則　　面積 /94 ㎡

時代 / 弥生・古墳・平安時代

遺構 / 竪穴住居跡 9 基 (弥生時代 2 基，古墳時代 4 基，平安時代 3 基)，ピット 14 基

調査地は，那珂川を望む台地縁辺部から 90 mほど離れた地点に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は宅地であった。今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり，建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は試掘調査（第 22 次調査，本報告書所収）がなされていたため，今回の調査区に係る遺構配置はおおよそ予想がついた。しかし本調査に入ってみると，住居跡数が当初の予想とは異なる結果となったため，本調査にあたり改めて遺構番号を付した。以下，簡単に調査の経過を記す。

4 月 12 日：重機による表土除去開始　4 月 13 日：遺構確認作業，掘り込み開始　4 月 16 日：図面・写真による記録作業を開始　5 月 13 日：調査区全体図作成　5 月 18 ～ 19 日：重機による埋戻し　5 月 20 日：ロープ・看板撤収

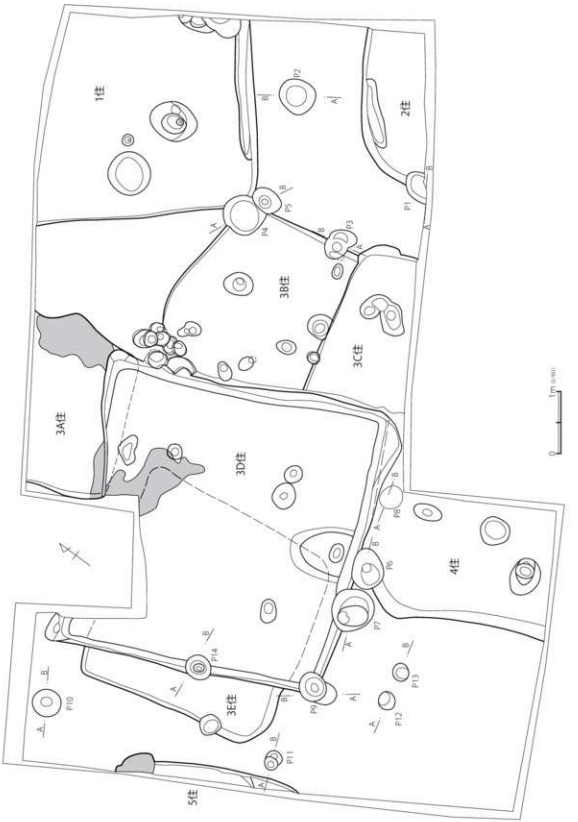
(2) 住居跡

第 1 号住居跡

遺構　当住居跡は南隅のみの調査であり，北西壁に竈があるならば，主軸方向はN -40°-W となる。竪穴部の規模は不明であるが，P2 を出入口施設関連のピットとみると，一辺 6m ほどの規模となろう。壁高は南西壁 24 ㎝，南東壁 30 ㎝。壁周溝は住居南東壁にみられた。ピットは P1 が主柱穴，P2 は出入口施設関連のピットと思われる。P3・4 は当住居跡のピットではない可能性がある。床面はピット 2 から北西壁にあったであろう竈にかけて，主柱穴に囲まれた部分を中心に硬化するものと考えられる。竪穴部覆土は褐色～暗褐色土を基調とし，ロームブロックを含まないため，自然埋土かもしれない。

遺物出土状況　P1 北側の覆土下層に遺物のまとまりがあり，いずれも破片であることからみて，覆土中に投棄された遺物群とみられる。また，住居中央部床面から，紡錘車 7 が出土しており，これは当住居跡で使用されたものの可能性がある。

第 113 図　堀口遺跡第 25 次調査区の位置



第114図　堀口遺跡第25次調査区

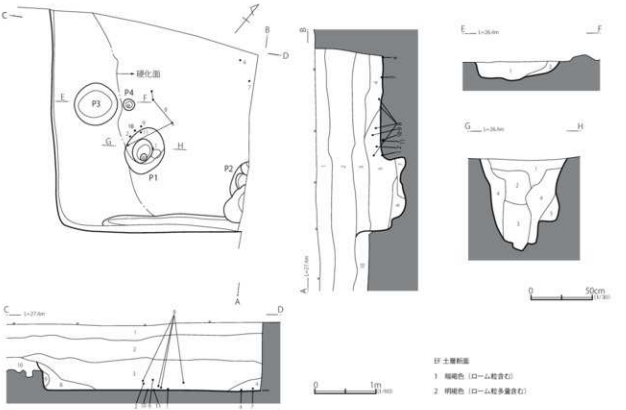
遺物説明

第116図

1　台帳：1住P5　材質：須恵器　器種：甕　残存：口縁部10%　法量：口径（15.4），器高（10.7）　色調：灰～灰白～緑色　胎土：礫（灰微）、砂（白少，透少）　焼成：硬質　技法等：ロクロ成型。内外面とも自然釉がかかる。外面格子目タタキ，内面に当て具痕が残る　使用痕：―　備考：P4・7・12が同一個体

2　台帳：1住P9　材質：須恵器　器種：甕　残存：口縁部10%　法量：口径（17.7），器高（5.0）　色調：灰白色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：硬質　技法等：ロクロ成形。　使用痕：―　備考：―

3　台帳：1住　材質：須恵器　器種：甕　残存：頸部10%　法量：―



EF 土層断面

1　暗褐色（ローム粒含む）

2　明褐色（ローム粒多量含む）

土層説明

AB・CD 土層断面

1　黒褐色（表土）

2　暗褐色（ローム粒含む）

3　暗褐色（ローム粒含む）

4　暗褐色（ローム粒中や多量含む）

5　褐色（ローム粒多量含む　焼土粒含む）

6　褐色（ローム粒多量含む）

7　明褐色（ローム粒非常に多量含む　ローム小ブロック含む）

8　黒褐色（ローム粒含む）

9　褐色（ローム粒多量含む）

10　暗褐色（ローム粒含む　黒褐色土混じる）

GH 土層断面

1　暗褐色（ローム粒・焼土粒含む）

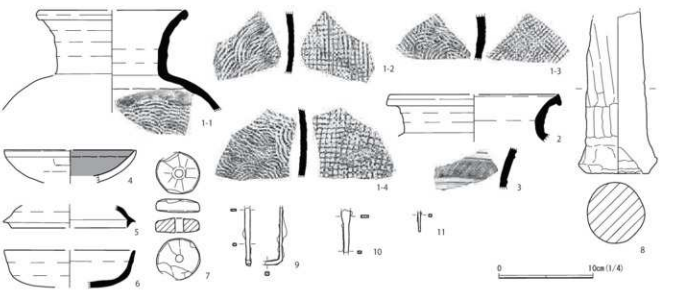
2　褐色（ローム粒多量含む　締まりなし）

3　褐色（ローム粒非常に多量含む　締まりなし）

4　明褐色（ロームブロック多量含む　暗褐色土混じる）

5　黄褐色（ローム粒主体）

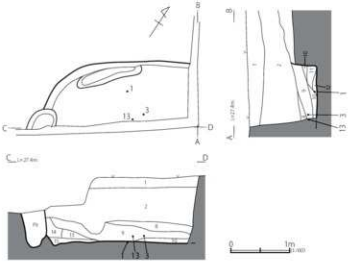
第 115 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 1 号住居跡



第 116 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 1 号住居跡出土遺物

色調：灰色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：硬質　技法等：波状文　使用痕：―　備考：―

4　台帳：1 住 P13　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（14.0），器高（3.5）　色調：外面にぶい黄橙色　胎土：砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内面黒色処理。　使用痕：

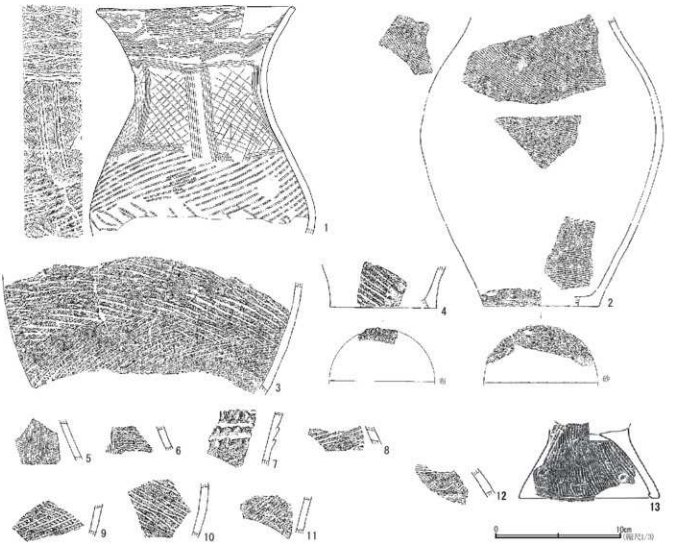


土層説明

A8・CD 土層断面

1　黒褐色（表土）
2　暗褐色
3　暗褐色（ローム粒含む）
4　暗褐色（ローム粒やや多量含む）
5　褐色（ローム粒やや多量含む　焼土粒含む）
6　褐色（ローム粒多量含む）
7　褐色（ローム粒非常に多量含む　ローム小ブロック含む）
8　暗褐色（ローム粒やや多量含む）
9　黒褐色
10　褐色（ローム粒やや多量含む）
11　暗褐色（ローム粒含む）
12　明褐色（ローム粒多量含む）
13　褐色（ローム粒やや多量含む）
14　明褐色（ローム粒多量含む）
15　明褐色（ローム粒非常に多量含む）

第 117 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 2 号住居跡

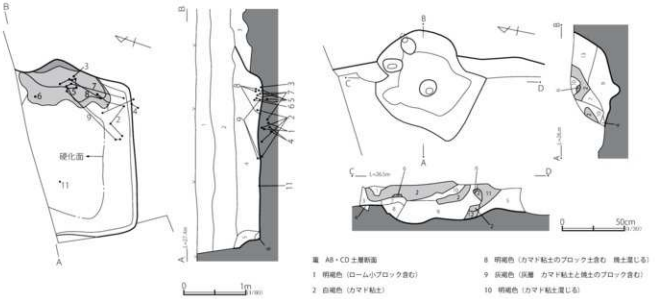


第 118 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 2 号住居跡出土遺物

口縁端部が摩滅している。　備考：—

5　台帳：1 住　材質：須恵器　器種：蓋　残存：10%　法量：口径（12.3），器高（2.5）　色調：灰色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：ロクロ成形　使用痕：—　備考：—

6　台帳：1 住　材質：須恵器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（14.0），器高（4.0）　色調：灰色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：硬質　技法等：



土層説明

AB 土層断面

1　黒褐色（表土）

2　暗褐色

3　暗褐色（ローム粒含む　黒褐色土混じる）

4　暗褐色（ローム粒やや多量含む）

5　黒褐色

6　褐色（ローム粒多量含む）

竈　AB・CD 土層断面

1　明褐色（ローム小ブロック含む）

2　白褐色（カマド粘土）

3　暗褐色（ローム粒含む）

4　明褐色（ローム粒多量含む）

5　暗褐色（ローム粒・白褐色粘土粒多量含む）

6　橙色（焼土）

7　褐色（カマド粘土と焼土混じる）

8　明褐色（カマド粘土のブロック土含む　焼土混じる）

9　灰褐色（灰層　カマド粘土と焼土のブロック含む）

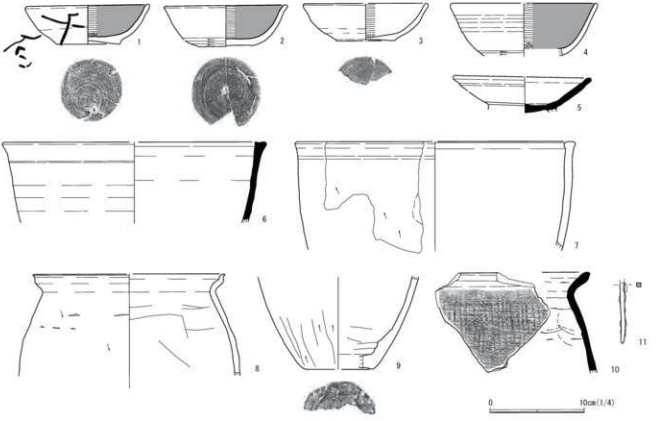
10　明褐色（カマド粘土混じる）

11　明褐色（カマド粘土ブロック多量含む）

12　白褐色（カマド粘土主体）

13　褐色（灰と焼土ブロックの混合層）

第 119 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3A 号住居跡



第 120 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3A 号住居跡出土遺物

ロクロ成形。外面底部ヘラ削り。　使用痕：―　備考：―

7　台帳：1 住 P14　材質：土師器　種類：紡錘車　残存：80%　法量：径 4.5 ～ 4.7，最大厚 1.4，孔径 0.8，重量 31.328g　色調：橙～にぶい黄橙色　備考：―

8　台帳：1 住 P6・8・11・15　材質：土師質　器種：支脚　残存：上部欠損　法量：長（17.1），上径 5.4，中径 6.3，下径 8.3　色調：橙～にぶい黄橙～灰白色　胎土：礫（白微），砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：ヘラ削り・ナデ　使用痕：二次焼成をうけている。　備考：

9　注記：鉄1　材質：鉄　器種：刀子？　残存：両端欠失　重量：5.7g
10　注記：鉄3　材質：鉄　器種：刀子？　残存：茎部　重量 4.3g
11　注記：鉄2　材質：鉄　器種：鏃？　残存：茎部先端　重量：0.6g

第２号住居跡

遺構　住居北西隅のみの調査であるが，竪穴部は東西3m以上の規模をもつ，隅丸方形になると考えられる。壁高は北壁 46 ㎝。壁周溝は断続的に認められた。竪穴部覆土は暗褐色～褐色土を基調としており自然埋土と思われる。

遺物出土状況　土器１は，床面上に横倒しの状況で出土している。

遺物説明

第 118 図

1　出土位置・注記：2 住 P1　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中型壺形土器　法量：口径 157 ㎜（残存率 75％），頸径 104 ㎜（残存率 100％），胴径 178 ㎜（残存率 64％）　文様：口唇部刻み（筵状），櫛描文（櫛歯３本で各歯が太い。胴上部スリット縦区画は４単位で，そのうち２区画はさらに１条の縦区画あり），格子状文（筵状），付加条縄文（L.S，L.Z）　備考：器外面及び器内面胴下部に炭化物付着。頸部隆帯の欠落と格子状文のみの区画充填から「十王台式５期」と判断する。

2　出土位置・注記：2 住（底部破片１点は３住）時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中型壺形土器　法量：胴径 192 ㎜（残存率 10％），底径 90 ㎜（残存率 41％）　文様：付加条縄文（R.S），底面砂痕　備考：胎土に骨針を極多量に含む，器外面に炭化物付着，器内面下部が変色。燃糸文状の付加条縄文が斜行に施文されることから「十王台式５期」と判断する。

3　出土位置・注記：2 住 P5　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中型壺形土器　法量：胴径 236 ㎜ほど（残存率 34％）　文様：付加条縄文（R × R，I.Z）　備考：器外面に炭化物付着。煮沸具としては法量が大きい。

4　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　法量：底径 84 ㎜（残存率 12％の部分から推定）　文様：付加条縄文（R L・2L），底面布目痕　備考：器内面に炭化物付着。他系統の縄文が施文されている。

5　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯４本）

6　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯５本）備考：胎土に金雲母を含む

7　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：大型壺形土器　文様：隆帯（指頭押圧），付加条縄文（R.S）　備考：胎土に金雲母を含む

8　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（R.S）

9　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（R × R，L × L）備考：胎土に金雲母を含む

10　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（L × L）

11　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期 - 古墳時代前期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（L.S，L.Z）備考：器内面に炭化物付着

12　出土位置・注記：2 住　時代時期：古墳時代前期　器種：壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯６本）

13　出土位置・注記：2 住 P2　時代時期：古墳時代前期　器種：台付甕形土器　法量：脚端径 110 ㎜（残存率 14％）備考：刷毛目調整

第 3A 号住居跡

遺構　第 3D 号住居跡と重複しており，新旧は遺物から第 3D 号住居跡→第 3A 号住居跡となる。当住居跡の主軸方向は，N -68°-E を測り，竈を東壁に置く。竪穴部の規模は東西 2.5m で，壁高は東壁 17 ㎝，西壁 10 ㎝，南壁 15 ㎝を測る。壁周溝・ピットはみられない。床面は壁際を除く住居中央が硬化する。竪穴部覆土は暗褐色土を基調としており自然埋土と思われる。竈は粘土材を良く残し，煙道あたりに焼土が認められたが，つぶれた状態のため構造は不明瞭である。竈掘形中央に小さなピットが認められており，これを支脚を据えた穴と考えれば，掛口は竪穴内に位置したものであろう。

遺物出土状況　土器１～９が竈の右手にまとまって出土している。

遺物説明

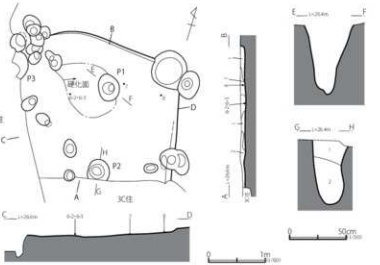
第 120 図

1　注記：P12・41　材質：土師器　器種：杯　残存：口縁部 35％欠失　法量：口縁 12.7，器高 4.1，底径 6.7　色調：外面橙色・黒色，内面黒色。
胎土：礫（白少），砂（白）　技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部不定方向）・黒色処理。口縁部内面摩滅。体部外面横位墨書「入□」（久保か？）。

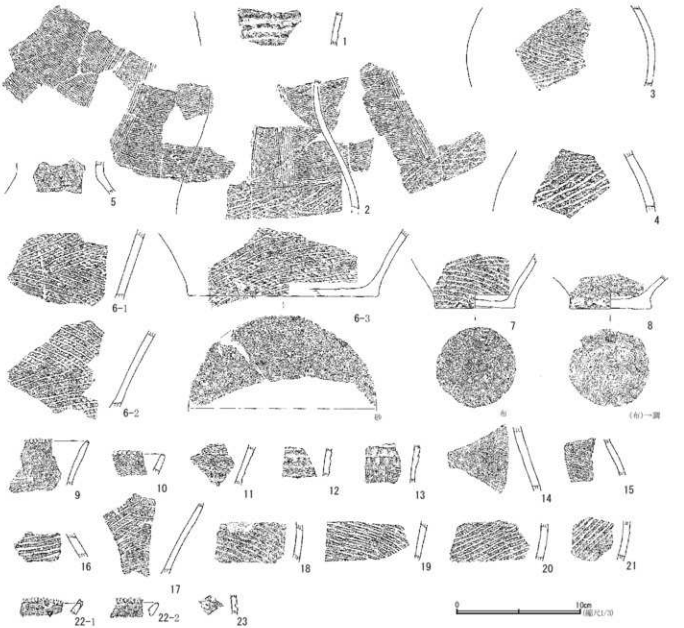
2　注記：P9・11・14・19，カマド　材質：土師器　器種：杯　残存：体部 40％欠失，底部若干欠失。　法量：口径 12.7，器高 4.3，底径 5.6
色調：外面体部上半褐色，体部下半・底部明褐色，内面黒色。　胎土：礫（白透，灰，白少），黒雲母少，赤色粒　技法等：外面体部下端・底部回転ヘラミガキ（底部１方向）・黒色処理。口縁部内面摩滅。

3　注記：P59　材質：土師器　器種：杯　残存：底部 30％。体部下半 30％，体部上半 10％　法量：口径（12.8），器高 4.0，底径（6.2）　色調：外面明褐色，内面橙色　胎土：礫（白），砂（白）　技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部１方向）。口縁部内面摩滅。内外面に焼土・粘土付着。火を受けたため内面黒色処理が消えたか？

4　注記：P46・47　材質：土師器　器種：椀　残存：体部 20％　法量：口径（15.2）　色調：外面橙色。内面黒色。　胎土：礫（灰少，白褐少），黒雲母微量　技法等：外面体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底



第 121 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3B 号住居跡



第 122 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3B 号住居跡出土遺物

部放射状?・黒色処理。体部外面および内面口縁部摩滅。

5　注記:P57・58・63・64，カマド　材質:須恵器　器種:有台皿　残存:体部70％欠失。高台部欠失　法量:口径（14.2）　色調:橙色。部分的に黒色。　胎土:砂（白，透，灰），骨針少　技法等:部分的に煤ける。火を受けていると思われる。　備考:木葉下窯産か

6　注記:P1　材質:須恵器　器種:甕　残存:口縁部10％　法量:口径（27.4）　色調:外面明灰色，内面灰色，明灰色　胎土:角閃石多，骨針少　技法等:内外面ヨコナデ，焼成やや軟質。　備考:木葉下窯産か

7　注記:P34・44・65・カマド　材質:土師器?　器種:甕　残存:口縁部10％　法量:口径（28.8）　色調:橙色，黒褐色　胎土:砂（白，透，灰）　技法等:外面縦方向ヘラ削りの後，横方向ナデ。外面に把手接合部若干残る。破砕後に火を受ける。

8　注記:P17・37・53　材質:土師器　器種:甕　残存:口縁部25％　法量:口径（20.0）　色調:明褐色，暗褐色　胎土:礫（灰少，白褐少）　技法等:外面縦方向ヘラ削りの後，ヨコナデ。内面横方向ヘラナデの後，口縁部ヨコナデ。外面焼土付着。

9　注記:P6・7・54　材質:土師器　器種:甕　残存:底部30％，胴部下端40％　法量:底径（7.1）　色調:褐色，橙褐色　胎土:砂（白，透，灰）　技法等:底部外面ナデ?。胴部外面縦方向ヘラ削り。胴部内面横方向ヘラナデ?。底部内面円周方向ヘラナデ。内面胴部下端横方向の強いナデ。内面粘土付着。外面焼土付着。

10　注記:HRG22次2トレ　材質:須恵器　器種:甕　残存:口縁部片　法量:―　色調:灰褐色　胎土:礫（白透），砂（白透，白少），白雲母多　技法等:外面口縁部ヨコナデ，胴部格子文叩き。内面ヨコナデ後，円形当て具痕。内面に粘土紐接合痕残る。粘土紐の幅は1.7㎝ほど。焼成硬質。　備考:新治窯産

11　注記:I1　材質:鉄　器種:鏃?　残存:茎部　重量:5.6ｇ

第3B号住居跡

遺構　第3C・3D号住居跡と重複しており，新旧は土層から第3B号住居跡→第3C号住居跡，遺物から第3B号住居跡→第3D号住居跡となる。住居北東隅の調査であり，竪穴部は東西3m，南北2.5 m以上の規模をもつ，隅丸方形になると考えられる。壁高は北壁7㎝，東壁8㎝。壁周溝は認められない。

遺物出土状況　底部6-3・7・8が床面から出土している。覆土が薄いことから，他の遺物も床面近くからの遺物とみてよいだろう。

遺物説明

第122図

1　出土位置・注記:3B住2区　時代時期:弥生時代後期(十王台式)器種:中・小型壺形土器　法量:頸径109㎜(残存率13％の部分から推定)文様:櫛描文（櫛歯4本），降帯3条（指頭押圧）備考:器外面に炭化物付着

2　出土位置・注記:3B住P 1，3B住2区，3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:小型壺形土器　法量:頸径96㎜（残存率61％），胴径146㎜（残存率21％）文様:櫛描文（櫛歯5本），付加条縄文（R S，L Z）備考:2条ずつ4条で縦区画

3　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　法量:胴径150㎜（残存率12％）文様:櫛描文（櫛歯5本），付加条縄文（R Z，L S）備考:器外面に炭化物付着

4　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:小型壺形土器　法量:最大径130㎜（残存率15％の部分から推定）文様:櫛描文（櫛歯4本），付加条縄文（R×R）

5　出土位置・注記:3A住2区　時代時期:弥生時代後期(十王台式)器種:小型壺形土器　法量:頸径70㎜（残存率16％）文様:付加条縄文（L S）備考:器外面に炭化物付着

6　出土位置・注記:3B住P 1，3B住2区　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:大型壺形土器　法量:底径96㎜（残存率48％）文様:付加条縄文（R×R，L×L），底面砂痕　備考:胎土に金雲母を多量含む

7　出土位置・注記:3B住P 2　時代時期:弥生時代後期(十王台式)器種:中・小型壺形土器　法量:底径63㎜（残存率100％）文様:付加条縄文（R×R，L×L），底面布目痕

8　出土位置・注記:3B住P 3　時代時期:弥生時代後期(十王台式)器種:中・小型壺形土器　法量:底径65㎜（残存率100％）文様:付加条縄文（R×R），底面布目痕と調整痕（布目痕はほんの一部が残る）

9　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期(十王台式)器種:中・小型壺形土器　文様:口唇部刻み（箆状），櫛描文（櫛歯4本）

10　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:口唇部刻み（箆状），櫛描文（櫛歯4本）

11　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:櫛描文（櫛歯5本），降帯（指頭押圧）

12　出土位置・注記:3B住2区　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:櫛描文，降帯（指頭押圧）

13　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:降帯（指頭押圧），櫛描文（櫛歯5本か）備考:器外面に炭化物付着

14　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中型壺形土器か　文様:櫛描文（櫛歯5本），付加条縄文（L Z）備考:胎土に金雲母を含む，器外面に炭化物付着

15　出土位置・注記:3B住2区　時代時期:弥生時代後期-古墳時代前期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:櫛描文（櫛歯5本）備考:胎土に金雲母を含む，横区画は連弧文

16　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:大型壺形土器　文様:付加条縄文（R S）

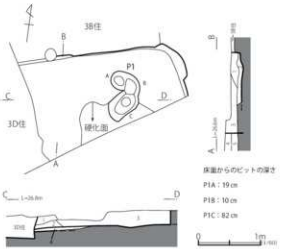
17　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:大型壺形土器　文様:付加条縄文（R S）

18　出土位置・注記:3B住2区　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:付加条縄文（R S，L Z）備考:器内面に炭化物付着

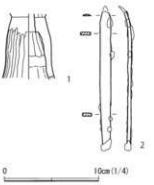
19　出土位置・注記:3B住2区　時代時期:弥生時代後期(十王台式)器種:中・小型壺形土器　文様:付加条縄文（R Z）備考:器内面に炭化物付着

20　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:付加条縄文（R×L）

21　出土位置・注記:3B住　時代時期:弥生時代後期（十王台式）器種:中・小型壺形土器　文様:付加条縄文（R S）備考:器外面に炭化物付着



第 123 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3C 号住居跡



第 124 図　堀口遺跡第 25 次調査区
第 3C 号住居跡出土遺物

22　出土位置・注記：3B 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：高坏形土器　文様：口唇部突起・刻み（篦状）　備考：口縁部に植上痕を残す

23　出土位置・注記：3B 住２区　時代時期：弥生時代後期か　器種：超小型土器　文様：刺突文（半截竹管状）

第 3C 号住居跡

遺構　第 3B・3D 号住居跡と重複しており，新旧は土層から 3B → 3C → 3D となる。住居北東隅の調査であり，竪穴部は東西 2.6m，南北 1.7 m以上の規模をもつ，隅丸方形になると考えられる。壁高は東壁 17 ㎝であり，壁周溝は認められない。ピットは深さからみて P1C が主柱穴と思われる。床面は P1 より南側が硬化していた。

遺物説明

第 124 図

1　台帳：3C 住　材質：上師器　器種：高杯　残存：脚柱部 30%　法量：器高（6.8）　色調：浅橙色　胎土：礫（白微，灰微），砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面ヘラミガキ。内面ユビナデ。　使用痕：―　備考：―

2　注記：鉄 A　材質：鉄　器種：不明　残存：先端欠失　重量 24.7g

第 3D 号住居跡

遺構　第 3A・B・C・E 号住居跡，第 4 号住居跡と重複しており，新旧は，土層から第 3C 号住居跡→第 3D 号住居跡→第 3E 号住居跡，遺物から第 3B・4 号住居跡→第 3D 号住居跡→第 3A 号住居跡となる。当住居跡の主軸方向は，N -24°-W を測り，竈を北壁中央に置く。竪穴部の規模は東西 4.6m，南北 4.6m，面積 21.2 ㎡で，正方形を呈する。壁高は東壁 27 ㎝，西壁 24 ㎝，南壁 37 ㎝，北壁 27 ㎝。壁周溝は全周し，深さ 1 ～ 3 ㎝と浅く，褐色土が堆積していた。ピットは P1 ～ 3 が主柱穴，P4 が出入口施設関連のピットであろう。床面は P4 から竈前にかけて，主柱穴に囲まれた部分を中心に硬化し，P4 の周囲の床は 2 ～ 3 ㎝ほど高くなっている。竪穴部覆土は，AB 土層断面でみると，住居壁際に暗褐色土（第 3・4 層）が自然堆積した後，ローム粒やロームブロックが混じる褐色土により埋め戻されている可能性がある。竈は粘土材が南東方向の床面に崩れた状態で検出された。竈は北壁中央のやや西寄りの位置に構築されているが，その部分は未調査となっている。なお竈右手の北壁に白色粘土を張りつけていたようである。

遺物出土状況　竈に向かって右脇より遺存状況が良好な杯類（8 ～ 13）が床面上からまとまって出土している。また，口縁部が若干欠失する椀 7 は住居跡南東部床面からの出土である。石製模造品 17 は，住居跡北西部の壁際床面から出土した。このほか砥石が P3 内から出土している。

遺物説明

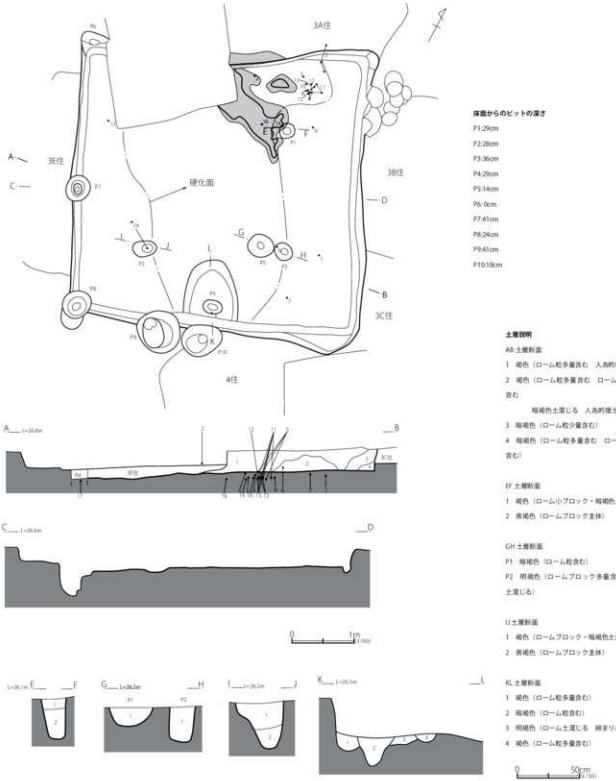
第 126 図

1　台帳：3D 住 P7，1 区　材質：上師器　器種：甕　残存：口縁部 20%，胴部上位 50%，中位～底部 90%　法量：口径 17.5，器高 17.4，底径 6.5　色調：外面黒褐色，内面にぶい黄橙色　胎土：礫（白微），砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：外面器面が二次焼成を受けている。　備考：―

2　台帳：3D 住 P23，1 区　材質：上師器　器種：甕　残存：口縁～胴部上位 10%　法量：口径（16.0），器高（9.5）　色調：橙～暗褐～黒褐色　胎土：礫（白少），砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：外面が二次焼成を受けている。　備考：―

3　台帳：3D 住 P21　材質：上師器　器種：甕　残存：口縁～胴部上位 10%　法量：口径（21.4），器高（12.0）　色調：にぶい黄橙色　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：―　備考：外面器面が摩滅している。

4　台帳：3D 住 P3　材質：上師器　器種：甕　残存：口縁部 10%　法量：口径（14.2），器高（3.9）　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透多，黒少）



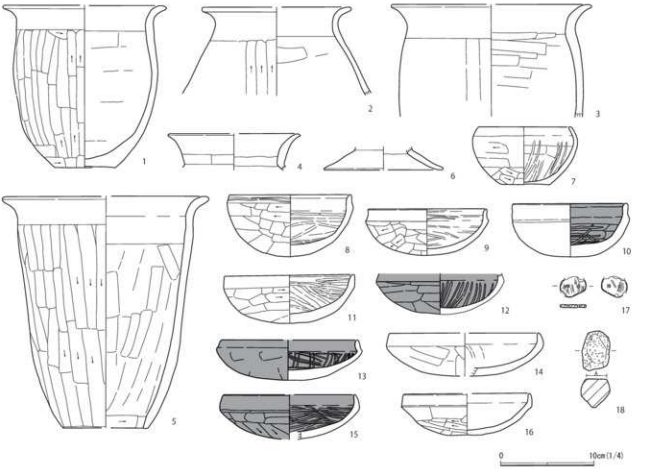
第 125 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3D 号住居跡

焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。
使用痕：―　　備考：―

5　台帳：3D 住 P19・20，3D 住，3D 住カマド，3A 住 P69　材質：土師器　器種：甕　残存：40%　法量：口径（22.1），既往 24.7，底径（8.0）
色調：橙～暗褐～黒褐色　胎土：小石（白微），礫（白少），砂（白多，透多，黒少，赤少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ，下位ヘラ削り。　使用痕：外面器面が摩滅している　備考：―

6　台帳：3D 住 P5　材質：土師器　器種：高杯　残存：法量：器高（2.5），底径（12.8）　色調：淡橙色　胎土：礫（白少），砂（白少，透多，黒少，赤少）　焼成：良好　技法等：外面ヨコナデ？。内面ヘラナデ？　使用痕：―　備考：内外面とも器面が摩滅している。

7　台帳：3D 住 P4　材質：土師器　器種：椀　残存：上位 80%，下位 100%　法量：口径 9.6，器高 6.1，底径 5.2　色調：外面赤～橙～黒色。



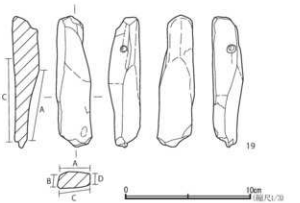
内面橙～黒色　胎土:礫（白微），砂（白少，透少）　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ，体部上位ヘラ削り後ヘラナデ，下位～底面ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕：—　備考：—

8　台帳：3D 住 P9　材質：土師器　器種：椀　残存：上位 80%，下位 100%　法量：口径 12.8，器高 6.6　色調：橙～にぶい黄橙～黒色。内面橙色。　胎土：砂（白少，透多，赤少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後，ヘラミガキ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：—

9　台帳：3D 住 P8　材質：土師器　器種：杯　残存：90%　法量：口径 12.5，器高 5.0　色調：外面赤橙～橙色。内面橙色。　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕:口縁端部が摩滅している。　備考：—

10　台帳:3D 住 P11　材質:上師器　器種:椀　残存:ほぼ完形　法量:口径 12.0，器高 5.7　色調:外面橙色，内面黒色。　胎土:小石（白微，礫（白微），砂（白多，透多，赤少）　焼成:良好　技法等:外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り？。内面ヘラナデ後若干のヘラミガキ。内面黒色処理。　使用痕:外面体部器面が摩滅している。　備考:—

11　台帳：3D 住 P10・14・16・17・30，1 区　材質：土師器　器種：杯　残存：90%　法量：口径 14.0，器高 5.0 ～ 5.3　色調：橙色　胎土：礫（白少，黒微），砂（白多，透多，黒多，赤少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：—



第 126 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3D 号住居跡出土遺物

12　台帳：3D 住 P13・29　材質：土師器　器種：杯　残存：80%，口縁端部欠失　法量：器高（4.4）　色調：にぶい黄橙～にぶい黄橙～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕:外面器面が摩滅している。　備考:—

13　台帳：3D 住 P12　材質：土師器　器種：杯　残存：90%　法量：口径 14.5，器高 4.4　色調:外面にぶい黄橙色。内面黒褐色　胎土:砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕:外面体部器面と口縁端部が摩滅している。　備考:—

14　台帳：3D 住 P35　材質：土師器　器種：杯　残存：10％　法量：口径（16.0），器高 4.6　色調：外面にぶい黄褐色，内面橙色　胎土：砂（白少，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕：―
備考：―

15　台帳：3D 住 P27・28・30，カマド　材質：土師器　器種：杯　残存：40％　法量：口径（14.0），器高（4.9）　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：―　備考：―

16　台帳：3D 住 P32　材質：土師器　器種：杯　残存：30％　法量：口径（13.3），器高（4.5）　色調：橙～にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白量，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ，ヘラ削り。内面ヨコナデ。　使用痕：―　備考：外面体部器面が凸凹している。

17　台帳：3D 住 S12　材質：滑石　種類：双孔円板　法量：長 2.2，幅 2.8，厚 0.3，孔径 0.2，重量 3.01g　色調：明緑灰色　備考：―

18　台帳：3D 住 2 区　材質：輕石　種類：砥石　法量：長 4.2，幅 2.9，厚 3.1，重量 15.61g　色調：灰色　備考：砥面 A の 1 面。

19　台帳：3D 住 pit3 砥石　材質：珪質片岩　器種：提砥　残存：先端部欠損　法量：長 10.5　幅 2.8　最大厚 2.0　孔径 0.5　重量 72.85g　色調：白褐色　備考：砥面 A ～ D の 4 面。孔周辺は使用により摩滅している。

第 3E 号住居跡

遺構　第 3D 号住居跡と重複しており，新旧は，土層から第 3D 号住居跡→第 3E 号住居跡となる。当住居跡の主軸方向は，N -10°-W を測り，竈を北壁中央に置く。竪穴部は東西 3.3m，南北 3.2m，面積 10.6 ㎡で，ほぼ正方形を呈する。壁高は東壁 21 ㎝，西壁 29 ㎝，南壁 21 ㎝，北壁 24 ㎝。壁周溝はみられない。ピットは P1 が出入口施設関連のピットであろう。P3 は覆土中に灰を含んでおり，住居覆土と異なることからみて，後世のピットになる可能性がある。床面は P1 から竈前にかけて硬化するが，やや西側に偏る。竪穴部覆土は暗褐色土を基調とし，自然堆積と思われる。竈は粘土材の一部がみられるが，ほとんどが調査区外となっている。なお竈両側の壁には，第 3D 号住居跡との重複部分に白色粘土を張りつけて壁の崩落を防いでいたようである。

遺物出土状況　竈向かって左脇床面より，完形の皿 8 と完形の刀子 14 が出土している。また，東壁際の床面上からほぼ完形の紡錘車 12・13 が出土した。

遺物説明

第 128 図

1　注記：P1　材質：須恵器　器種：杯　残存：口縁部 15％欠失　法量：口径 13.5，器高 4.8，底径 7.6　色調：灰色　胎土：砂（白，白透少），骨針少　技法等：回転ヘラ切り。底部外面ヘラ記号。焼成硬質。使用による摩滅はみられない。　備考：木葉下窯産か

2　注記：―　材質：須恵器　器種：杯　残存：口縁部 15％欠失　法量：口径 13.2，器高 5.1，底径 6.8　色調：灰色　胎土：礫（白，灰少，透微），骨針微　技法等：底部外面幅の狭い一方向ヘラナデ後，ヘラ記号。焼成硬質。　備考：木葉下窯産か

3　注記：1 区，3D 住 2 区　材質：土師器　器種：坏　残存：底部 80％，体部 30％　法量：口径（12.3），器高 3.9，底径 6.9　色調：外面明褐色，口縁部黒色。内面黒色　胎土：礫（透少），砂（透，白少），骨針多　技法等：体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部不定方向）・黒色処理。底部外面墨書（文字不明）。口縁部内面摩滅（底部内面中央部やや摩滅。

4　注記：P13　材質：土師器　器種：杯　残存：底部。体部下半 25％。体部上半 10％。　法量：口径（13.3），器高 4.8，底径（6.6）　色調：外面褐色，口縁部橙色。内面褐色・黒色・橙色。　胎土：砂（透多，白）
技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。内面黒色処理が消えているが火を受けたためか。内面器表面が荒れており，剥離もみられる。

5　注記：3D 住 2 区　材質：土師器　器種：坏　残存：底部 45％　色調：外面明褐色，内面黒色　胎土：骨針多　技法等：体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。底部外面墨書（消えかかっている。文字不明）。内面やや摩滅。

6　注記：P5，4 区　材質：土師器　器種：杯　残存：底部 40％，体部下半 20％，体部畳半 10％　法量：口径（14.2），器高 5.1，底径（6.7）
色調：外面橙褐色，内面橙色　胎土：砂（透，白）　技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）。　備考：体部外面の器表面が荒れ，剥落する。火を受けているか。

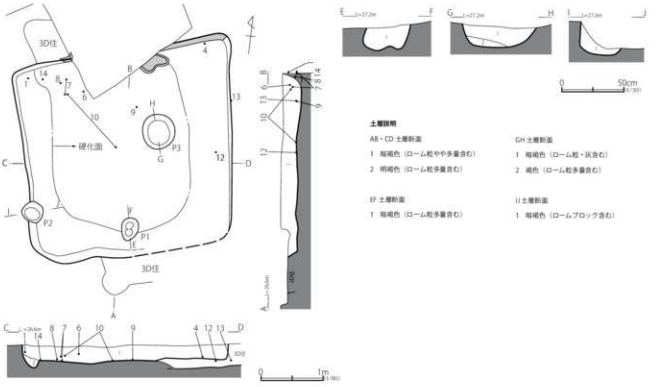
7　注記：P3・4，4 区　材質：土師器　器種：皿　残存：口縁部 20％欠失。体部若干欠失。底部若干欠失。　法量：口径 12.4，器高 2.3，底径 5.9　色調：外面橙褐色。内面黒色。　胎土：花崗岩砂片若干，礫（白透），白雲母多　技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。

8　注記：P2　材質：土師器　器種：皿　残存：完形　法量：口径 13.3，器高 2.3，底径 5.9　色調：外面茶褐色，口縁部黒色。内面黒色。
胎土：砂（白透多，白），白雲母多　技法等：外面体部下端・底部　回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。口縁部内面摩滅。
備考：新治窯付近産か

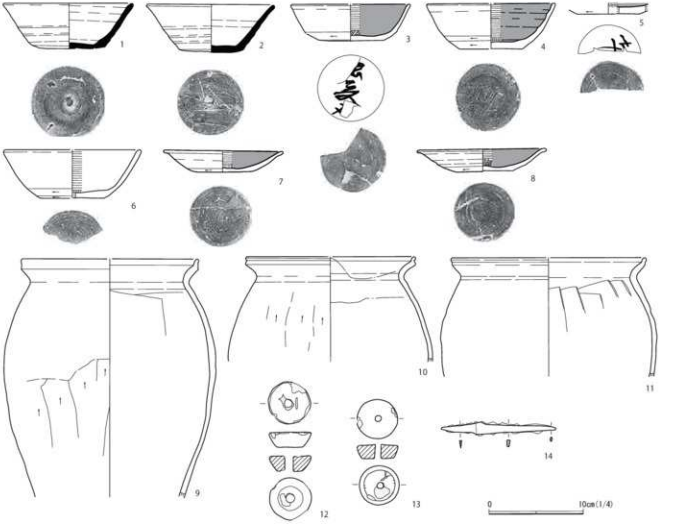
9　注記：P11，1 区，3A 住　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 30％，胴部 30％　法量：口径（18.4）　色調：外面暗褐色・褐色。内面暗褐色・黒褐色・褐色　胎土：礫（白，白透），砂（白，透）　技法等：胴部外面縦方向ヘラ削りの後，上部ナデ。胴部内面横方向ヘラナデの後，肩部以下ナデ。口縁部ヨコナデ。

10　注記：P7・16，4 区　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 40％　法量：口径（17.6）　色調：外面橙褐色。内面口縁部橙褐色，頸部付近暗褐色，胴部褐色。　技法等：胴部外面縦方向ヘラ削りの後，ナデ。胴部内面斜方向ナデ。口縁部ヨコナデ。

11　注記：―　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 60％　法量：口径（20.3）　色調：外面橙褐色，暗褐色。内面橙褐色，黒褐色　胎土：砂（透，白，灰）　技法等：外面ナデの後，口縁部ヨコナデ。破砕の後，火を受けたか。



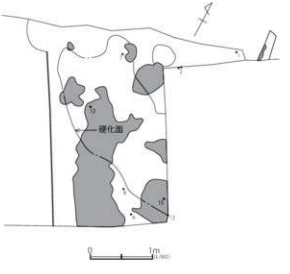
第 127 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3E 号住居跡



第 128 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 3E 号住居跡出土遺物

12　注記：P15　材質：土師器　器種：紡錘車　残存：若干欠失　法量：径 4.5，厚さ 1.6，重さ 30.1g　色調：表面黒褐色，破面明褐色　胎土：―　使用痕等：上面周縁全周が摩滅し，部分的に小さな欠けがみられる。表面平滑。

13　注記：3D住P1　材質：土師器　器種：紡錘車　残存：若干欠失　法量：径 4.2，厚さ 1.4，重さ 31.5g　色調：表面黒褐色・明灰褐色，破面明褐色　胎土：―　使用痕等：下面周縁に短く浅い切込みが数ヵ所みられる。表面平滑。



第 129 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 4 号住居跡床面

14　注記：I1　材質：鉄　器種：刀子　残存：完形　重量：13.8g

第 4 号住居跡

遺構　第 3D 号住居跡と重複しており，新旧は，第 4 号住居跡が第 3D 号住居跡に壊されていることから，第 4 号住居跡→第 3D 号住居跡となる。床面のみの確認であり，住居掘形のあり方からおおよその住居の範囲を捉えた。炉跡は確認できなかった。床面は硬化面がみられ，床上に焼土の堆積が認められた。

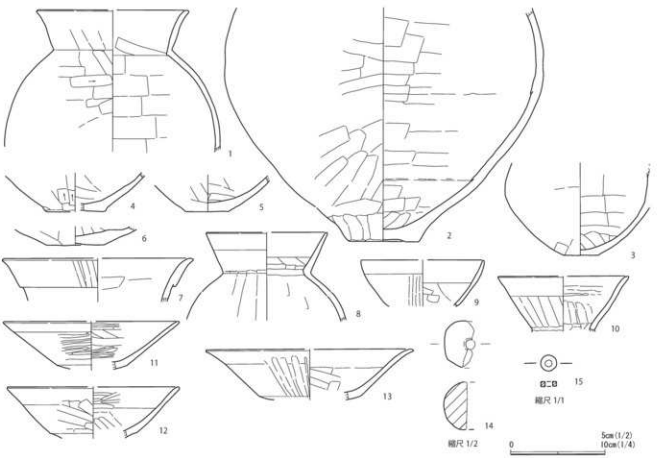
遺物出土状況　当住居跡は床面のみの確認であったため，出土遺物は床面付近からの出土遺物である。臼玉 15 を除き，すべて破片の状態での出土である。

遺物説明

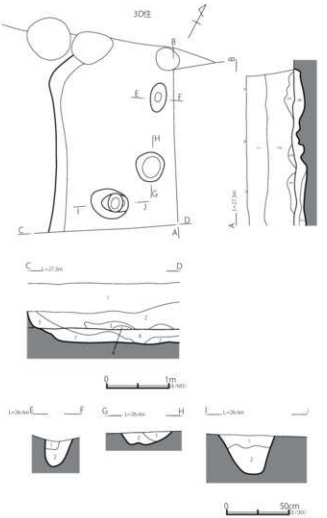
第 130 図

1　台帳：4 住 P12，3D 住 2 区　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁～胴部上位 10%　法量：口径（8.2），器高（15.0）　色調：黒褐色　胎土：礫（白少），砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

2　台帳：4 住 P10・11　材質：土師器　器種：甕　残存：胴部下位 40%，底部 100%　法量：器高（24.8），底径 7.4　色調：橙～にぶい



第 130 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 4 号住居跡出土遺物



土層説明

AB・CD 土層断面

1　褐褐色（耕作土）

2　褐褐色（ローム粒・土器片含む）

3　褐色（明褐褐色粘土ブロック（焼土化）多量含む）

4　褐褐色（明褐褐色粘土粒含む）

5　黒褐色

6　黒褐色（ローム粒含む　ロームブロック小量含む）

7　明褐色（ロームブロック多量含む）

EF 土層断面

1　明褐色（ローム粒多量含む　ローム小ブロック小量含む　麻ぎりあり）

2　明褐色（ローム粒含む）

GH 土層断面

1　褐褐色（ローム粒含む）

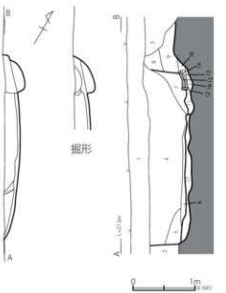
2　明褐色（ローム粒非常に多量含む）

IJ 土層断面

1　黒褐色（ローム粒含む）

2　明褐色（ローム粒多量混じる）

第 131 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 4 号住居跡掘形



土層説明

AB 土層断面

1　褐褐色（耕作土）

2　褐褐色

3　褐褐色（粘土粒・焼土粒少量含む）

4　褐褐色（土器細片・ローム粒含む）

5　褐褐色（ローム小ブロック含む　褐色土混じる）

6　黒褐色（ローム粒含む）

7　褐褐色（カマド粘土粒やや多量含む　焼土粒少量含む）

8　褐色（カマド粘土粒・焼土粒小量含む）

9　褐色（カマド粘土ブロック多量含む　焼土粒含む）

10　褐褐色（焼土粒・灰含む）

11　褐色（ローム粒やや多量含む　カマド粘土混じる）

12　白褐色（カマド粘土）

13　橙色（焼土）

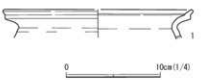
14　白灰色（灰層）

15　褐色（灰・焼土多量混じる）

16　明褐色（ローム粒多量含む　カマド据形埋土）

17　明褐色（ローム小ブロック多量含む　住居据形埋土）

第 132 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 5 号住居跡



第 133 図　堀口遺跡第 25 次調査区第 5 号住居跡出土遺物

黄橙～黒褐色　胎土：小石（白微）、礫（白微）、砂（白多，透多）　技法等：外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。　使用痕：底面がやや摩滅している。　備考：—

3　台帳：3 住・4 住　材質：土師器　器種：甕　残存：胴部 20%，底径 60%　法量：器高（9.8），底径（3.9）　色調：外面黒褐色。内面橙色　胎土：礫（白少），砂（白少，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕：外面に煤物付着。

備考：—

4　台帳：4 住　材質：土師器　器種：甕　残存：底部 20%　法量：器高（4.1），器高（6.2）　色調：黒色　胎土：小石（白少），砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕：—

備考：—

5　台帳：4 住　材質：土師器　器種：甕　残存：底部 100%　法量：器高（3.8），底径 4.6　色調：外面にぶい黄橙色。内面黒褐色　胎土：小石（白微），砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。

使用痕：—　備考：—

6　台帳：4 住 P2　材質：土師器　器種：甕　残存：底部 20%　法量：底部 20%　法量：器高（1.9），底径（6.4）　色調：橙～明褐色　胎土：

礫（白微），砂（白少，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

7　台帳：4住P7　材質：土師器　器種：複合口縁壺　残存：口縁部10%　法量：口径（20.4），器高（4.6）　色調：外面にぶい黄橙色，内面にぶい黄橙色　胎土：礫（灰微），砂（白少、透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部上位ヨコナデ後ヘラミガキ，下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

8　台帳：4住P4　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁～胴部上位40%　法量：口径（13.0），器高（9.3）　色調：橙～にぶい黄橙～黒褐色　胎土：小石（灰微），礫（白微），砂（白少透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部上位ヨコナデ，下位～胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部上位ヨコナデ，下位～胴部ヘラナデ　使用痕：―　備考：―

9　台帳：4住　材質：土師器　器種：坩　残存：口縁部10%　法量：口径（13.0），器高（4.9）　色調：外面にぶい黄褐色。内面橙色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部上位ヨコナデ，下位ヘラミガキ？。内面口縁部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

10　台帳：4住　材質：土師器　器種：坩　残存：口縁部10%　法量：口径（13.8），器高（5.8）　色調：黒褐色　胎土：礫（白微），砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面上位ヨコナデ，下位ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。　使用痕：―　備考：―

11　台帳：4住　材質：土師器　器種：高杯　残存：杯部%　法量：口径（18.8），器高（5.1）　色調：外面にぶい黄橙～黒褐色。内面橙色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラミガキ。内面ヘラナデ，ヘラミガキ。　使用痕：―　備考：―

12　台帳：4住P20　材質：土師器　器種：高杯　残存：杯部10%　法量：口径（18.2），器高（5.5）　色調：にぶい黄褐色　胎土：小石（灰微），砂（白少，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕：―　備考：―

13　台帳：4住P1　材質：土師器　器種：高杯　残存：杯部10%　法量：口径（22.0），器高（5.3）　色調：橙～黄橙～にぶい黄褐色　胎土：礫（白微），砂（白少，透多）　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。　使用痕：―　備考：―

14　台帳：4住　材質：土師器　種類：土錘　法量：長2.5，最大径2.5，孔径0.5，重量6.95g　備考：―

15　台帳：4住S1　材質：滑石　種類：白玉　法量：径0.4，厚0.1，孔径0.2，重量0.01g　色調：暗青灰色　備考：―

第5号住居跡

遺構　住居東壁部のみの調査であり，大部分は調査区外に位置する。当住居跡の主軸方向は，N -10°-W を測り，竈を住居跡北東隅部に置く。竪穴部は南北3mほどを測る。壁高は確認面から20㎝ほどであるが，AB土層断面でみると，表土中に掘り込みが認められ，その深さは50㎝ほどを測る。壁周溝・ピットはみられない。竪穴部覆土は暗褐色土を基調とし，自然堆積と思われる。竈はほとんどが調査区外となっている。

遺物説明

第133図

1　台帳：P1　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部小片　法量：口径（19.7）　色調：橙色，暗褐色　胎土：礫（白少），砂（白，透），骨針少　技法等：口縁部ヨコナデ

(3) ピット

調査区全体から確認されているが，とくに規則的な配置は見いだせなかった。比較的大きなピット7から8世紀前半頃の須恵器杯底部片が出土している。なおピット8には小礫が詰まっていたが時期不明である。

遺物説明

第135図

1　出土位置：ピット7　注記：―　材質：須恵器　器種：杯　残存：底部30%　法量：底径（10.4）　色調：灰色　胎土：礫（白），骨針少　技法等：底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。　備考：木葉下窯産か

(4) 調査区からの出土遺物

遺構との関係が不明な遺物が調査区から出土しているので以下報告する。

遺物説明

第136図

1　出土位置・注記：1住　時代時期：縄文時代中期（加曽利E式）器種：深鉢形土器　文様：沈線文，単節斜縄文（RL）備考：胎土に金雲母を含む

2　出土位置・注記：4住　時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：広口壺形土器　文様：隆帯，平行沈線文（半截竹管）

3　出土位置・注記：1住　時代時期：弥生時代中期　器種：甕形土器　文様：口唇部縄文

4　出土位置・注記：4住　時代時期：弥生時代中期　器種：甕形土器　文様：付加条縄文（LR+R）

5　出土位置・注記：3B住　時代時期：弥生時代中期　文様：単節斜縄文（LR）

6　出土位置・注記：3B住　時代時期：弥生時代中期　文様：無節斜縄文（R）

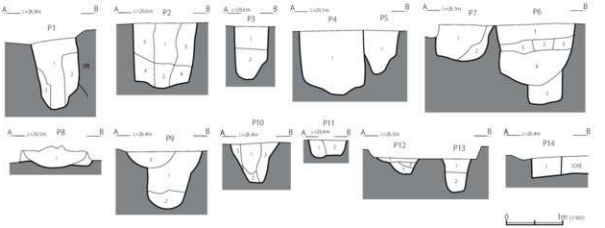
7　出土位置・注記：1住　時代時期：弥生時代中期　文様：付加条縄文（LR+R）

8　出土位置・注記：3A住　時代時期：弥生時代中期　文様：底面布目痕

9　出土位置・注記：3D住1区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯5本以上），隆帯（指頭押圧）

10　出土位置・注記：3D住2区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中型壺形土器　法量：最大径156㎜（残存率13%の部分から推定）文様：櫛描文（櫛歯4本），付加条縄文（R-S）

11　出土位置・注記：1住　時代時期：弥生時代後期–古墳時代前期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　法量：最大径150㎜（残存率13%



土層説明

Pit1

1　褐色（ローム粒やや多量含む）

2　明褐色（ローム小ブロック多量含む）

Pit2

1　褐色（ローム粒含む）

2　明褐色（ローム粒非常に多量含む）

3　褐色（ローム小ブロック多量含む　褐褐色土混じる　やや締まりあり）

4　黄褐色（ローム土主体　締まりあり）

Pit3

1　褐褐色

2　明褐色　（ローム小ブロックやや多量含む）

Pit4

1　明褐色（ローム粒・ローム小ブロック非常に多量含む　褐褐色土混じる）

Pit5

1　褐褐色（ロームブロック・ローム粒含む）

Pit6

1　褐褐色（ローム粒多量含む）

2　褐色（ロームブロック多量含む）

3　褐色（ローム粒多量含む）

4　黒褐色（ローム粒多量含む　ロームブロック含む）

5　黒褐色（ローム小ブロック含む）

Pit7

1　黒褐色（ローム粒やや多量含む　焼土粒・炭化粒含む）

2　褐褐色（ローム粒含む）

Pit8

1　直径3～5cmほどの礫が詰まっている。

Pit9

1　褐褐色（ローム粒含む）

2　褐褐色（ロームブロック含む）

3　褐褐色（ローム粒含む）

Pit10

1　褐褐色（ローム粒含む）

2　褐褐色（ローム粒含む　締まりあり）

3　褐色（ローム土混じる）

Pit11

1　黒褐色（ローム粒含む）

2　黒褐色（ローム小ブロック含む）

Pit12

1　黒褐色

2　明褐色（ローム土多量混じる）

3　黒褐色（ローム粒少量含む）

Pit13

1　褐色

2　明褐色

Pit14

1　褐褐色（ローム小ブロック含む　ローム粒多量含む）

第 134 図　堀口遺跡第 25 次調査区ピット土層

第 135 図　堀口遺跡第 25 次調査区ピット出土遺物

の部分から推定）文様：櫛描文（櫛歯６本），付加条縄文（L×L，R·S）備考：器外面に炭化物付着

12　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯３本）

13　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期－古墳時代前期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：櫛描文（櫛歯６本），格子状文（箆状，破片右端に一部が残る）備考：胎土に金雲母を含む

14　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期－古墳時代前期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：櫛描文，格子状文（箆状）備考：器外面に炭化物付着

15　出土位置・注記：4 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：口唇部縄文，付加条縄文（R×R）

16　出土位置・注記：4 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（L.Z），隆帯（指頭押圧）

17　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：隆帯（指頭押圧），付加条縄文（L.Z）

18　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（L×L，R·S）備考：胎土に金雲母を多量含む

19　出土位置・注記：3C 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（L.Z，R·S）備考：胎土に金雲母を多量含む

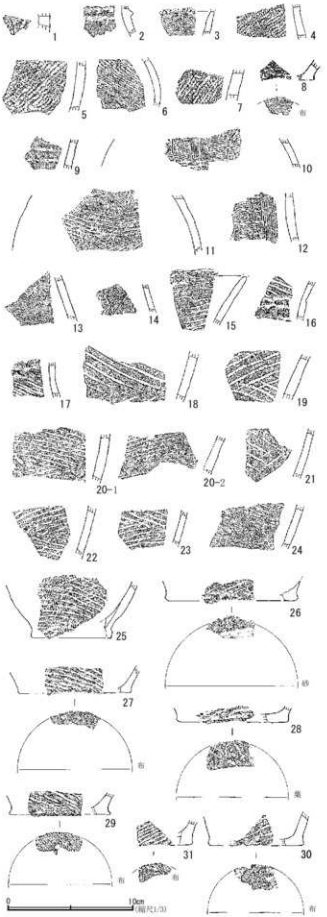
20　出土位置・注記：3D 住 1 区，4 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（L×L，R×R）備考：胎土に金雲母を少量含む，器内面剥落

21　出土位置・注記：3D 住 1 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：壺形土器　文様：付加条縄文（R·S，L.Z）備考：胎土に金雲母を多量含む，器内面変色

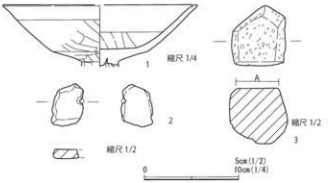
22　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（R·S，L.Z）備考：器内面に炭化物付着

23　出土位置・注記：3D 住 1 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（L.Z，R·S）

24　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期－古墳時代前期（十



第 136 図　堀口遺跡第 25 次調査区出土遺物（縄文・弥生時代）



第 137 図　堀口遺跡第 25 次調査区出土遺物（古墳時代）

王台式）器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（L·Z）備考：胎土に骨針を極多量含む

25　出土位置・注記：3E 住 1 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：小型壺形土器　法量：底径 62 mm（残存率 18％の部分から推定）文様：付加条縄文（R·S、L × L）備考：器内面変色

26　出土位置・注記：3D 住 2 区　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：大型壺形土器　法量：底径 104 mm（残存率 12％）文様：付加条縄文（R × R）、底面砂痕　備考：胎土に金雲母を含む

27　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　法量：底径 90 mm（残存率 15％）文様：付加条縄文（L × L）、底面布目痕

28　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　法量：底径 88 mm（残存率 13％）　文様：付加条縄文（R·S）、底面木葉痕

29　出土位置・注記：3C 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　法量：底径 80 mm（残存率 16％）文様：付加条縄文（L·Z）、底面布目痕

30　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　法量：底径 76 mm（残存率 14％）文様：付加条縄文（R × R）、底面布目痕

31　出土位置・注記：1 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）器種：中・小型壺形土器　　文様：付加条縄文（R·S）、底面文様痕

第 137 図

1　台帳：3B 住、3 住　材質：土師器　器種：高杯　残存：杯部 20％　法量：口径（20.6）、器高（6.6）　色調：にぶい黄橙色　胎土：小石（灰微）、礫（白少）、砂（白多、透多、黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部～体部中位ヨコナデ。脚部との接合はソケット状。　使用痕：―　備考：―

2　台帳：3E 住 1 区　材質：滑石　種類：双孔円板　法量：長（2.3）、幅（1.6）、厚 0.5、孔径 0.1、重量 3.20g　色調：灰白色　備考：孔は片側穿孔。

3　台帳：3E 住 2 区　材質：軽石　種類：砥石　法量：長 3.1、幅 2.9、厚 2.9、重量 8.46g　色調：灰色　備考：砥面 A の 1 面。

3　向坪遺跡第４次調査報告

(1) 調査の経過

調査期間 / 平成 28 年 7 月 5 日～ 27 日

調査担当 / 佐々木義則

調査面積 /100 ㎡

時代 / 平安時代

遺構 / 竪穴住居跡 4 基 (平安時代), 溝跡 1 条 (時期不明), ピット 38 基 (時期不明)

調査地は，那珂川低地から北方に入り込む小谷津から 170 m ほど離れた台地上に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は宅地であった。今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり，建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は試掘調査（第３次調査, 本報告書所収）により，今回の調査区に係る遺構はおおよそ予想がついた。しかし第４号住居跡は試掘トレンチから外れており，今回の調査によって明確になった遺構であった。それでは以下，簡単に調査の経過を記す。

7 月 5 日：調査区の設定

7 月 6 日：重機による表土除去開始。遺構確認作業。

7 月 7 日：遺構確認状況撮影。遺構掘り込み開始。

7 月 11 日：住居跡の記録作業を開始する。

7 月 21 日：全ての遺構の調査を終了する。器材撤収。

7 月 26 ～ 27 日：重機による埋め戻し。

(2) 住居跡

第 1 号住居跡

遺構　他遺構との重複はない。当住居跡の主軸方向は，N -46°-W を測り，竈を北西壁に置く。竪穴部の規模は主軸方向が約 3.6m で，壁高は北西壁 19 ㎝，北東壁 19 ㎝，南東壁 28 ㎝を測る。壁周溝はみられない。ピットはカマド対面の壁際に P1・2 があり，出入口関連のピットと思われる。床面は P1・2 から竈にかけて硬化する。竪穴部覆土は，北東壁側床面に白褐色粘土の堆積がみられ，その堆積後，暗褐色土基調の自然埋土と思われる土が堆積する。竈は煙道近くが攪乱により破壊されていたが，袖石（遺物 8）の遺存が認められた。

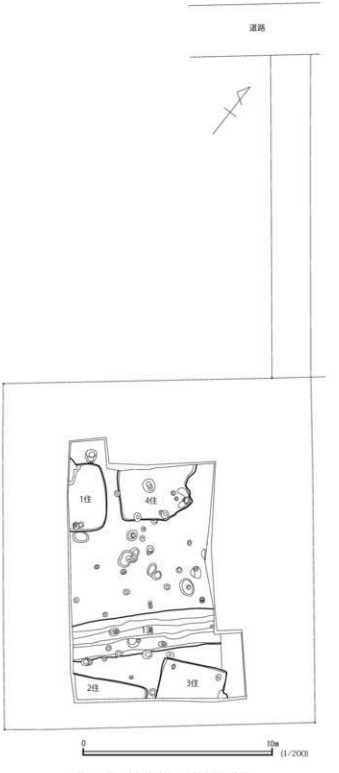
遺物出土状況　床面上より椀 6 の破片が出土している。

遺物説明

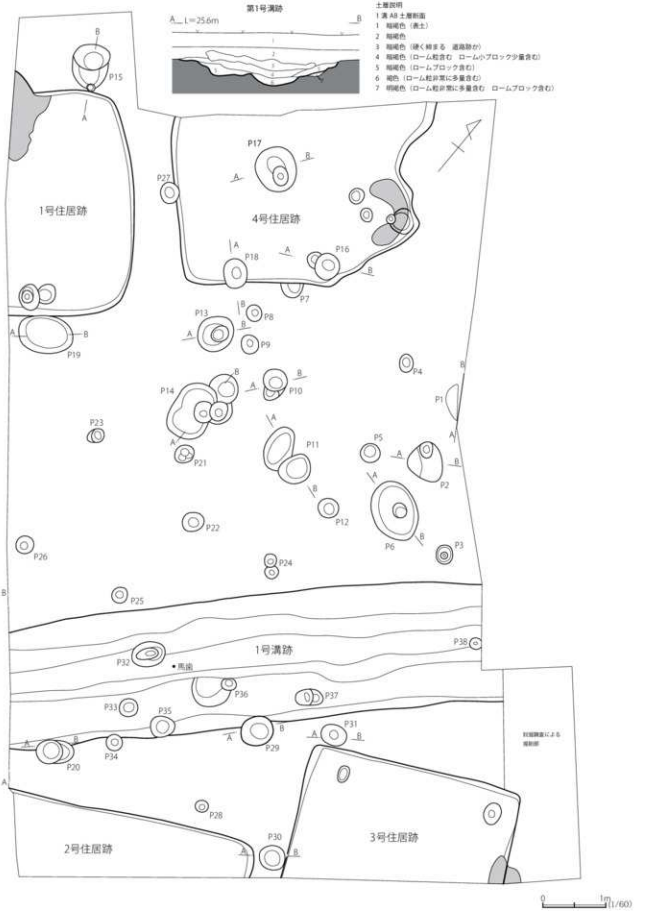
第 141 図

1　注記：1 区　材質：須恵器　器種：杯　残存：底部 50%，体部下半 25%　法量：底径（5.9）　色調：灰褐色　胎土：礫（白少），骨針多　技法等：外面底部ナデ，底部周縁手持ちヘラ削り。焼成硬質。

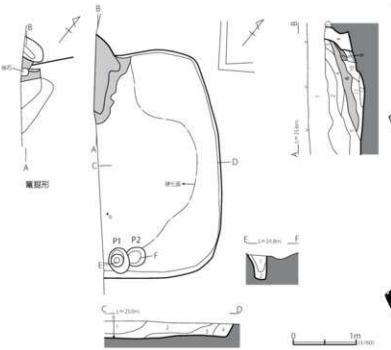
2　注記：1 区　材質：須恵器　器種：有台盤もしくは有台坏　残存：底部　法量：高台径 8.2　色調：灰色　胎土：礫（白，白透，灰），骨針微量　技法等：焼成硬質。高台端部摩滅。内面やや摩滅。外面部分的に黒く煤ける。底部周囲を打ち割り調整している可能性あり。底部外面に研

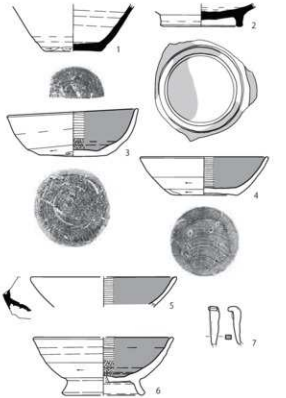


第 138 図　向坪遺跡第 4 次調査区の位置



第139図　向坪遺跡第4次調査区





土層説明

AB 土層断面

1 褐褐色（表土）
2 褐褐色（ローム粒含む）
3 褐色（白褐色粘土層）
4 褐褐色（ローム粒・白褐色粘土粒含む）
5 褐褐色（ローム粒含む　白褐色粘土小ブロック小量含む）
6 明褐色（白褐色粘土の焼壁土）
7 明褐色（白褐色粘土の焼壁土　焼土多量混じる）
8 明褐色（焼土粒多量含む）
9 明褐色（白褐色粘土粒・ローム粒多量含む）
10 褐色（白褐色粘土粒・ローム粒・焼土粒・灰多量含む）
11 褐色（ローム粒多量含む　白褐色粘土粒含む）
12 褐色（ロームブロック・焼土粒・炭化物小片含む）

CD 土層断面

1 褐色（ローム粒含む）
2 褐褐色（ローム粒含む　ロームブロック小量含む）
3 褐色（ローム粒多量含む　ロームブロック小量含む）
4 褐色（ローム粒含む）

EF 土層断面

1 褐色（ローム粒含む　ロームブロック小量含む）
2 明褐色（ロームブロック多量含む　黒褐色土少量含む）

第 140 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 1 号住居跡

磨はみられないが，転用砥か。　備考：木葉下窯産か

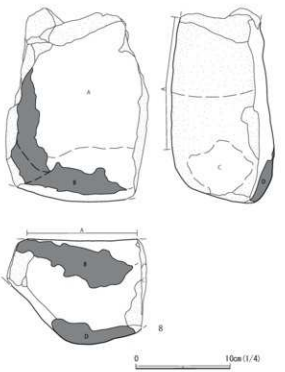
3　注記：1 区　材質：土師器　器種：杯　残存：口縁部 60％欠失　法量：口径 13.6，器高 4.7，底径 7.1　色調：外面茶褐色・黒色。内面黒色。

胎土：礫（白褐少，白透少，黒少），砂（透多，白透，白，黒少），黒雲母微　技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部不安定方向）・黒色処理。口唇部摩滅。

4　注記：－　材質：土師器　器種：杯　残存：体部 50％欠失　法量：口径 13.3，器高 4.1，底径 6.8　色調：外面褐色，体部上半一部黒褐色。内面黒色。胎土：砂（白褐，灰，白透焼，透少）　技法等：外面体部下半回転ヘラ削り。底部回転糸切り後，周縁部手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ（底 1 方向）・黒色処理。内面底部および口唇部がやや摩滅する。

5　注記：1 区　材質：土師器　器種：椀？　残存：口縁部 15％　法量：口径（15.2）　色調：外面褐色，口縁部黒色。内面黒色。　胎土：砂（白褐，透，灰少）　技法等：内面ヘラミガキ・黒色処理。外面墨書。

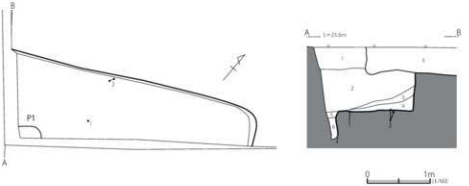
6　注記：P2　材質：土師器　器種：椀　残存：底部 40％（高台 25％），体部 25％　法量：口径（14.5），器高 6.1，高台径（8.1）　色調：外面明褐色。内面黒色。　胎土：細砂。赤色粒。　技法等：外面体部下半・底部回転ヘラ削りの後，高台接合（接合面に沈線あり）。内面ヘラミガキ（底部不定方向）・黒色処理。



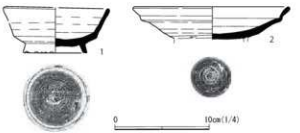
第 141 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 1 号住居跡出土遺物

7　注記：1 区　材質：鉄　器種：釘　残存：先端欠失　重量 7.7g

8　注記：カマド袖石　材質：石（砂岩）　器種：袖石　残存：3 面欠失　法量：残存長 19.9 × 14.8 × 10.9，重量 4564g　色調：暗灰色（表面煤ける）　使用痕等：A，C 面は砥面かと思われる。A 面には赤色付着物あり。B, D 面は敲打痕がみられるので，台石として利用されたものだろう。



第 142 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 2 号住居跡



第 143 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 2 号住居跡出土遺物

砥面 A →破面→砥面 C，敲打痕 B・D→カマド袖石のように利用されたものか。

第 2 号住居跡

遺構　他遺構との重複はない。竪穴部の規模は不明であるが，調査範囲に竈材がみられなかったことや，P1 が主柱穴になる可能性があることなどからみて，規模が大型住居跡になる可能性がある。壁高は北壁 60 ㎝を測る。壁周溝はみられない。竪穴部覆土は暗褐色土基調の自然埋土と思われる。

遺物出土状況　床面より有台杯と有台盤の破片が出土している。

遺物説明

第 143 図

1　注記：P1　材質：須恵器　器種：有台杯　残存：口縁部 60％欠失　法量：口径（10.8），器高 4.8，高台径 6.6　色調：灰色　胎土：礫（白多，灰少，白透少），骨針微量　技法等：回転ヘラ切り。底部外面ヘラ記号「－」。焼成硬質。高台端部外側が摩滅し細かく欠失している。　備考：木葉下窯産か

2　注記：P2・3　材質：須恵器　器種：有台盤　残存：高台欠失，暗灰褐色　胎土：礫（白多，灰少），骨針少　技法等：回転ヘラ切り後，底部外面回転ヘラ削り。高台接合部に沈線。底部外面にヘラ記号「－」。内面重ね焼き痕（同器種正位重ね焼き）。焼成硬質　備考：木葉下窯産か

第 3 号住居跡

遺構　他遺構との重複はない。当住居跡の主軸方向は，N -63°-E を測り，竈を東壁に置く。竪穴部の規模は東西 3.5m で，壁高は東壁 24 ㎝，北壁 39 ㎝，西壁 43 ㎝を測る。壁周溝はみられない。ピットは 4 つみられ，位置的には P1・2 が主柱穴の可能性があるが，ピットが浅いこと，底面に硬化面がみられないことなどから，主柱穴ではないのかもしれない。床面は壁際を除く部分が硬化する。竪穴部覆土は暗褐色土基調の自然埋土と思われる。

遺物出土状況　遺物はカマド内より須恵器杯 1 と土師器甕 2 の破片が出土している。

遺物説明

第 145 図

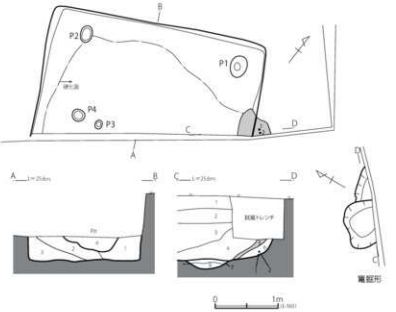
1　注記：P2，カマド　材質：須恵器　器種：杯　残存：底部 60％，体部 10％　法量：口径（12.8），器高 5.3，底径（7.0）　色調：灰色　胎土：礫（白，灰，透），骨針少　技法等：回転ヘラ切り後，底部ナデ。焼成硬質。　備考：木葉下窯産か

2　注記：P1　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 20％　法量：口径（22.3）　色調：外面口縁部赤褐色，肩部黒褐色。内面口縁部赤褐色，肩部暗褐色　胎土：砂（白透多，白多），白雲　技法等：肩部外面横方向ヘラナデ。肩部内面横方向ヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面焼土付着（カマド粘土？）。肩部外面煤ける。　備考：新治窯付近産か

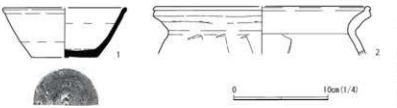
第 4 号住居跡

遺構　他遺構との重複はない。当住居跡の主軸方向は，N -51°-W を測り，竈を竪穴部南東隅に置く。竪穴部の規模は東西 3.6m で，壁高は東壁 14 ㎝，南壁 12 ㎝，西壁 19 ㎝を測る。壁周溝はみられない。ピットは竈付近に小さなピットがいくつか認められるが，主柱穴はみあたらない。竪穴部覆土は黒褐色土基調の自然埋土と思われる。竈は遺存状況が悪く，竈粘土が薄く堆積するのみであった。なお，竈に向かって左側の竪穴部壁に張り出しが認められる。

遺物出土状況　土師器甕破片 4・7 が竈付近床面から



第 144 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 3 号住居跡



第 145 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 3 号住居跡出土遺物

出土しており，これらが当住居跡に伴う遺物の可能性がある。他の遺物は覆土中からの出土であり，他住居使用遺物の投棄品であろう。

遺物説明

第 147 図

1　注記：P1，1 区　材質：土師器　器種：杯　残存：口縁部 40％欠失　法量：口径 13.9，器高 4.6，底径 5.8　色調：外面橙褐色，口縁部黒色。内面黒色。　胎土：礫（茶少），砂（透，白，黒灰少），骨針多　技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部一方向）・黒色処理。口縁部内面摩滅。

2　注記：4 区，1 区　材質：土師器　器種：杯　残存：底部 50％，器高 4.3，底径（6.6）　色調：外面褐色，口縁部黒色。内面黒色。　胎土：礫（透少），砂（白少），骨針多　技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。

3　注記：P9，4 区　材質：土師器　器種：椀　残存：口縁部 50％欠失，高台部 45％欠失　法量：口径（18.0），器高径 9.4　色調：外面口縁部黒色，体部褐色・橙褐色，底部橙褐色。内面黒色。　胎土：黒雲母細片多，骨針多　技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部 1 方向）・黒色処理。
備考：使用痕あまりみられない。

4　注記：P11，4 区　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 80％　法量：口径（13.8）　色調：橙色，黒褐色　胎土：砂（白，透）　技法等：口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラミガキ。胴部内面斜方向ナデ。色調の異なる破片が接合している。

5　注記：P7　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 30％　法量：口径（20.1）　色調：橙色，内部一部黒褐色　胎土：砂（白，透，灰少），骨針微量　技法等：口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ。胴部内面斜位ヘラナデ（ハケ目あり）。頸部内面横方向ヘラナデ。外面煤・焼土付着。

6　注記：P7　材質：土師器　器種：甕　残存：口縁部 20％　法量：口径（20.8）　色調：口縁部明褐色，頸部以下褐色，内外面部分的に黒褐色　胎土：砂（白透多），白雲母　技法等：外面胴部下半横方向ヘラ削り。胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。　備考：新治窯付近産

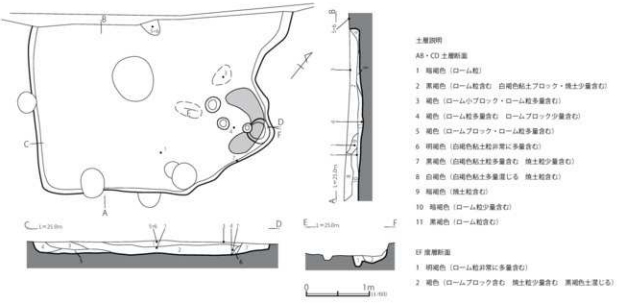
7　注記：P14，1 区　材質：土師器　器種：甕　残存：上部 20％　法量：口径（17.9）　色調：外面口縁部明褐色・褐色，肩部黒色，胴下部灰褐色。内面口縁部褐色，胴部褐色，部分的に黒褐色。　胎土：砂（透）　技法等：口縁部ヨコナデ。内外面ナデ。

(3) 溝跡・ピット

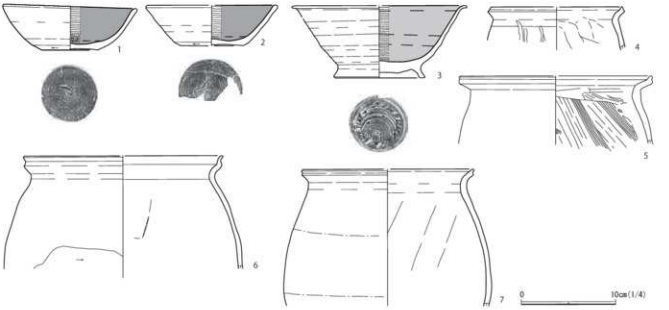
第 1 号溝跡

調査区南部で検出された，2 段に堀り込まれた溝である。確認面幅 2.0 m，地表からの深さ 0.8 m を測る。溝底面は南西から北東に向けて低くなっており，調査区両端での比高差は約 20cm 程である。溝覆土上層に固く締まった土層があり，溝がある程度埋まった頃に道路として使用されていたようである。遺物は，溝底面から 10cm ほど上から馬歯が出土している。なお，時期を決定できる遺物がなかったため，当溝の時期は不明である。

ピット

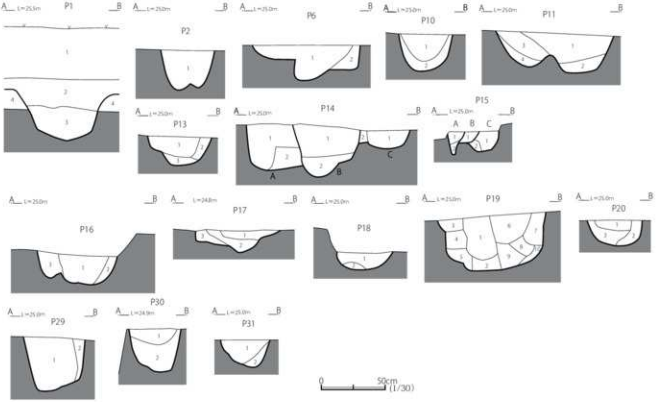


第 146 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 4 号住居跡



第 147 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 4 号住居跡出土遺物

調査区全体から確認されているが，とくに規則的な配置は見いだせなかった。時期を決定できる遺物の出土もなかった。



土層説明

Pit1 土層断面

1　暗褐色（耕作土）

2　暗褐色

3　暗褐色　ローム粒

4　褐色

Pit2 土層断面

1　暗褐色（ローム粒やや多量含む）

Pit6 土層断面

1　暗褐色（ローム小ブロック・ロームブロック少量含む）

2　黄褐色（ローム土主体）

Pit10 土層断面

1　暗褐色（ローム粒小量含む）

2　暗褐色（ローム小ブロック含む）

Pit11 土層断面

1　暗褐色

2　褐色（ロームブロック多量含む）

3　暗褐色

4　褐色（ローム小ブロック含む）

Pit13

1　褐色（ローム小ブロック含む）

2　明褐色（ローム土混じる）

3　黄褐色（ローム土主体）

Pit14

A

1　暗褐色（ローム粒含む）

2　褐色（ローム粒多量含む）

B

1　暗褐色（ローム小ブロック含む）

2　明褐色（ローム土多量混じる）

C

1　暗褐色（ローム粒やや多量含む）

2　明褐色（ローム粒多量含む）

Pit15 土層断面

A

1　褐色（ローム粒やや多量含む）

2　褐色（ローム粒多量含む）

B

1　暗褐色（ローム小ブロック含む）

C

1　暗褐色（ロームブロック含む）

2　明褐色（ローム土多量混じる）

Pit16 土層断面

1　暗褐色（ローム粒含む　ロームブロック少量含む）

2　明褐色（ロームブロック多量含む）

3　暗褐色（ローム粒含む　白色粘土小ブロック小量含む）

Pit17 土層断面

1　黒褐色（ローム粒多量含む）

2　黒褐色（パミス土混じる）

3　明褐色（今市パミスブロック多量含む）

Pit18 土層断面

1　黒褐色（ローム粒含む）

2　黄褐色（ロームブロック多量含む）

Pit19 土層断面

1　褐色（ローム粒含む）

2　褐色（ローム粒多量含む）

3　明褐色（ローム小ブロック多量含む）

4　黒褐色（ローム粒多量含む）

5　褐色（ロームブロック含む）

6　褐色（ローム粒含む）

7　明褐色（ローム粒非常に多量含む）

8　褐色（ローム粒多量含む）

9　褐色（ローム粒多量含む　黒褐色土小ブロック含む）

10　明褐色（ローム粒非常に多量含む　黒褐色土小ブロック含む）

Pit20 土層断面

1　暗褐色（ローム粒含む）

2　明褐色（ローム土多量混じる）

3　黒褐色（ローム粒やや多量含む）

Pit29 土層断面

1　黒褐色

2　暗褐色（ローム土混じる）

Pit30 土層断面

1　暗褐色（ローム粒少量含む）

2　暗褐色（ローム土混じる）

Pit31 土層断面

1　黒褐色

2　褐色（ローム土混じる）

第 148 図　向坪遺跡第 4 次調査区第 1 号溝跡およびピット土層

4　本郷東遺跡第５次調査報告

(1) 調査の経過

調査期間 / 平成 26 年８月２日～ 26 日

調査担当 / 佐々木義則

調査面積 /94 ㎡

時代 / 古墳時代

遺構 / 竪穴住居跡４基 (古墳時代３基，時期不明１基)

調査地は，本郷川の低地を望む台地縁辺に位置し，平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。今回の調査は個人住宅建築に伴う発掘調査であり，建物部分を中心に調査区が設定された。当地区は試掘調査(第４次調査，当報告書所収）により，今回の調査区に係る遺構はおおよそ予想がついた。しかし第３号住居跡は駐車場等により試掘トレンチが設定できなかった場所にあり，今回の調査によって明確になった遺構であった。なお今回検出された遺構番号は，本調査にあたり改めて遺構番号を付した。それでは以下，簡単に調査の経過を記す。

８月２日：重機による表土除去開始。

８月３日：遺構確認作業。平面図作成。

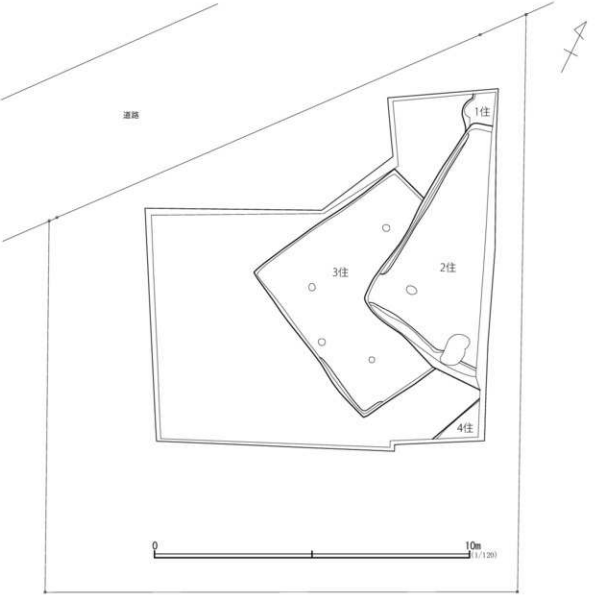
遺構のない部分を埋戻し，土置き場とする。

８月５日：遺構掘り込み開始。

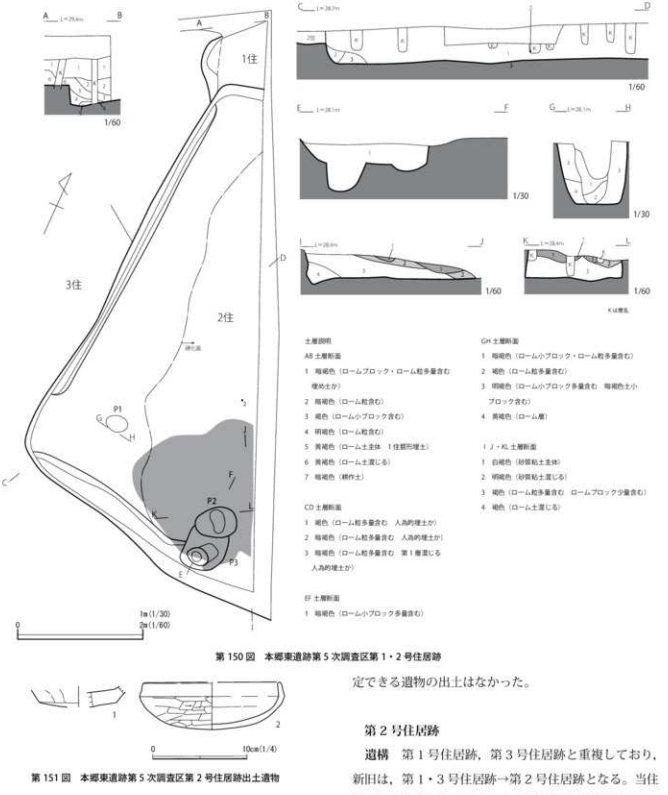
８月８日：記録作業開始。

８月 25 日：記録作業終了。器材撤収作業。

８月 26 日：重機による埋め戻し。



第 149 図　本郷東遺跡第５次調査区



第 150 図　本郷東遺跡第 5 次調査区第 1・2 号住居跡

第 151 図　本郷東遺跡第 5 次調査区第 2 号住居跡出土遺物

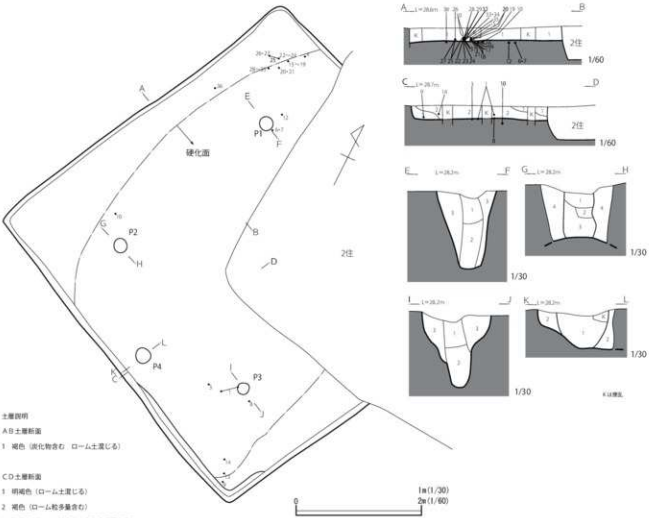
(2) 住居跡

第 1 号住居跡

遺構　竪穴部北西隅のみの調査である。第 2 号住居跡と重複しており，新旧は第 1 号住居跡→第 2 号住居跡である。竪穴部の規模は不明である。確認面からの壁高は西壁 20 ㎝を測る。壁周溝はみられない。時期を決定できる遺物の出土はなかった。

第 2 号住居跡

遺構　第 1 号住居跡，第 3 号住居跡と重複しており，新旧は，第 1・3 号住居跡→第 2 号住居跡となる。当住居跡の主軸方向は，N -5°-E，竪穴部の規模は南北 7.1m を測る。確認面からの壁高は西壁 57 ㎝，南壁 45 ㎝。壁周溝は深さ 5 ㎝で一部途切れながらめぐる。ピットは P1 が主柱穴，P2・3 が出入口施設関連のピットであろう。床面は P2・3 から，北壁に存在していたであろう竈にむけて硬化している。竪穴部覆土は，CD 土層断面でみると，ロームブロックが混じる暗褐色土によ



第 152 図　本郷東遺跡第 5 次調査区第 3 号住居跡

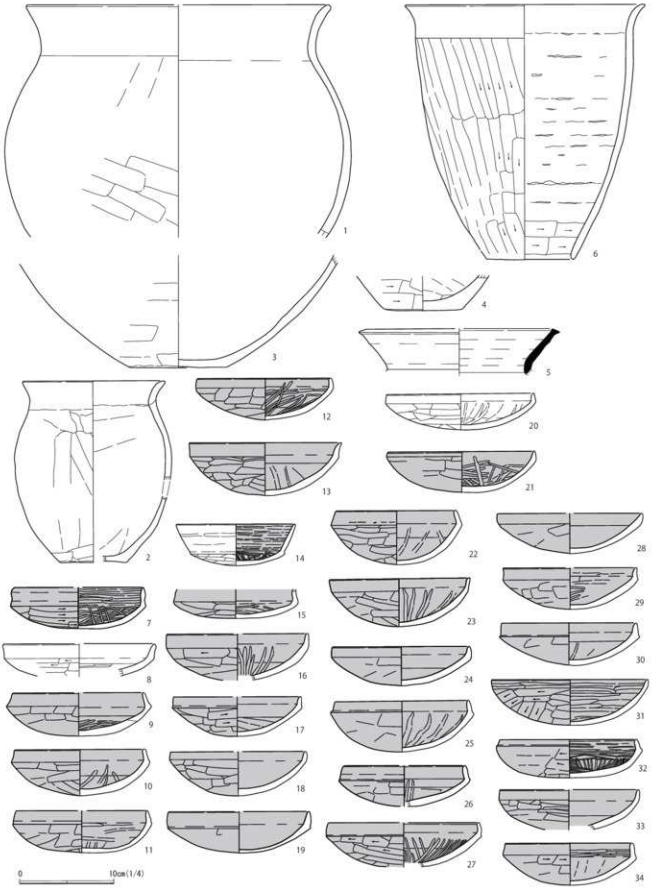
第 153 図　本郷東遺跡第 5 次調査区第 3 号住居跡北西隅部遺物土器出土状況（左：北から　右：東から）

りいっきに埋め戻されている可能性がある。その埋戻しの際に，住居南方より白褐色砂質粘土を投棄したようであり，その広がりがP2・3 付近の覆土中に認められた。

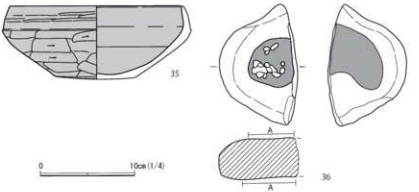
遺物説明

第 151 図

1　台帳：2 住　材質：土師器　器種：甕　残存：底部 40％　法量：器高（2.2），底径（8.0）　色調：外面橙～にぶい黄褐色。内面にぶい黄褐



第 154 図　本郷東遺跡第 5 次調査区第 3 号住居跡出土遺物 (1)



第 155 図　本郷東遺跡第 5 次調査区第 3 号住居跡出土遺物 (2)

位 30%　法量：口径（32.3），器高 24.6　色調：外面橙～にぶい黄褐色～暗褐色，内面浅黄～黄灰色　胎土：礫（白少），砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り後ヘラナデ，内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。　使用痕：内面口縁～胴部上位が摩滅しており，胴部下位は器面の一部が剥離している。　備考：3 住 P3 と同一か。

2　台帳：2・3 住　材質：上師器　器種：甕　残存：50%　法量：口径 15.1，器高（19.3），底径 7.0　色調：外面橙～にぶい黄橙～褐色　胎土：礫（白微），砂（白多，透多，黒少）　胎土：礫（白微），砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴～底部ヘラナデ。　使用痕：外面器面が被熱している。　備考：—

3　台帳：1・3 住，3 住 P3，表土　材質：上師器　器種：甕　残存：胴部下位～底部 30%　法量：器高（11.9），底径（10.0）　色調：外面にぶい黄褐色，内面浅黄色　胎土：礫（白少），砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ？　使用痕：内面器面の一部が剥離している。　備考：3 住 P4・5 と同一か。

4　台帳：3 住 P36　材質：上師器　器種：甕　残存：底部 10%　法量：器高（3.7），底径（8.4）　色調：外面橙～黒褐色，内面黄橙褐色　胎土：砂（白少，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ　使用痕：—　備考：—

5　台帳：3 住　材質：須恵器　器種：甕　残存：口縁部 20%　法量：口径（21.2），器高（5.0）　色調：灰赤色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：ロクロ成形。外面一部に自然釉がかかる。　使用痕：口縁端部の一部が欠失している。　備考：2 住から胴部片が出土している。

6　台帳：P10　材質：上師器　器種：甑　残存：口縁～胴部上位 70%，胴部下位 90%　法量：口径 25.3，器高 27.0，孔径 8.5　色調：橙～にぶい黄褐～暗褐～黒色　胎土：礫（白少），砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ，下位のみヘラ削り。輪積痕が多くみられる。　使用痕：口縁端部と孔周辺部の一部が欠失している。　備考：—

7　台帳：P1　材質：上師器　器種：杯　残存：口縁部 20%，体部 70%　法量：口径（13.6），器高 4.6　色調：外面褐～黒褐色，内面にぶい黄橙～褐色　胎土：砂（白少，透少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部不定方向にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が欠失している。　備考：—

8　台帳：3 住 P6　材質：上師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（16.0），器高（3.5）　色調：赤橙～橙～黒色　胎土：砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁～体部上位ヨコナデ，中～下位ヘラナデ後ヘラミガキ。　使用痕：—　備考：二次焼成を受けている。

9　台帳：3 住 P9　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（13.8），器高 4.6　色調：外面黒褐色，内面にぶい黄橙～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

色　胎土：小石（茶微），礫（白微，灰微），砂（白多，透多，黒少），骨針含む　焼成：良好　技法等：外面ヘラ削り？内面ヘラナデ？。　使用痕：外面器面が被熱している。　備考：—

2　台帳：P1　材質：上師器　器種：杯　残存：30%　法量：口径（14.6），器高（5.0）　色調：外面浅黄橙～橙色，内面橙色　胎土：礫（灰少），砂（白多，透多，黒少，赤微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁～体部上位ヨコナデ，体部下位ヘラナデ。　使用痕：—　備考：—

第 3 号住居跡

遺構　第 2 号住居跡と重複しており，新旧は，第 3 号住居跡→第 2 号住居跡となる。当住居跡の主軸方向は，N -25° -E，竪穴部の規模は南北 5.8m，東西 5.9 m を測る。確認面からの壁高は，東壁 26 ㎝，西壁 23 ㎝，南壁 22 ㎝，北壁 25 ㎝。壁周溝は南東部でごく浅い周溝を確認している。ピットは P1 ～ 3 が主柱穴，P4 が出入口施設関連のピットであろう。床面は P4 から，北壁に存在していたであろう竈にむけて硬化している。竪穴部覆土は，ローム土が混じる褐色土を基調とする。炭化材の出土から，当住居跡が火事にあっていることがわかるが，火事の後，埋め戻された可能性があろう。

遺物出土状況　住居跡北西隅部より，杯類が床面上に正位の状態で重ね置かれて出土した。その土器群は 5 つのまとまりで置かれており，それぞれのまとまりごとに重なり方を上位のものから述べると，15・16・17・18・19，20・21，22・23・24・25，26・27，28，29，30，31，32，33，34，35 となっていた（写真参照）。古墳時代後期の杯類の一括出土としては特筆すべき事例といえよう。

遺物説明

第 154 図

1　台帳：P4・5，3 住　材質：上師器　器種：甕　残存：口縁～胴部中

10　台帳：3住P2　材質：上師器　器種：杯　残存：ほぼ完形　法量：口径13.8，器高4.9　色調：外面にぶい黄褐～黒褐色，内面黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁部が摩滅している。　備考：—

11　台帳：3住　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（14.0），器高4.5　色調：褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

12　台帳：3住P11　材質：上師器　器種：杯　残存：70%　法量：口径14.0，器高4.4　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部上～中位ヨコナデ後ヘラミガキ，下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

13　台帳：3住P8　材質：上師器　器種：杯　残存：80%　法量：口径16.2，器高5.6　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：礫（白微），砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，中～下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：—

14　台帳：3住P7　材質：上師器　器種：杯　残存：完形　法量：口径12.4，器高4.4　色調：外面橙～黒色，内面黒色　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラ削り。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。内面に黒色処理。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：丁寧につくられた上器。黒色処理も他の上器とは違う。

15　台帳：3住P24　材質：上師器　器種：杯　残存：20%　法量：稜径（13.1），器高（3.1）　色調：くろ褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。　使用痕：口縁端部が摩滅して欠失している。　備考—

16　台帳：3住P25　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（14.8），器高（4.9）　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヨコナデ後ヘラミガキ，下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考—

17　台帳：3住P26　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（13.4），器高（4.2）　色調：黒褐～黒色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，中～下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

18　台帳：3住P26・27　材質：上師器　器種：杯　残存：40%，器高4.7　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヨコナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

19　台帳：3住P28　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（14.7），器高（4.4）　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヨコナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：器面が薄く，調整も丁寧で，きれいな器形の上器。

20　台帳：3住P22・23　材質：上師器　器種：杯　残存：ほぼ完形　法量：口径15.5，器高3.9　色調：外面黒褐色，内面にぶい黄褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内外面ヨコナデ，内外面口縁部ヨコナデ，体部ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

21　台帳：3住P23　材質：上師器　器種：杯　残存：90%　法量：口径15.4，器高4.4　色調：外面赤褐～にぶい赤褐色，内面にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

22　台帳：3住P29　材質：上師器　器種：杯　残存：完形　法量：口径12.5，器高5.8　色調：黒褐～黒色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：—

23　台帳：3住P30　材質：上師器　器種：杯　残存：口径14.7，器高5.1～5.2　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

24　台帳：3住P31　材質：上師器　器種：杯　残存：ほぼ100%　法量：口径14.4，器高4.2　色調：にぶい黄橙～黒褐色　胎土：砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内部口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

25　台帳：3住P32・35　材質：上師器　器種：杯　残存：ほぼ完形　法量：口径14.0，器高5.4～5.5　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

26　台帳：3住P33　材質：上師器　器種：杯　残存：30%　法量：口径（12.7），器高4.4　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ後若干のヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

27　台帳：3住P34　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（15.0），器高（4.7）　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

28　台帳：3住P12・14　材質：上師器　器種：杯　残存：30%　法量：口径（15.4），器高4.3　色調：外面にぶい黄褐～黒褐色，内面にぶい黄橙～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ。内外面とも黒色処理　使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

29　台帳：3住P12・13・14　材質：上師器　器種：杯　残存：40%　法量：口径（14.2），器高4.4　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透多）

焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：口縁部の一部にスス状物付着。

30　台帳：3住P12・14　材質：土師器　器種：杯　残存：50%　法量：口径14.3，器高4.6　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）
焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部～体部上位ヨコナデ，中～下位ヘラナデ後若干のヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部がやや摩滅している。　備考：—

31　台帳：3住P14・15・16・17・19　材質：土師器　器種：杯　残存：60%　法量：口径16.4，器高4.9　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。
使用痕：口縁端部が摩滅している。　備考：—

32　台帳：3住P16・18・20　材質：土師器　器種：杯　残存：70%
法量：口径14.3，器高4.1　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラナデ後放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部が摩滅している　備考：—

33　台帳：3住P19　材質：土師器　器種：杯　残存：30%　法量：口径（14.6），器高（4.3）　色調：黒褐色　胎土：礫（白微），砂（白少，透多）
焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。
使用痕：—　備考：—

34　台帳：3住P19・20　材質：土師器　器種：杯　残存：60%　法量：口径13.3，器高4.5　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：砂（白多，透多，黒少）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：口縁端部とない外面の器面が摩滅している。　備考：—

第155図

35　台帳：3住P20・21　材質：土師器　器種：鉢　残存：60%　法量：口径18.4，器高8.8，底径9.0　色調：にぶい黄褐～黒褐色　胎土：小石（白微），礫（透少），砂（白少，透多，黒微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体～底部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁～体部上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。　使用痕：—
備考：—

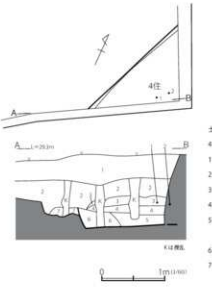
36　台帳：S2　材質：砂岩　種類：敲石　法量：長8.4，幅12.8，厚4.1，重量628.84g　色調：にぶい黄色　備考：敲打による凹みは2面。

第4号住居跡

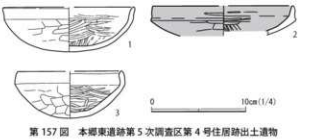
遺構　竪穴部西壁付近の一部を調査したのみである。竪穴部覆土は，ロームブロック・ローム粒が混じる暗褐色土を基調としており，人為的埋土の可能性がある。遺物は古墳時代後期の杯類が出土している。

遺物説明

第157図



第156図　本郷東遺跡第5次調査区第4号住居跡



第157図　本郷東遺跡第5次調査区第4号住居跡出土遺物

1　台帳：P2　材質：土師器　器種：杯　残存：口縁部10%，体部60%　法量：口径（14.0），器高4.8　色調：外面にぶい黄褐色，内面にぶい黄褐～暗褐色　胎土：砂（白多，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部不定方向ヘラミガキ。内面黒色処理。　使用痕：—　備考：—

2　台帳：4住　材質：土師器　器種：杯　残存：10%　法量：口径（15.0），器高（3.2）　色調：黒褐色　胎土：砂（白少，透多）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ，体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。　使用痕：—　備考：—

3　台帳：P1　材質：土師器　器種：杯　残存：20%　法量：口径（11.0），器高5.0　色調：外面浅黄～黒褐色。内面浅黄色　胎土：砂（白多，透多，赤微）　焼成：良好　技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，体部不定方向ヘラミガキ。　使用痕：—　備考：—

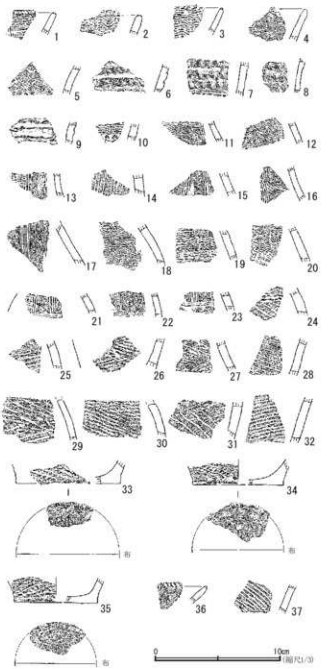
(3) 調査区からの出土遺物

調査区から弥生式土器破片が出土しているので以下報告する。

遺物説明

第158図

1　出土位置・注記：3住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　文様：口唇部刻み（筵状），櫛描文（櫛歯5本）



第 158 図　本郷東遺跡第 5 次調査区出土遺物

2　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：口唇部刻み（筮状），櫛描文（櫛歯 5 本）

3　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：口唇部刻み（筮状），櫛描文（櫛歯 4 本）

4　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本）

5　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）

6　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形上器　文様：縄文（隆帯より上位に施文），隆帯（指頭）備考：胎土に金雲母を含む

7　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（隆帯より下位に施文），隆帯（指頭）

8　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：隆帯（指頭）

9　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：隆帯（指頭）

10　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本以上），刺突文

11　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本）備考：細頸形か

12　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本）

13　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）

14　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）

15　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）

16　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）

17　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 9 本）備考：胎土に金雲母を含む

18　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本）備考：器外面に炭化物付着

19　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本）

20　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本）

21　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：小型壺形上器　法量：最大径 70 mm（残存率 13%）文様：櫛描文（櫛歯 3 本）

22　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 5 本以上）

23　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本），付加条縄文（R·S）

24　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 3 本），付加条縄文（L × L）

25　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：櫛描文（櫛歯 4 本），付加条縄文（R·S）

26　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：小型壺形上器　法量：最大径 73 mm（残存率 13%）文様：付加条縄文（L·Z）

27　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形上器　文様：付加条縄文（R·Z，r·S）

28　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：付加条縄文（L·Z）備考：器内面が変色

29　出土位置・注記：2 住№1　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：付加条縄文（L × L，R × R）備考：器外面に炭化物付着

30　出土位置・注記：表土№1　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形上器　文様：付加条縄文（R·S，L·Z）備考：器外面に炭化物付着

31　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：

壺形土器　文様：付加条縄文（R × R, L × L）

32　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：大型壺形土器　文様：付加条縄文（R × R）

33　出土位置・注記：表土　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　法量：底径 82 mm（残存率 16％）文様：付加条縄文（L × L），底面布目痕

34　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　法量：底径 72 mm（残存率 25％）文様：付加条縄文（L × L），底面布目痕

35　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：中・小型壺形土器　法量：底径 66 mm（残存率 24％）文様：付加条縄文（R × R），底面布目痕

36　出土位置・注記：2 住　時代時期：弥生時代後期（十王台式）　器種：高坏形土器　文様：口唇部刻み（斜状）

37　出土位置・注記：3 住　時代時期：弥生時代後期（二軒屋式か）　器種：中・小型壺形土器　文様：付加条縄文（RL+2L）

Ⅳ　東中根遺跡群における弥生時代後期「東中根式」の集落跡について（上）

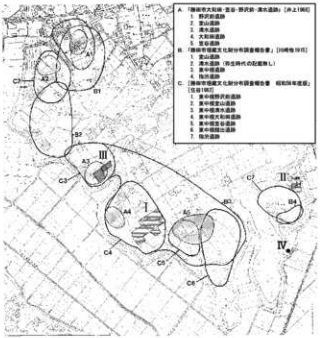
1．はじめに

「東中根（ひがしなかね）」は，ひたちなか市の中根地区を東西で呼び分けた俗称であり，ここに分布する弥生時代の遺跡を「東中根遺跡群」と呼んでいる。この一帯は市街化調整区域であることから，建造物の開発行為は抑制され，これに対応するための市内遺跡発掘調査はほとんど実施されてこなかった。しかし近年，畑地帯総合整備事業が推進されることになり，埋蔵文化財の所在と，これへの対応が課題として一気に浮上することになった。本稿では，弥生時代後期に「東中根式土器」が設定された東中根遺跡群について，既往の調査を概括しておきたい。

2．土器の発見と調査の歩み

弥生時代の土器が東中根から掘り出された最初は，1928（昭和3）年頃という。「本遺跡の住人安寅吉氏（故人）が宅地裏の畑を掘った時，土壙のような処から土器が発見された」（藤本 1983）と伝えられている。1931（昭和6）年，当時中学生であった藤本弥城のもとに，これが提供された。一方，1939（昭和14）年に，井上義安の父，井上義も東中根の土器を入手した。提供したのは「打越光康氏」であったらしい。調べてみれば，「安寅吉氏」と「打越光康氏」は畑一枚を隔てた隣家に住まい，耕作地も隣接していた。後に「堂山（どうやま）遺跡」として括られる同じ遺跡から掘り出された土器が，藤本，井上という2人の研究者の少年時代に出現したわけである。

1950年代　戦後，水戸第一高等学校で史学会を創設し考古学に熱中した佐藤次男は，卒業後も調査や研究を続け，1951（昭和26）年に「考古学会」を設立した。その機関誌『考古学』に東中根の土器が登場する。弥生式土器の編年研究が進められ，東中根の土器が「東中根式」として図示された。1952（昭和27）年に佐藤が編集した遺跡地名表には2点（第160図A），1953（昭和28）年の伊東重敏の論文には4点（B），佐藤の論文には4点（C）が掲載され，そのほとんどは，井上が所蔵する堂山遺跡の土器であった[註1]。井上の土器を1950（昭和25）年前後に撮影した写真が，佐藤の個人的な写

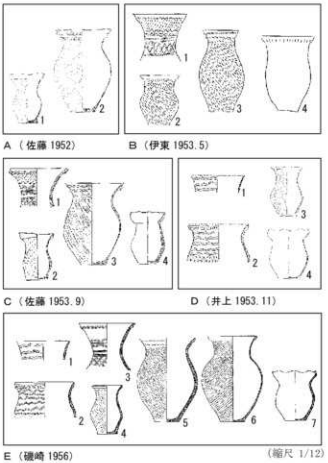


第159図　「東中根」における遺跡の位置と範囲

（鈴木 2007 より加筆引用）

真帳『弥生式文化研究資料』に残されており[註2]，これらの挿図は，謄写版印刷のスケッチではあっても，概ね特徴が描写されていることがわかる（F・G）。1953（昭和28）年には，井上自身も論文の挿図に使用したが，これには新たに2点の土器が加えられた（D）。さらに1956（昭和31）年，磯崎正彦も論文の挿図に掲載し，また新たに1点の土器が追加された（E）。井上が所蔵する堂山遺跡の土器は，身近な同世代の研究者に資料として共有されていたことがわかる。

佐藤が編集していた『考古学』には，戦後に行われた調査などの動向が事細かに記載されており，1950（昭和25）年10月には「那珂郡勝田町東中根下区弥生式遺跡発掘　藤本弥城氏」の記事が見える。「東中根下区」というのは堂山遺跡のことで[註3]，『弥生式文化研究資料』の写真（第160図F）にも同じ表記のメモが記されていた。これは，堂山遺跡の土器を提供された藤本が「その後筆者（引用註：藤本）はその周辺を発掘してみたが，土壙らしいものと及び遺物は何一つ出土しなかった」という調査に相当するのであろう。また，1951（昭和26）年には，藤本の弟，藤本武が「地主の桑田三郎氏（清海楼）から，土器発見の知せを受けて」（藤本武 1993），笠谷（かさや）遺跡を調査したが，この時に出土したのは弥生時代中期「足洗式」の土器棺であった。1952（昭和27）年



＊A～Dは輝写版印刷，Eは活版印刷。F・Gは佐藤次男『弥生式文化研究資料』より引用。
＊A～Gの実測図及び写真を比較すると，B1＝C1＝E3＝G1，A1＝B2＝C2＝D3＝E4＝F2，A2＝B3＝C3＝E5＝G2，C4＝D4＝E7＝F1，D1＝E1，D2＝E2という関係で，同一個体を実測したと推定できる。E3には，頸部の縄文の表現が欠落している。

第 160 図　1950 年代に報告された「東中根」の土器

には，「那珂湊町(ママ)第一高史学会は，勝田町東中根遺跡（弥生）の試掘を行ったが，新発見の成果は認められなかった」（佐藤編 1952）という記事があり，調査地点は明らかでないが，これも空振りに終わっている。

1960 年代　藤本弥城が所蔵した堂山遺跡の土器は，1964（昭和 39）年の『日本原始美術』に 1 点の写真が「東中根式」として，1968（昭和 43）年の『弥生式土器集成』に 2 点の実測図が公表されることになる。写真を掲載するため完形に近い土器が選ばれたのであろうが，公表されたのは，佐藤次男等が「東中根式」と呼んだ櫛描文の土器ではなく，「天王式土器との類似性」（杉原 1964）を示す，「この地方に一般的な土器ではない」（神沢 1968）という壺形土器（第 163 図 1）と，無文の鉢形土器であった。これに反発するかのように，1965（昭和 40）年には佐藤が「洞山式」（佐藤 1965），1965 年には井上義安が佐藤との合意のもと「磐船山式」という別の型式名称を用いることになる（井上他 1966）。

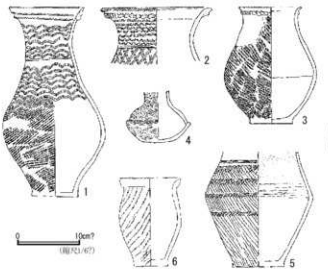
1960 年代は，茨城県下において牛蒡の耕作が盛んになり，それは東中根においても例外ではなかった。収穫は未だ機械化されておらず，手掘りの頃である。畑に 50 ㎝ほどの間隔で細長いトレンチが開けられ，スコップが土器に当たるとそれが引き抜かれた。野沢(のざわ)前，大和田(おおわだ)，清水(しみず)遺跡と呼ばれることになる各所から土器が掘り出され，骨董屋に流出したものもあったらしい（第 161 図）。井上は，掘り出された土器を地主から直接に入手し，一連の研究（井上 1967，1968，1969）に「磐船山式」として発表した。一方，川崎純徳と鴨志田篤二は，大和田遺跡の土器を「東中根式」として

第 161 図　「東中根遺跡」の土器
（川崎他 1990 より引用）

報告している（川崎 1967，鴨志田 1969）。

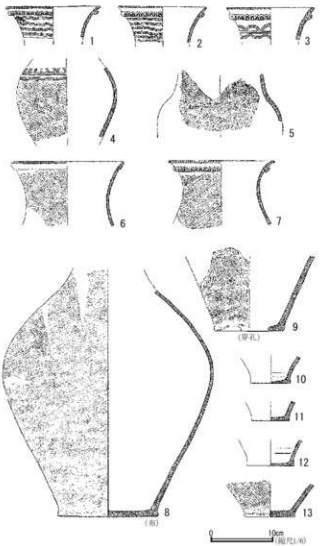
1970年代　1966（昭和41）年に常総台地研究会を設立した川崎純徳は，「私共の方で「東中根遺跡」については，本格的な発掘調査に着手したいと念願」（川崎 1967）していた。1970（昭和45）年には予備的な調査で住居跡を確認し，1971（昭和46）年度から勝田市史編さん事業が本格化することで，事業の一環として発掘調査が実現する。その調査対象に選ばれたのは大和田遺跡であった。1975（昭和50）年度までに5次の調査が継続されている。検出されたのは，弥生時代後期の住居跡5基と古墳時代前期の住居跡3基，そして溝状遺構であった。それまでも，完形に近く復元される土器が多数掘り出され住居跡の存在が推定されてはいたが，これを確実なものとした。土器群についても，一括性が検討できる記録が残されることになったのである。溝状遺構については，弥生時代の集落跡に伴う「環濠」という問題意識のもとに調査が進められたが，第4次調査において，これが古墳時代前期の住居跡と重複し，溝状遺構の方が新しいことが判明している。

『勝田市史』においては，「東中根遺跡」という表記が用いられていることについて言及しておきたい。1950年代の「東中根遺跡」は，堂山遺跡とほぼ同じ意味を持ちえたが，1960年代にいくつもの地点から土器が掘り出されることになり，井上義安は，これらを野沢前，堂山，清水，大和田，笠谷遺跡と呼び分けていた。これに対して川崎は，「本遺跡については小字名によって，洞山（堂山），笠谷，大和田の各遺跡と呼称されてきたが，本来は1つの遺跡であり，東中根遺跡と大字名で呼ぶことが適当である」（川崎 1967），「この地域の弥生時代の消長を捉える格好のフィールドとして，一括して取扱い，この遺跡の分析の上に立って東日本における弥生時代の社会構造の一面が把握できるのではないかと思っている」（川崎 1972）という考えのもと，「東中根遺跡」を全ての遺跡の呼称とした。要するに遺跡群研究の視点ということなのではあるが，土器型式名称の問題と絡むこともあって，これは井上からの反発を招いた（井上 1968）。大和田遺跡の発掘調査報告書は，「東中根遺跡」として刊行されることになるが，『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』では，「東中根遺跡群」として全体を括りながら，現在の遺跡名称が採用されている。このよ

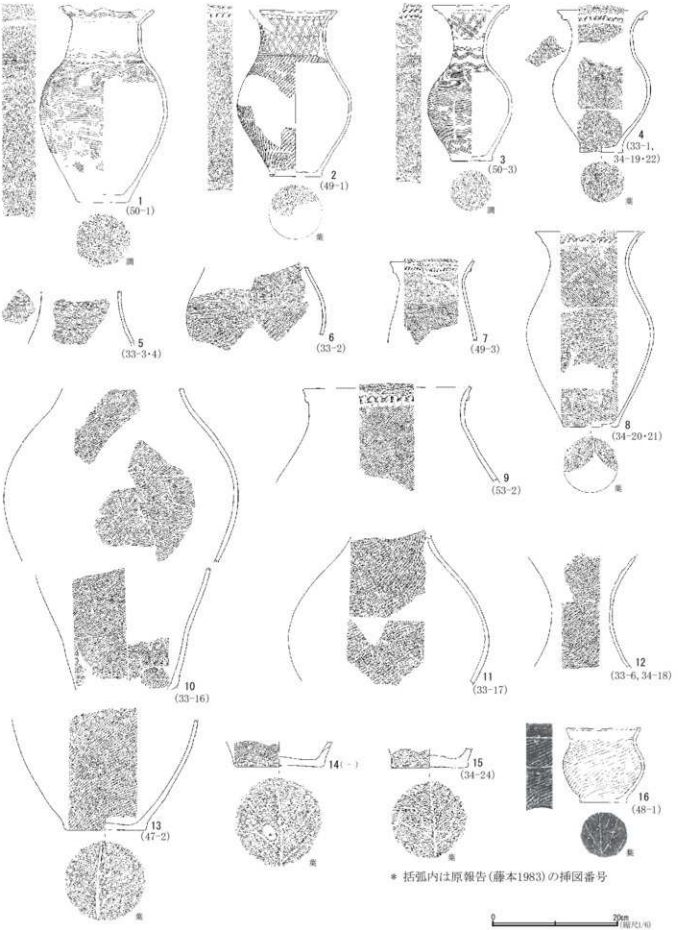


＊1～4は「東中根（堂山地区）遺跡」，5・6は「東中根（大和田地区）遺跡」として掲載されている。

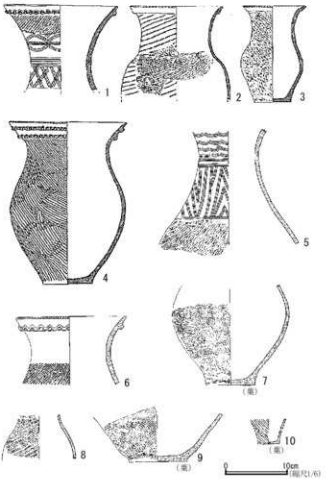
第162図　『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』の土器
（川崎他 1979 より引用）



第163図　野沢前遺跡の土器
（井上 1968 より加筆引用）



第164図　堂山遺跡の土器（1）（藤本弥城先史資料）



第 165 図　堂山遺跡の土器（2）
（1 ～ 4 は井上他 1966，5 ～ 10 は井上 1967 より加筆引用）

うな混乱によるものか，井上が所蔵した大和田遺跡の土器が「東中根（堂山地区）遺跡」と誤って掲載されていて，一部の遺跡の表記が信用し難いものになっている（第162図）。

1980-1990 年代　1983（昭和 58）年，藤本弥城が『常陸那珂川下流の弥生土器Ⅲ』を出版した。縄文時代の遺跡をまとめた既刊 2 冊に続く 3 冊目の報告である。50 年以上も公表されることがなかった堂山遺跡の土器群も掲載されている。1986（昭和 61）年には，蒐集した資料のほとんどを勝田市に寄贈し，勝田市教育委員会では，これを「藤本弥城先史資料」と呼んで保存と活用に向け整理を始めた。1988（昭和 63）年度からは，藤本武が整理を担当し，当事者により調査の状況が回顧されている（藤本武 1991，1993）。

1989（平成元）年には，勝田市埋蔵文化財調査センターの建設に伴い指渋（もしぶ）遺跡が発掘され，弥生時代後期の住居跡 1 基が検出された（住谷 1990）。指渋遺跡の土器が報告されるのも初めてであったが，土器群の構成とともに住居跡の形態が，大和田遺跡とは大きく異なるものであった。

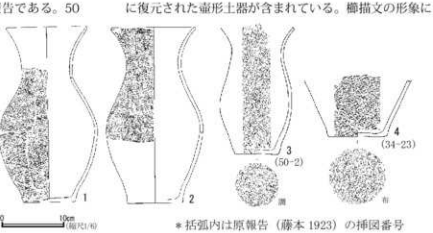
2000-2010 年代　畑地帯整備事業に伴い，2000・2001（平成 12・13）年度に分布調査，試掘調査，発掘調査が実施された。この時の対象地区には，清水遺跡が含まれており，敷設予定の道路幅でトレンチが設定されたが，弥生時代の遺構は検出されていない。清水遺跡については，土器が出土したという情報をもとに，2009（平成 21）年度の市内遺跡調査でも試掘を実施したが，これも弥生時代の遺構は検出されなかった。

そして 2015（平成 27）年度から，畑地帯整備事業に伴う試掘調査が再び開始された。対象地区には，笠谷（かさがい）館出，指渋遺跡が含まれている。

3．野沢前遺跡の土器

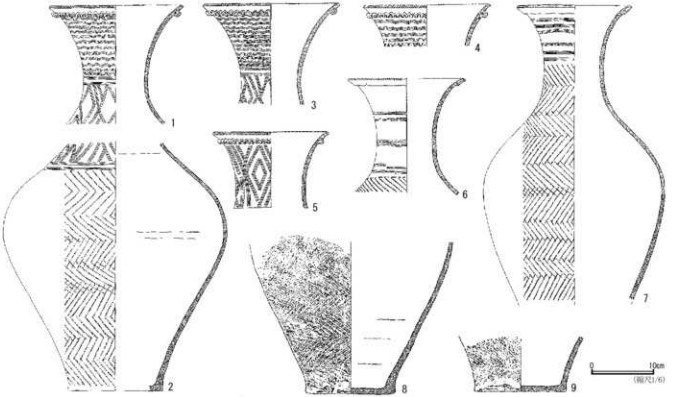
東中根遺跡群の各遺跡について，報告された遺物等を抄録する。その順序は，大川の谷に面して北から南へ，続いて本郷川の谷に面して南から北へ，つまりは，台地の縁をなぞるように進める。大川方面で最も北に位置するのが，野沢前遺跡である。

野沢前遺跡については，井上義安の報告（井上 1968）が唯一のものである。「野沢徳蔵氏（300 坪）と野沢　実氏(300 坪)のごぼう畑」から土器が掘り出され，その一部を提供されたという「総数 239 個」のうち 57 点が報告された（第 163 図）。大型（8）と中・小型（4）に復元された壺形土器が含まれている。櫛描文の形象に



＊括弧内は原報告（藤本 1923）の挿図番号

第 166 図　堂山遺跡の「十王台式」
（1・2 は川崎他 1979 より引用，3・4 は藤本弥城先史資料）



第167図　清水遺跡の土器（1）（井上1968より加筆引用）

は連弧文，波状文，格子状文，菱形文等があり，4本櫛歯による波状文が見られる。「これに伴う胴部の文様は，斜行撚糸文か羽状撚糸文はよくわからない」というように，羽状構成の確実な破片はない。縄文はほとんどが付加条第1種で，付加1条と付加2条がある。「無文の頸部に縄文原体を回転しないで縦に押圧」という土器（5）など，井上が「異質の感を深くする」と記述した2点は，ともに付加2条である。「土器の底面は，布目文を有するもの9個，木葉文7個，無文のもの5個」と記載されている。

4．堂山遺跡の土器

堂山遺跡については，藤本弥城の報告[注5]（藤本1983）と井上義安等の報告（井上他1966，井上1967）がある。

藤本の土器は，「昭和3年頃本遺跡の住人安寅吉氏（故人）が宅地裏の畑を掘った時，土壙のような処から土器が発見された」というもので，33点が報告された。このうち藤本弥城先史資料の中に所在が確認された主要なものについては，同一個体の識別と接合の上，新たに実測して掲載する（第164図）。『日本原始美術』と『弥生式土器集成』に掲載され「天王山式」の系統が窺える壺形土器（1）は，それまで平口縁として図化されていたが，緩やかな波状口縁であることを確認した。大型（10），中型（8），小型（4）の壺形土器があり，小型細頸形の壺形土器（3），大型の甕形土器（9），小型の鉢形土器（16）なども含まれている。櫛描文の形象には連弧文，波状文，格子状文がある。4本櫛歯による波状文の土器（4）は，清水遺跡の土器（第168図1）に法量，形態，文様がよく似ている。藤本は，「大体同一時代の東中根式としてよいと思う」と捉えたが，『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』に掲載された「東中根堂山遺跡出土土器実測図（井上義安氏による）」（第166図1・2）は「十王台式（5期）」であり，藤本が「東中根式」と一括した中にも，2点の「十王台式」（3・4）が混在すると見られる。たとえ同一地点であっても，異なる時期の土器が出土することは，ひたちなか市鷹ノ巣遺跡の住居跡が実例を示している（稲田他2008）。「十王台式」を除外すると，底面の痕跡は，ほぼ木葉痕が占めることになる。

井上等の土器は，1950年代に論文の挿図として掲載されていた旧資料（井上他1967）と，1966（昭和41）年に掘り出されたという新資料（井上1967）である。旧資料では，「無文の口縁部が大きく開きながら内側へ強く屈曲するもの」（第160図D4）を除いた4点が

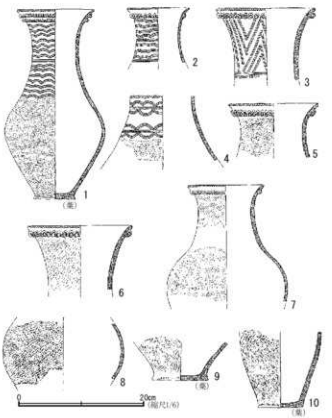
第 168 図　清水遺跡の土器（2）
（1 は鴨志田他 2002，2・3 は鈴木 2010 より加筆引用）

図示された。これは，大型（第 165 図 1），中型（4），小型（3）の壷形土器の組合せである。他に破片が 148 点あったという。新資料は，「僅かに器形を半分程うかがえる土器 2 個と破片数 10 個」のうち 8 点が図示された。これには，超小型の土器の底部(10)も含まれている。櫛描文の形象には，連弧文，格子状文と山形文がある。

5．清水遺跡の土器

清水遺跡についても，井上義安の報告（井上 1968）がほぼ唯一のものである。「地主の安　彦蔵氏の話によると，昭和 40 年 11 月，約 300 坪に及ぶごぼう畑の一地点において，木炭片や灰などと一緒に出土し，他の地点には土器類の出土を全然見なかった」ことから，井上は「一括の資料」と判断した。9 点の土器が図示され，他に破片が 260 点あったという。「土器はすべて広口の長頸壷形土器」，つまり大型細頸形の壷形土器ばかりである（第 167 図）。櫛描文は全て 4 本櫛歯によるもので，波状文と菱形文（1～5），横位区画の直状文のみ（6）も見られる。胴部の縄文は，羽状構成が特徴的であり（2，7～9），「斜行する撚糸文，縄文は全く見られない」と断言された。「土器の底面にはほとんどすべて布目文，木葉文が付されている」が，個々の土器の底面痕跡については記載がない。

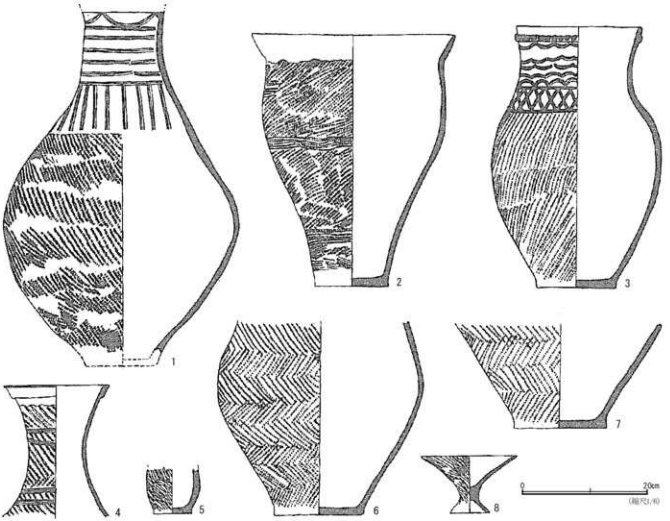
2000・2001（平成 12・13）年度に畑地帯整備事業に伴い実施された調査の報告書（鴨志田他 2002）には，清水遺跡において，「昭和 40 年の 11 月にごぼう耕作の際に他の土器や炭化材，灰などともに一括出土した」という土器が 1 点紹介されている（第 168 図 1）。つまり，



第 169 図　大和田遺跡の土器（1）（井上 1968 より加筆引用）

1の口縁～胴部（勝田市史関係史料の写真より）

＊『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』の実測図（第162図 1）では，頸部が 3 本の櫛描文のように表現されているが，写真を見る限り，井上 1968の実測図（第169図 1）の通り，2 本の平行沈線文である。



第 170 図　大和田遺跡の土器（2）（川崎 1967 より加筆引用）

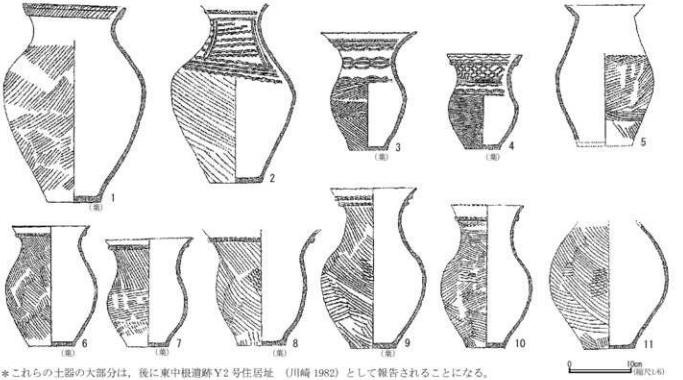
井上が報告した土器群に共伴したと伝えられる土器である。これは，小型の壺形土器であり，井上が報告した大型の土器群とは器種が異なる。櫛描文が 4 本櫛歯であることは井上の報告に共通するものの，胴部は，羽状でなく斜行縄文であった。

2009（平成 21）年度の市内遺跡調査は，土器が出土したという情報をもとに実施された。採集されていた破片は，接合して 2 個体の土器に復元され，1 つ（第 168 図 3）は小型の鉢形土器，もう 1 つ（2）はその蓋に相当し，蓋付土器と考えられるものである。これも，櫛描文は 4 本櫛歯でありながら，鉢形土器の胴部は，斜行縄文である。

6．大和田遺跡の土器

大和田遺跡については，井上義安の報告（井上 1968），川崎純徳の報告（川崎 1967），鴨志田篤二の報告（鴨志田 1969）がある。井上が示した大和田遺跡の範囲と，鴨志田の土器が掘り出された地点を含む 1971（昭和 46）～ 1975（昭和 50）年の発掘調査区は重複せず（第 159 図），これらは，100 m ほど離れた異なる地点から出土した土器である。一方，川崎が報告した土器は，「1967 年 3 月ごろ，ゴボウ耕作中に出土したものであり，所有者の西野茂男氏と御家族の好意によって，川崎をへて勝田市公民館（郷土室）の方へ寄贈されたもの」と記述されただけで，出土した位置の詳細は明らかでない。

井上が報告した土器（第 169 図）は，「昭和 38，41 年に西野富蔵氏の畑で発見されたもの」で，「総数 55 個」の中から 10 点が図示された。9 点（2 ～ 10）は，「すべて同一地点において出土した一括資料」ということで，半截竹管の平行沈線による連弧文の土器（1）は，これらに共伴しない。「一括資料」には，大型（3・4・6）と中・小型（2・8・10）の壺形土器がある。櫛描文の形象には連弧文と山形文があり，「方形の区画」が付



＊これらの土器の大部分は，後に東中根遺跡Y2号住居址（川崎 1982）として報告されることになる。

第 171 図　大和田遺跡の土器（3）（鴨志田 1969 より加筆引用）

加されたもの（8）も見られる。報告された底面痕跡は木葉痕のみである。

川崎が報告した土器（第 170 図）には，形態と文様から，中期後葉に位置付けられる壺形土器（1）と甕形土器（2）が含まれている。また，井上が報告した清水遺跡の土器群に共通し，大型の壺形土器で，櫛描文は横位区画のみが施文されたもの（4），胴部の縄文が羽状を構成するもの（4・5・6）も含まれていて，これらが具体的にどこから出土したものか，気になる所である。底面痕跡等についての記載も欠けている。ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで所在を確認した2点[註6]については，新たに実測して，これを掲載した（第 172 図 1・2）。高坏形と報告された土器（第 170 図 8）については，蓋（第 172 図 2）として図化してある。

鴨志田が報告した土器は，実測図が 11 点（第 171 図），拓本が 7 点である。「50 センチぐらいの深さの所で，ほぼ 5.6 メートルの区域から 11 個の土器が完全なまま出土し，また，土器と共に多数の木炭と，土器の胴部を利用した炉が出土した」という情報もあって，勝田市史編さん事業としての発掘調査が企画された。多量の土器と木炭が掘り出された，この地点からも住居跡が検出され，「Y 2 号住居址」として報告されることになるのである。

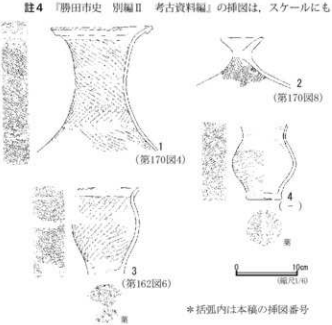
（以下続く）

註1　旧稿「落陽」（鈴木 2007）第 7 図の B と C の挿図が入れ違っていたので，本稿にて訂正する。なお，伊東重敏が挿図に掲載した第 160 図 B 4 の土器は，来歴等が明らかでない。

註2　『弥生式文化研究資料』は，「佐藤次男考古学資料」としてひたちなか市埋蔵文化財調査センターに保管されている。

註3　佐藤次男が編集した「北関東弥生式土器（遺跡）出土地名表」（佐藤編 1952）にも，遺跡は「下区」として記載されている。

註4　『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』の挿図は，スケールにも



＊括弧内は本稿の挿図番号

第 172 図　大和田遺跡の土器（4）

明らかな誤りが多い。これを引用した本稿第 162 図のスケールには「?」を付している。

註 5　藤本弥城先史資料の堂山遺跡については，藤本武が再報告している（藤本武 1991）。一部の土器は，拓本がコラージュのように貼られ完形として復元されているので，引用には注意が必要である。

註 6　第 170 図２の甕形土器についても，所在を確認している。

参考文献

磯崎正彦　1956 「天王山式土器の編年的位置に就いて」『上代文化』第 26 輯　9-21 頁

伊東重敏　1953 「常陸地方弥生式土器に関する系統と時差の問題」『考古学』第 12 号　6-15 頁

井上　義・神永義彦・宮本栄一・井上義安　1966 「茨城県における弥生文化の編年的研究　―勝田市洞山・東茨城郡大洗町岩船山の土器について―」『古代学研究』第 42・43 合併号　1-5 頁

井上義安　1953 「十王台式土器と天王山式土器の関係に就いて」『若木考古』第 26・27 号　2-4 頁

井上義安　1957 「常陸笠谷遺跡出土の弥生式土器に就いて」『古代』第 24 号　13-22 頁

井上義安　1967 「勝田市東中根堂山遺跡」『那珂川の先史遺跡』第 1 集　24-26 頁

井上義安　1968 「勝田市中根大和田・笠谷・野沢前・清水遺跡　―岩船山式土器の研究―」『那珂川の先史遺跡』第 2 集　13-48 頁

井上義安　1969 「勝田市大和田・笠谷・野沢前遺跡の土器」『茨城県弥生式土器集成Ⅰ』茨城県弥生式土器集成グループ　20-25 頁

稲田健一他　2008 『鷹ノ巣　―第２次調査の成果―』（公社報告第 37 集）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鴨志田篤二　1969 「勝田市東中根遺跡出土の弥生式土器」『常総台地』4　15-19 頁

鴨志田篤二他　2002 『東中根遺跡群発掘調査報告書』ひたちなか市遺跡調査会

川崎純徳　1967 「所謂「東中根式土器」の編年的位置について」『常総台地』2　5-9 頁

川崎純徳　1972 『東中根遺跡調査概報（第１次調査のあらまし）』勝田市史編さん内部史料（3）勝田市史編さん委員会

川崎純徳　1973 『東中根遺跡調査概報（第２次調査のあらまし）』勝田市史編さん内部史料（6）勝田市史編さん委員会

川崎純徳　1974 『東中根遺跡調査概報（第３次調査のあらまし）』勝田市史編さん内部史料（9）勝田市史編さん委員会

川崎純徳他　1990 『那珂町の考古学』那珂町

川崎純徳他　1979 『勝田市史　別編Ⅱ　考古資料編』勝田市

川崎純徳他　1982 『勝田市史　別編Ⅲ　東中根遺跡』勝田市

神沢勇一　1968 「北関東地方 II」『弥生式土器集成　本編』2　東京堂　122-123 頁

佐々木義則他　2010 『平成 21 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会

佐藤次男編　1952 「北茨城戦後考古学の活動状況」『考古学』第 1 巻第 3 号　21-23 頁

佐藤次男編　1952 「北関東弥生式土器（遺跡）出土地名表」『考古学』第 1 巻第 4 号　5-22 頁

佐藤次男編　1952 「常北地方考古学動向」『考古学』第 1 巻第 5・6 号　21-23 頁

佐藤次男　1953 「弥生式土器基本形態の地方差　―特に十王台類土器の異常性と東北日本弥生式土器の性格―」『考古学』第 13 号　5-13 頁

杉原荘介　1964 「縄目文土器」『日本原始美術』3 弥生式土器　講談社　145-149 頁

鈴木素行　2007 「落隅　―十王台式土器研究史外伝・4―」『婆良岐考古』第 29 号　31-54 頁

鈴木素行　2010 「東中根清水遺跡の蓋付土器について」『平成 21 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　20-23 頁

鈴木素行　2016 「旧石器・縄文・弥生時代の遺物」『十五郎穴横穴墓群　―東日本最大級の横穴墓群の調査―』（公社報告書代 42 集）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社　93-96 頁

住谷光男　1990 『指洪遺跡群発掘調査報告書』勝田市教育委員会

藤本　武　1991 『藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅴ』勝田市教育委員会

藤本　武　1993 『藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅵ』勝田市教育委員会

藤本弥城　1990 『常陸那珂川下流の弥生土器Ⅲ』（私家版）

Ⅴ　岡田遺跡の鉢形土器について

1．はじめに

岡田遺跡第28次調査の第2号住居跡から出土した土器には，鉢形が含まれていた。整理作業に取り掛かる前に，破片のいくつかを眺めた印象では，口縁部付近に焼成前の穿孔があり，形態も法量も東中根清水遺跡から出土した蓋付土器の土製蓋を連想させた（鈴木2010）。しかし，接合が完了した鉢形土器には，片口が付属しており，土製蓋とは考えられない。本稿では，片口が付属する「十王台式」の土器について検討しておきたい。

2．岡田遺跡の鉢形土器

鉢形土器（第173図）の法量は，器高78㎜，口径141㎜，底径64㎜である。形態は，底部からほぼ直線的に開き，口縁部の付近でやや外反する。口縁部の1箇所には片口が付属する。片口は，鉢形が成形され施文も完了した後，まだ軟らかな状態の口縁部に指を当て，片口の両側を内側に押し込むことで造形されている（鈴木2014）。つまり片口部分を外側に突出させているわけではない。この片口にほぼ対向する位置の口縁部には，焼成前の穿孔がある。円形竹管状の工具で内側から2孔が穿たれている。外側には，孔の周囲に表面の盛り上がり，所謂「バリ」が残る。体部の文様は，縄文のみで構成される。底面は布目痕。器内面の底部付近に赤色顔料が付着し，器外面の底部付近にも赤色に見える部分がある。伴出した壺形土器から，時期は「十王台式3期」（鈴木2013）に位置付けられる。

まずは，「十王台式」の中に片口が付属する鉢形土器の類例を検索することになるが，法量と形態のみならず，口縁部の穿孔，さらに赤色顔料の付着という属性にも注目してみたい。

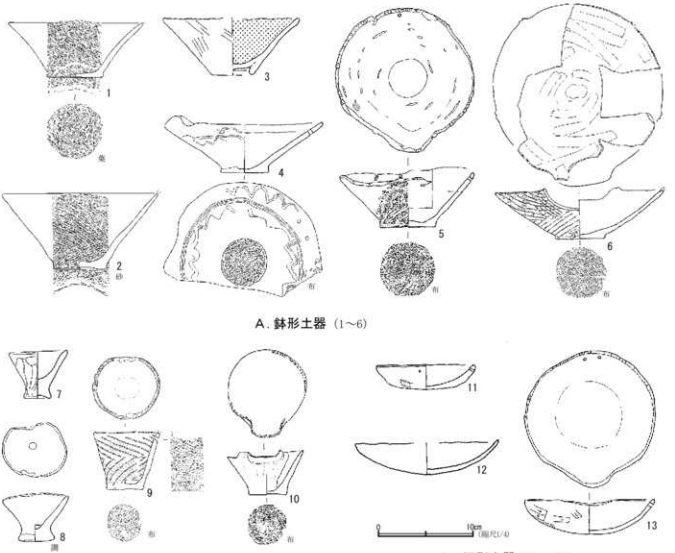
3．片口が付属する鉢形・小型鉢形・坏形土器

岡田遺跡の報告では，これを「鉢形土器」と表記したが，「鉢」「浅鉢」「杯」「皿」等と報告され，小型のものについては「ミニチュア土器」と一括された中に共通する属性の土器を見出した。さらに細別は可能であるにしても，これらを大きく次の3群に大別する。

A．鉢形土器（第174図1～6）　岡田遺跡の鉢形土器に法量と形態が近似する一群は，「鉢」あるいは「浅鉢」「坏」として報告されている。口径が14㎝以上で，口径は器高の2倍ほどになる。片口が付属しないもの（1～3）と付属するもの（4～6）とがある。底部はほとんどが平底であるが，上げ底を呈するもの（2・3）も見られる。体部の文様には，櫛描文（4）と無文（3）もあるが，縄文が典型と捉えられる。口縁部の穿孔については，大畑遺跡（4）と宮後遺跡（5）が，岡田遺跡と同じく片口にほぼ対向して2孔を有する。岡田遺跡も宮後遺跡も，穿孔の位置が真向いより反時計回りの方向にずれるので，一本松遺跡（6）は，その残存状態から，穿孔が無いとは断定できない資料である。片口が付属しないものには，穿孔がない。赤色顔料の付着については，実際に観察した落神遺跡（1）の器内面底部付近にも，これを認めた。石原遺跡（3）の報告には「内面赤彩」が記載されており，赤色顔料の付着は，器内面全体が赤彩されていた痕跡と考えられよう。この一群の鉢形土器は，落神遺跡が「十王台式1期」，大畑遺跡が「2期」，瓜連城跡が「3期」，一本松遺跡が「3・4期」，石原遺跡が「4期」，宮後遺跡が「5期」であり，「十王台式」の全期にわたる。

第173図　岡田遺跡第28次第2号住居跡の鉢形土器

B．小型鉢形土器（第174図7～10）　口径は器高をやや上回る程度であり，Aの鉢形土器とは形態も異なる。この一群を最も特徴付けるのは，口径が8㎝以下と法量が小さなことであり，「コップに似た小型鉢形」（井



A. 鉢形土器（1～6）

B. 小型鉢形土器（7～10）

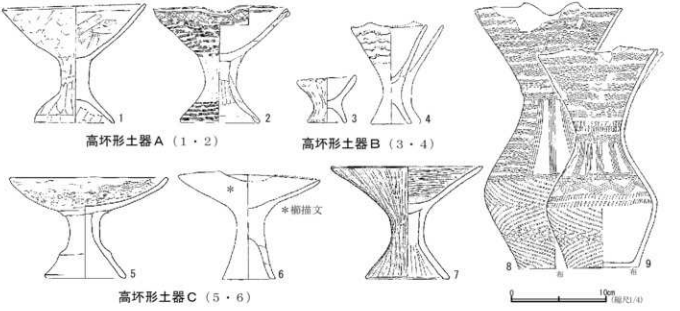
C. 坏形土器（11～13）

（1：落神142住，2：瓜連城跡5住，3：石原4住，4：大畑2住，5：宮後126住，6：一本松Ⅰ-117B住，7：矢倉12住，8：堀口，9：八幡ノ上，10：一本松Ⅱ-85住，11：石原45住，12：石原23住，13：十万原20住）

第174図　片口が付属する土器（1）（各遺跡の報告書より引用，加筆と再実測を含む）

上・斉藤1991）を含み，「ミニチュア土器」として一括されることもある。片口が付属しないもの（7・9）と付属するもの（10）とがある。底部はほとんどが平底であるが，上げ底を呈するもの（7）も見られる。体部の文様には，縄文（9）もあるが，無文が典型と捉えられる。実際に観察した堀口遺跡（8）と一本松遺跡（10）は，器外面が平滑に調整されていたが，この一群には調整が粗雑なものもある。口縁部の穿孔については，八幡ノ上遺跡（4）が1箇所に2孔を有する。一本松遺跡（10）は，これも残存状態から，穿孔が無いとは断定できない資料である。赤彩については，各遺跡の報告にも記載がなく，確認できない。一本松遺跡が「十王台式3・4期」の他，矢倉・堀口・八幡ノ上遺跡とも「3期」であり，「3期」の資料が目立つ。但し，掲載していない石原遺跡第67号住居跡の小型鉢形土器は「4期」である。これは，無文で片口も孔も無い。また，落神遺跡第110号住居址の小型鉢形土器は「十王台式1期」と推定される。これは，無文で口縁部に1孔を有する。

C．坏形土器（第174図11～13）　口径は，器高の3倍以上であり，4倍ほどのものが多い。「坏」あるいは「皿」として報告されている。片口が付属しないもの（11）と付属するもの（12・13）とがある。底部は丸底。「手捏」（11），「粗製」（12）の土器と報告されることもあるように，器表面の調整が粗雑で，全てが無文である。口縁部の穿孔については，十万原遺跡（13）が，岡田遺跡と同じく片口にほぼ対向して2孔を有する。石原遺



（1：一本松Ⅱ~71住，2：富士山9住，3：一本松Ⅰ-101住，4：富士山8住，5：矢倉12住，6：富士山8住，7：一本松Ⅰ~82住，8・9：半分山1住）

第175図　片口が付属する土器（2）（各遺跡の報告書より引用）

跡45住（12）は，1箇所に1孔を有するらしい。赤彩については，各遺跡の報告にも記載がなく，確認できない。十万原遺跡20住が「十王台式2期」の他，十万原遺跡23住・石原遺跡23住・45住とも「3期」であり，「3期」の資料が目立つ。

A・B・Cの3つの形態の土器群には，全てに片口の付属するものが見られた。片口は，内容物を注ぎ出すための装置であり，これらの形態の土器群を土製蓋と捉えることはできない。内容物には，粉・粒状も可能性としては考え得るが，液体を充てるのが最も妥当である。これらは，同じ機能を付与された3つの形態として理解し，一括して土製坏と捉えておきたい。同じ機能を持ちながらも，これら3つの形態の土器群には，土器製作上の優劣が見られる。器面調整の精粗，施文，赤彩などの属性から，全体としてA・B・Cの順位を認める。このような順位は，用途に関わるものではなかったかと想像されるのである。

4．片口が付属する高坏形・壺形土器

片口が付属する「十王台式」の土器としては，高坏形と壺形の方がよく知られている。

高坏形土器は，脚台部が下位に付属することで一括されるが，坏部に相当する上位の形態に着目してみると，やはり大きく3群に大別される。高坏形土器A（第175図1・2）は「A．鉢形土器」，高坏形土器B（3・4）は「B．小型鉢形土器」，高坏形土器C（5・6）は「C．坏形土器」に，それぞれ対応する容量と形態で製作されている。片口が付属しないもの（1・3・5）と片口が付属するもの（2・4・6）があり，口縁部に穿孔を有するものや器内面にも赤彩が施されたもの（7）が見られることも共通している。つまり，土製坏は，土製高坏と同じ機能を付与された異なる器種として理解することができる。土製坏の底部に上げ底が出現するのも，土製高坏との関連によるものなのであろう。土器製作上の優劣は，全体として土製高坏・土製坏の順位を示している。

壺形土器は，法量が小型で，形態が細頸形に限り，片口の付属が見られる。（第175図8・9）。小型細頸形の壺形土器は，煮沸具として使用された痕跡が認められず，頸部が極端に狭く内部に手を入れることができない。これもまた，内容物には液体を充てるのが最も妥当である。おそらくは，飲器である土製高坏・土製坏へと液体を注ぐための容器であったことが推定される。

小型細頸形壺形土器と土製高坏・土製坏について，液体を移し飲むための道具と捉えてみると，日本人にはなんとも馴染み深い徳利と酒坏の組合せに見えてくる。これらもまた酒器ではなかったかと想像されるのである。

5．酒器としての土製高坏と土製坏

ひたちなか市域の船窪遺跡群については，発掘調査で出土した遺物を自らが総覧した上で，報告書をまとめてある。その半分山遺跡（鈴木 2004）では，「十王台式」の住居跡が 25 基検出された。調査区内から出土した「十王台式」の壺形土器の個体数は，口縁部破片からは 253 点，底部破片からは 173 点と推定されている。小型細頸形壺形土器は 10 点で，そのうち片口の付属するものは 3 点が認められた。土製高坏は 12 点が出土していて，小型細頸壺形土器と土製高坏は，ほぼ同数を示している。土製坏は確認されていない。これらは，住居跡 1 基に対して 1 点に満たず，土器群に占める比率からも，日常的な道具ではなかったと見られる。

『魏志倭人伝』には「人性酒を嗜む」と，倭人が酒を飲むことが記述されている。「始め死するや，停喪十余日，時に当たりて肉を食わず，喪主哭泣し，他人就いて歌舞飲酒す」ともあって，葬儀に飲酒があったことも記述されている。特別な祭儀に飲酒が伴うのであり，そのための道具として酒器が準備されたのであろう。

松本芳夫の「日本人と酒」（松本 1970）に，次の一節がある。「日本の神は，超人的よりも，むしろ人間的性格がつよく，人間のよろこぶことは，神もよろこび，人間の好むものは，神もまた好むのだと信じられた。そうして神にささげた御酒は，人間がこれを有難くいただくのであって，ここに神と人間の心的交流がなされたのである」。このような飲酒の場面を思い描くなら，まずは神に捧げる酒がある。その酒を入れた器が土製高坏ではなかったか。次に人間が戴く。その酒を入れた器が土製坏ではなかったか。計画的な祭儀であれば，人数分の土製坏も，前以って準備できる。しかし，特に葬儀のような場合には急拵えで用意しなければならないこともあり，それが粗雑な製作の土製坏として残されたのでないか。これらは，土製高坏と土製坏の優劣，土製坏の優劣の順位に導かれた想像に過ぎない。遺物として検出されていない木製高坏・木製坏は順位の検討に加えておらず，壺形土器の再利用に最終的な形態として出現する鉢形土器を最下位に加えるべきかも未だ定かでない。

破片になると抽出が難しい土製坏ではあるが，これを酒器として捉えると，当時の祭儀の実態が窺える可能性を説き，注意を喚起しておきたい。

本稿に関わる資料見学では，蓼沼香未由氏（大洗町教育委員会），米川鳴敬氏（水戸市教育委員会）にお世話をいただいた。

参考文献

井上義安・斉藤　新　1991 「八幡ノ上遺跡」『茨城県史料　考古資料編　弥生時代』茨城県　75-77 頁

鈴木素行　2004 「半分山遺跡における十王台式土器の分析　―「小祝式梶巾段階」と「武田式西塙・石高段階」の土器群―」『花分山遺跡』（公社報告第 30 集）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社　209-224 頁

鈴木素行　2010 「東中根清水遺跡の蓋付土器について」『平成 21 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』 ひたちなか市教育委員会　20-23 頁

鈴木素行　2013 「旅する「十王台式」 ―弥生時代終末の久慈川・那珂川流域―」『ひたちなか埋文だより』第 38 号　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター　2-4 頁

鈴木素行　2014 「十王台式土器が焼けるまで　―土器の製作と焼成の実験が迫り着いた「その先」―」『茨城県考古学協会誌』第 26 号　47-75 頁

鈴木素行　2014 「茨城県域「十王台式」の土器と社会」『弥生時代後期の北関東』公開講座「ひたちなか市の考古学」第 6 回　公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社　20-32 頁

鈴木素行　2016 「堀口遺跡における弥生時代後期「十王台式」の集落跡について」『平成 27 年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会　56-63 頁

松本芳夫　1970 「古代人と酒」『史学』第 43 巻第 1・2 号　1-26　頁

（遺跡の発掘調査報告書については記載を省略した。）

1　堀口遺跡第 22 次調査区

2　下高井遺跡第 6 次調査区

3　堀口遺跡第 23 次調査区

4　堀口遺跡第 24 次調査区

5　御所内 I 遺跡第 1 次調査区

6　館出遺跡第 2 次，笠谷古墳群 1 次調査区

7　館出遺跡第 2 次調査区

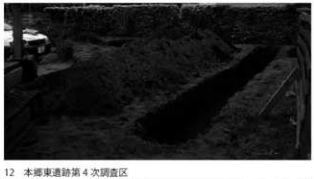
図版 2　試掘調査（2）

8　館出遺跡第 2 次調査区第 11 号住居跡遺物出土状況

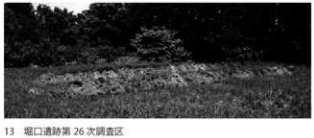
9　館出遺跡第 2 次調査区第 3 号住居跡

10　三反田新堀遺跡第 18 次調査区

11　市毛本郷坪遺跡第 7 次調査区



12　本郷東遺跡第 4 次調査区



13　堀口遺跡第 26 次調査区

14　向坪遺跡第 3 次調査区

15　東原遺跡第 8 次調査区

16　岡田遺跡第 29 次調査区

17　地蔵根遺跡第 2 次調査区

18　市毛本郷坪遺跡第 8 次調査区

19　大平 8 遺跡第 1 次調査区

20　宮前遺跡第 1 次調査区

21　宮前遺跡第 2 次調査区

22　遠原遺跡第 3 次調査区

23　市毛上坪遺跡第 16 次調査区

24　内手遺跡第 2 次調査区

25　向坪遺跡第 5 次調査区

27　磯合古墳群第 3 次調査区

26　筑波台遺跡第 4 次調査区

27　堀口遺跡第 28 次調査区

28　雷遺跡第 5 次調査区

29　金上塙遺跡第 10 次調査区

30　黒神遺跡第 5 次調査区

31　市毛下坪遺跡第 12 次調査区

図版 4　本調査（1）

32　岡田遺跡第 28 次調査区

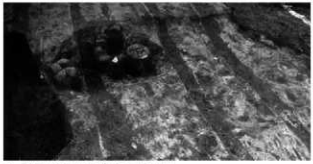
33　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号住居跡

34　岡田遺跡第 28 次調査区第 2 号住居跡

35　岡田遺跡第 28 次調査区第 3A 号住居跡

36　岡田遺跡第 28 次調査区第 3B 号住居跡

37　岡田遺跡第 28 次調査区第 4 号住居跡



38　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号土坑

39　岡田遺跡第 28 次調査区第 1 号溝

40　堀口遺跡第 25 次調査区

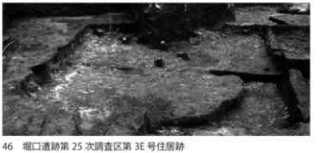
41　堀口遺跡第 25 次調査区第 1 号住居跡

42　堀口遺跡第 25 次調査区第 2 号住居跡

43　堀口遺跡第 25 次調査区第 3A 号住居跡

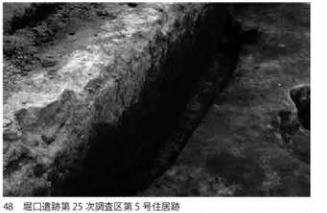
44　堀口遺跡第 25 次調査区第 3B・3C 号住居跡

45　堀口遺跡第 25 次調査区第 3D 号住居跡

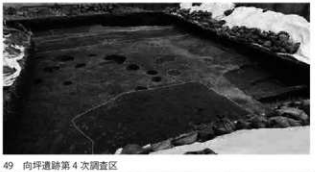


46　堀口遺跡第 25 次調査区第 3E 号住居跡

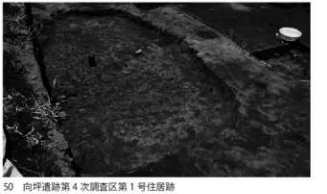
47　堀口遺跡第 25 次調査区第 4 号住居跡



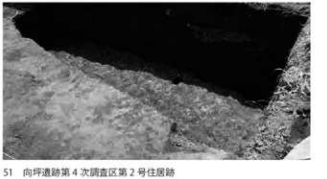
48　堀口遺跡第 25 次調査区第 5 号住居跡



49　向坪遺跡第 4 次調査区



50　向坪遺跡第 4 次調査区第 1 号住居跡



51　向坪遺跡第 4 次調査区第 2 号住居跡

52　向坪遺跡第 4 次調査区第 3 号住居跡

53　向坪遺跡第 4 次調査区第 4 号住居跡

54　向坪遺跡第 4 次調査区第 1 号溝

55　本郷東遺跡第 5 次調査区

56　本郷東遺跡第 5 次調査区第 1 号住居跡

57　本郷東遺跡第 5 次調査区第 2 号住居跡

58　本郷東遺跡第 5 次調査区第 2 号住居跡白色粘土堆積状況

59　本郷東遺跡第 5 次調査区第 3 号住居跡

60　本郷東遺跡第 5 次調査区第 4 号住居跡

報 告 書 抄 録

フリガナ	ヘイセイニジュウハチネンドヒタチナカシナイイセキハックツチョウサホウコクショ
書名	平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
編集者名	佐々木義則
著者名	鈴木素行，稲田健一，佐々木義則
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根3499　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	ひたちなか市教育委員会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市東石川2丁目10番1号
発行年	2017年3月14日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
オカダ 岡田	ひたちなか市 三反田	08221	039	36°22′9″	140°32′34″	21.7m	**201601**	**113㎡**	
				36°22′7″	140°32′33″	20.8m	**201606**	**20㎡**	
ホリゲチ 堀口	ひたちなか市 堀口	08221	004	36°23′18″	140°30′44″	24.9m	**201601**	**19㎡**	
				36°23′25″	140°30′47″	24.2m	201602	56㎡	
				36°23′26″	140°30′42″	24.7m	201603	55㎡	
				36°23′18″	140°30′44″	24.9m	201605	89㎡	
				36°23′14″	140°30′47″	22.7m	201605	26㎡	
				36°23′16″	140°30′45″	23.9m	201611	16㎡	
シモタカイ 下高井	ひたちなか市 三反田	08221	001	36°21′43″	140°33′46″	19.1m	201601	44㎡	
ゴショノウチイチ 御所内1	ひたちなか市 柳沢	08221	235	36°21′27″	140°34′12″	18.4m	201603	17㎡	
タテダシ 館出 カサヤコフンダン 笠谷古墳群	ひたちなか市 中根	08221	075 024	36°22′19″	140°33′58″	21.2m	201603	1,898㎡	
ミタンダシンボリ 三反田新堀	ひたちなか市 三反田	08221	109	36°22′20″	140°32′57″	21.9m	201604	35㎡	
イチゲホンゴウツボ 市毛本郷坪	ひたちなか市 市毛	08221	133	36°23′41″	140°30′21″	27.0m	201605	137㎡	
				36°23′44″	140°30′22″	26.9m	201607	70㎡	
ホンゴウヒガシ 本郷東	ひたちなか市 馬渡	08221	070	36°23′10″	140°34′10″	28.9m	201605	13㎡	
				36°23′10″	140°34′10″	28.9m	201608	94㎡	
ムカイツボ 向坪	ひたちなか市 堀口	08221	129	36°23′23″	140°30′56″	24.8m	201605	38㎡	
				36°23′23″	140°30′56″	24.8m	201607	100㎡	
				36°23′20″	140°30′57″	25.5m	201610	17㎡	
ヒガシハラ 東原	ひたちなか市 高野	08221	061	36°25′59″	140°33′4″	30.8m	201606	32㎡	
ジゾウネ 地蔵根	ひたちなか市 勝倉	08221	119	36°22′35″	140°31′52″	22.9m	201607	90㎡	
オオダイラビー 大平B	ひたちなか市 大平	08221	122	36°22′58″	140°32′15″	23.7m	201608	22㎡	
ミヤマエ 宮前	ひたちなか市 中根	08221	100	36°22′58″	140°33′1″	22.9m	201609	19㎡	
				36°22′58″	140°33′1″	23.1m	201609	19㎡	
トオバラ 遠原	ひたちなか市 金上	08221	034	36°22′40″	140°32′28″	18.1m	201609	26㎡	
イチゲカミツボ 市毛上坪	ひたちなか市 市毛	08221	131	36°23′57″	140°30′4″	27.9m	201609	27㎡	
ウチデ 内手	ひたちなか市 三反田	08221	110	36°22′9″	140°32′49″	21.8m	201610	24㎡	
イツアイコフンダン 磯合古墳群	ひたちなか市 磯崎町	08221	241	36°22′33″	140°37′20″	24.4m	201610	94㎡	
ツクバダイ 筑波台	ひたちなか市 市毛	08221	048	36°23′50″	140°30′4″	26.9m	201611	186㎡	
イカズチ 雷	ひたちなか市 田彦	08221	145	36°24′29″	140°31′17″	27.2m	201611	16㎡	
カネアゲハナワ 金上塙	ひたちなか市 金上	08221	112	36°22′21″	140°32′3″	22.7m	201612	163㎡	
クロバカマ 黒坪	ひたちなか市 津田	08221	007	36°24′14″	140°29′3″	25.3m	201612	23㎡	
イチゲシモツボ 市毛下坪	ひたちなか市 市毛	08221	130	36°23′33″	140°30′14″	25.8m	201612	31㎡	

平成 28 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

平成 29（2017）年 3 月 14 日発行

編　集　公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発　行　ひたちなか市教育委員会

〒 312-8501　茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10 番 1 号

TEL 029-273-0111

公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒 312-0011　茨城県ひたちなか市中根 3499

TEL 029-276-8311

印　刷　株式会社明石屋

〒 311-1225　茨城県ひたちなか市釈迦町 5 番 8 号

VEGETABLE OIL INK
再生紙及び植物油インクを
使用しています。